

---

# エリスの迷宮

くじら

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

エリスの迷宮

### 【Nコード】

N8349A

### 【作者名】

くじら

### 【あらすじ】

夢の中で聞こえてきた気味の悪い闇の声。気に留めてはいたが所詮夢の話。お互いそんな話はせず、そのままいつものように生活していたコナンと哀。しかし闇の声はカウントダウンの宣告した。そして目も眩む光に包まれた・・・

## 1・闇の声

「Sherry・・・秘薬を作りし悪魔よ。」

暗闇の中から声がした。

「薬で死んでいった者たちを屍目に生き続ける気分はいかがかな？」  
闇の声は続けた。

哀の回りから不気味な笑い声も聞こえてくる。

「時間を捻じ曲げた重罪はソナタ自身で償ってもらおう。」

そこは光の無い世界。哀が見回しても人の気配はない。

「いったい誰なの!？」

哀は闇に問うてみた。

「我はずつと傍にいた・・・この世を去った者たちの苦しみを忘れたのか。」

ソナタは科人。ソナタの所為で世界のバランスが狂い始めたことを気にもかけてないからだろう。」

「科人・・・そうね。罪を犯したわ。それを忘れるはずはない。そしてその償いから逃げるつもりもない。」

「刑の執行のカウントダウンが聞こえるかな。償いの刻が近づいているのだ・・・。」

闇の声は消えた。

気がつくともベットの横にあるランプがいつもの部屋を照らしていた。隣から博士のイビキが聞こえてくる。

「・・・またあの夢。」

初めは変な夢を見たと思っていただけ。

しかしこうして毎晩のように気味の悪い声を聞くことになるとは・・・

・  
哀は目を擦りながら起き上がった。  
夢にコナンが出てきたあの日から追いかけてるジンの夢はもう見ない。

しかしそれに替わってこの闇の声が夢に現れた。  
哀はキッチンに立つと水を一杯飲み干した。

「カウントダウン・・・明日はカウント0になる。いったい何の前触れを示しているのだろう・・・。」  
哀は眠れず朝を迎えた。

・・・・・・・・

「コナンっ弱すぎだぜっ！」

元太の呆れた声が響いていた。

せっかくのお休みも雨でサッカーも出来ず探偵団は博士の家に集合。  
代わりにテレビゲームによる米花町カップをスタートさせた。

苦手なコントローラーの操作にサッカーゲームでさえ惨敗中。

刑事たちさえコントロールして難事件を解決するゲームメーカーもモニターに映る名選手をコントロールするのは至難の技。

計算されたはずのオフサイドトラップは歩美に簡単に突破され、光彦のカテナチオにシャットアウト。

元太にはシュート練習の相手にされて、

唯一接戦となった哀との試合もPKを取られ、右か左かと読み合いの上で真ん中に決められるとゲームが崩れてしまった。

とうとう勝ち点も取れずに予選敗退。

今日は特にひどいスコア。

コナンはキッチンの椅子に座り決勝トーナメント第一戦を眺めていたのだった。

元太と歩美の緊迫したゲーム。気合いの入った光彦の応援する声。その後ろでコナンはこっそり欠伸を手で隠していた。

コナンも1週間以上変な夢が続いていた。

「時間を捻じ曲げた科人よ。その手で全てを償え。」

あの意味深な科白と気味の悪い声が未だに耳に残っている。

初めて夢を見た日は父さんのナイトバロンシリーズの最新刊を読んだ夜。

きっとそのイメージが残っていたんだろう思っていた。

それが毎晩続いている。

最近疲れてるのか？そんなことはないだろう。

灰原はどう思うか聞いてみようか？

そつと振り向くとコーヒーを淹れながら欠伸をしていた。

そして歩美たちに隠していた浮かない表情を浮かべていた。

今日はその声がかウントダウン0と宣告するだろうなんて。

こんなクダナイことを聞く雰囲気でもないか？

コナンは気になるあの声の意味をもう1度考えていた。

「わあっ負けちゃった。やっぱり元太くんは強いね。」

「歩美も上手くなったよな。」

「ナイスゲームでした。こんどは僕と灰原さんですね。負けませんよ。」

お互いの健闘を称えあう2人と哀を捜す光彦。

「ほれっオヤツたぞ。ゲームも一休みじゃ。」

博士がみんなに声を掛けた。

「わあっつまそう。」

「哀ちゃんお手伝いしていたんだ。ごめんね。」

「ゲーム中だったんでしょ。それじゃジュースを運んでくれるかしら。」

「ああっ僕も手伝いますよ。」

一斉に子供たちがキッチンに駆けて行く。

「・・・おいおい散らかしっぱなしじゃ踏んじまうぞっ。」

コントローラーを片付けてたコナンは誤ってリモコンを踏んでしまった。

「ホントに踏んじまったぜ・・・テレビ・・・つくかな？」

踏んだりリモコンを試しに押してみるとテレビはニュースを放送した。よく知る刑事たちの姿が映っている。

みんなもニュースを見つめていた

「昨日の事件の死因は心臓麻痺と確認されました。

しかし状況から不審な点が多く遺体遺棄事件として捜査を始めました。」

よく分からない説明をアナウンサーが戸惑いながら伝えている。

・・・まさか・・・アポトキシン？

直感的にそう感じた。

しかしあの冷静なジンがそんな疑いを持たれる様な処理はしないだろう。

そう考えるいつもの冷静なコナンではいらなかった。

全てはあの夢の所為。

思わずコナンは哀の顔を見た。

あいつはどう感じているのだろう。

まだ分からないが薬が使われればあいつが苦しむだろう。

しかし子供たちもいるこの部屋では努めてポーカーフェイスを保っている。

おやつに楽しい会話を続ける部屋の中でコナンも苦しさを感じていた。

決勝戦はまた今度となり散らかした部屋を片付ける。

日が暮れ始め子供たちを家に帰るよう促す夕焼け小焼けのメロディ

が町の中に響き渡った。

歩美たちはまた明日と手を振り家に帰ってゆく。

コナンもみんなと同じように博士の家を後にした。

哀もいつものように玄関でみんなを見送った。

いつもの風景。いつもの仲間。

その中に偽りの存在が溶け込んでいる。

確かに時間を捻じ曲げコナンとして生きている。

それが罪だと言うのならその償いはしよう。

しかしこれは約束の場所に戻るための仮初の姿。

それを否定される訳には行かない。

闇の声よ。

その全ての罪を受け入れよう。

それでもオレは生きて元の姿に戻る。

あの日の誓いは変わらない。

街灯が灯り始めた。

チカチカとその青白い灯りがしつかりとした光となろうとする瞬間。

カウントダウン・・・0

夢じゃない。現実の世界で闇の声が聞こえた。

電線を飛び立つたはずのクラスが羽を広げたまま宙に浮いている。

先を走っていた歩美たち3人が固まっている。元太なんて転びかけたままだった。

すれ違う自転車がバランスを取ったまま停まっている。

そのハンドルを握る男のタバコの煙も漂うことを忘れていた。

コナンを残してすべてが刻が止まった。

「なっなんだっ!？」

いきなり目の前の景色を布のように切り裂き放たれた光が噴出しコ

ナンの体を包み込んだ。

「科人よ。刻がきた。」

・・・この声は確かに・・・

「その手を汚しその心が引き裂かれようともその罪は償わねばならない。」

・・・まさか。正夢とでもいうのか・・・

「死を受け入れず生き残りし科人よ。その罪全てをその体で受け止めよ。」

コナンの姿は光に飲みこまれて消えた・・・



## 1・闇の声（後書き）

くじらです。

ゆっくりめですが頑張ってみたいと思います。  
ヨロシクお願いします。

## 2・黄泉の国

気が付くとそこは見知らぬ世界。

ゴツゴツした岩と赤く染まった砂の大地。

強い日差しに照らされ草木が枯れている。

地面を触れると岩の欠片さえサラサラと砂に変わってゆく。

「ここはどこなんだっ？」

コナンは博士の家を出たばかり。

自分の家を通りすぎ電柱の立つ角を曲がりかけたはず。

一瞬にして博士の家から探偵事務所向かういつもの帰り道が消えた。

「博士……。灰原……。歩美……。元太……。光彦……。」

振り返ってもゲームをしていた博士の家も見送っていた哀の姿も家に向かつて走って行く歩美たちの後姿も消えた。

みんなの名前を叫んでも返事は無くコナン1人きり。

とりあえずこの場所を調べなくては……

人はいるのだろうか？水も確保しないと。

いきなりサバイバル生活に放り込まれたよう。

まずは見晴らしの良さそうな高台にある岩を目指して歩く。

近づいてみるとその大きな岩は白い縄が張られ祭られていた。

「御神体？みたいなものか？」

彫つてある文字は崩れて解読できないでいると犬の遠吠えが聞こえる。

「犬……散歩には似合わない場所だよな。……猟犬にしても狩りをするような場所には見えないし……あとは……野良犬？」

コナンが振り向くと一匹の犬が見える。

愛らしくシッポをフリフリ。そしてその首には何かが巻かれていた。  
「よしっ首輪なら飼い主もいるかもしれないな。」

しかし辺りを見回しても飼い主の影がない。家を抜け出して遊んでいたのかも知れない。

「まあ飼い犬なら家に戻るだろうし・・・。」

暢気に犬が近寄るのを待っている目に映る光景に違和感を覚えた。  
そう岩以外比べるものが回りにない所為だろう。

どんどん近くにつれて予想以上に大きく見えてくる。

「でかいすぎるっ！」

コナンは気が付くと同時に振り返り走り出した。

後ろから象のように大きな柴犬が追いかけてくる。

愛らしい顔のクセしてドスンドスンと重厚感のある力強いスキップ。  
サラサラとした山肌に足を取られるコナンの一歩とそんなことに動

じない犬の一歩。その差は歴然。

数秒後コナンは犬に咥えられていた。

アマガミのつもりなのか噛み砕こうとする意志は感じられない。

しかし犬歯の間にコナンは右足を挟まれていた。

「痛いっ離せっ。」

犬は満足するとスタスタ歩き始める。

「どこへ連れてゆくつもりなんだ・・・。」

噛み切るつもりなら体はとくに引き裂かれているだろう。

もがけば傷口は広がるだけ。

素直に連れて行かれるしかなかった。

「おうっガキを咥えて何してんねん？」

男の声がした。

ウウウウッ・・・ワン。

警戒したのか犬が吠えるとコナンは地面に落とされた。

「もうちーとばかり手加減しろや。」

男は鎧のような防具を身にまとい腰には剣を差していた。

ウウウ・・・ウウ・・・

犬は寂しそうな声を上げる。

「たまには遊んでやるからその子は返してくれへんか？」

ワウーン。

犬は納得したのか名残惜しそうにコナンを舐めるとテクテクと去っていった。

「ありがとうお兄さん・・・って服部じゃねえか！？」

助かったコナンは男の顔を見た。

「目上の者呼び捨てにすなっ！そや俺は服部平次や。なんで俺のこと知ってるんや？おまえは何者やつ！」

平次はコナンに向かって剣を突き出した。

その目は平次が犯人を追い詰めるときの目と同じ。

親友を見る目とは全く違う。

「ハハハ・・・ビビったか坊主？自衛団としてオレの名も知れ渡ってしもうたかもしれへんな。

まあええわ。それより傷は手当せんといかん。どれ見せてみるや。

ー

平次はニヤツと笑うと小さな少年をその場に座らせた。

剣を突き出したそれは口の聞き方を知らない生意気なガキにお灸をすえるようなものだったんだろ。

ぶら下げた袋から薬草を取り出した。

「あいつがケルベロスと呼ばれとる番犬や。あつまだちっさいから社会見学に来てへんか？」

国を訪れる行人が彷徨って鬼に喰われることもあるやろ。

行人を間違え無くベイカシティに辿り着けるよう護衛するのが使命やってことも親や学校で教わってなかったんか？」

そんなこと言われてもコナンに分かるはずが無い。

黙っている。平次が続けた。

「ふう・・・馴れ馴れしいと思った。急に黙りおつて。そう言えば御神体の山には特別な力を持つ玉が埋まっつると言い伝えがあるな。おまえもそれを捜してたんか？」

学者先生が調査したんやで。こないなちっさい子供が簡単に見つかるわけへんやろ。危険やしやめとき。

・・・よし後は左腕や。出してみろ。」

コナンは言われるままにシャツを捲り上げ差し出した。

「・・・ここはどこなんだ？」

コナンはおもむろに聞いてみた。

「へ・・・？」

平次は驚いた。

こんな幼い子供が記憶を失っているのだろうか・・・

「・・・行人なら記憶がないのは当たり前や。けどヘルメスの囁きに誘導されて町に向かうはずなんやけどな。」

「記憶ならあるし今は囁きなんて聞こえもしない。急に光に包まれ気が付いたらこの世界に倒れていたんだ。」

「そないなアホな。この国は俗に黄泉と呼ばれておる。ここは誰でも来れる所やないんやで。」

この場所で生まれ育つた者。それ以外は天ノ国や地ノ獄の使者と行人。

あとは・・・科人と鬼。まさか・・・こないな子供が科人の訳あらへんか？」

平次は黙り込んでしまった。しかしコナンの腕は手際よく傷口を手当していた。

「ありがとう。おかげで楽になりました。」

とりあえずコナンは丁寧な言葉を選んでお礼を言った。

目の前の男は平次にそっくりであつて気の合う西の高校生探偵ではないのだから。

「どこぞで頭を打つたとしか考えられへんな。」

平次はぼそぼそ言いながら考えていた。

「あの・・・。」

返事をしない平次にもう一度声をかけた。

「・・・あつわりい。それやこないなとこにいたら危険やし・・・  
坊主はオレについてこいや。」

「うん。」

コナンもそれに頷いた。

「よしよし素直が一番や。」

平次が指笛を吹いて何かを呼んだ。

すると向こうから砂塵とともに黒と黄色の縞が走ってくる。

「おうっこつちや。」

今度は牛みたいに大きなトラが走ってきた。

「トットラ!？」

さっきまで愛らしい巨大ワンコに啜えられていたコナンは自然と後ずさりした。

「俺の相棒や。怖がらず撫でてみい可愛いで。」

平次はニコニコして顎の下を撫でている。

「それはちよつと・・・。」

「あないに強くアマガミせんから大丈夫やで。」

平次は嫌がるコナンをトラの背に放り投げると2人で山を降りていった。

### 3・鬼の出現 その1

2人に乗せたトラはそのしなやかな身体を躍動させ瘦せた大地を駆け抜ける。

コナンはただただ必死になってその背中にしがみついている。

顔を上げる余裕はない。いつ投げ出されるか分からないほど揺れていた。

揺れの激しさと正反対ののんびりした鼻唄が前から聞こえてきた。

「呑気な……。」

「おうっ何ぞ言ったか？……この曲か？ええやろっ今思いついたんや。なあハンシンもそう思うやろ？」

ハンシンは2人に乗せたトラの名前。名前を呼んだご主人の声に答えるかのように吠えた。

町が見えてきた頃には平次の鼻唄は大きな声に変わっていた。

その熱唱ぶりにコナンの方が恥ずかしくなる。

気が付くとハンシンは耳を折って塞いでいた。よく出来た相棒だ。

この揺れといい小恥ずかしい歌といいコナンは全く考えることに集中できなかった。

相変わらず下を向いているとトラはスピードを落とすゆくり歩き始めた。

「見ろや。あれがベイカシティ。黄泉の国の東の交易の中心なんや。」

「へえっこんな綺麗な町があるとは思わなかったぜ。それでオレをどこに連れて行くんだ？」

「そう急かすなや。」

平次はトラから飛び降りるとコナンに乗せたまま手綱を引き町の中を歩き始めた。

港町だからだろう。

いろいろな衣装を着た人々が集まっている。

威勢のいい売り子の声と値切ろうとするお客の声。

大きな声でおしゃべりしてる男子学生たちとクスクス笑う女子学生たちの声。

いろいろな場所で行われてるパントマイムやジャグリングを囲んで目を輝かせている子供たちの笑い声。

大きな樽やたくさんの野菜や果物を詰め込んだ牛車が道を空けてくれつつ叫ぶ声。

荒れ果てた荒野の先に賑わった町があるなんて信じられなかった。

するとその景色に似合わない不気味な黒マントの男が町の人に見送られている光景が目に入った。

「何かあったのか？」

コナンは異様な壮行会の雰囲気を目を奪われた。

「行人が旅立つ日を迎えたんやな。」

「さつきも話にもでてきたけど行人って何者なんだ？」

「行人とは前世で死を経験してこの国に現れた旅人のことや。彼らはヘルメスの囁きに導かれこの町にくるんや。」

ちーとの間し滞在して神の裁きを使者から伝えられ天ノ国か地ノ獄に旅立つてゆく。」

平次は不憫な記憶喪失の少年に説明した。

「それじゃ現世で死んだってことか？・・・」

コナンがもう一度見ると港に向かった黒マントの顔が見えた。

「テッテキーラー！？」

コナンがトラの背から飛び降りようとするのを平次が制した。

「やめろ。行人になりよった時点でみなが決まっとるんやで。ここですで立ち止まらせるな。」

「離せ。あいつには聞きたいことがあるんだ。」



「それも無理や。オノレが何をしたかどう生きてきたか分からん  
のや。さっき話したろつ。彼らの前世の記憶がほとんどないんや。」

「えっ……。」

「名前やらなんやら生活に困らへん程度の記憶しかないんや。  
前世で殺された者もあるんやで。記憶があればフラッシュバックし  
て恐怖に苛まれる者もあるんやろつな。」

黒い組織の記憶を聞きだすのは無理なのか。

ちよつと待てよ。……オレ自身がこの世界にいるということは前  
世で死んだとでも言うのか？

体を幼児化させて薬による死を免れたのは束の間のことだったのか？  
あの闇の声がヘルメスの囁き……いや……あの声はオレを科人  
と呼んでいた。

オレが行人じゃないならまだ前世で死んだとは限らない。

……戻らなくちゃ……前世に戻るはず。  
まだヤツラを監獄に送り出してもいないんだ。  
そして……

「もう1つ教えてくれ。科人は何者なんだ？」

見知らぬ世界に圧倒されていたコナンもいつもの瞳の輝きを取り戻  
し始めた。

「科人つちゅうのは禁忌を犯したものという意味や。」

「禁忌？」

「詳しくはわからへんが、この世界のバランスを崩した重罪や。」

平次は行人の名を知る少年が唯の記憶喪失ではないと感じていた。  
きつと何かを隠してる。この坊主は何者なのか？

勘みたいなものがぶつきらばうな返事をさせる。

「おめえも知らねえんじゃねえか？」

コナンも疑いながら聞いた。

「もう口に聞き方を忘れたんか！」

これから警備隊本所に行くからそこに分かるヤツがおるやろう。さつさと歩かんかいつ。」

見抜かれたことを隠そうとする気持ちが平次の声を大きくさせた。

バリバリバリ・・・

ガガガガ・・・ガシャーーーン

「町にまで現れたのかっ！」

「だめだー崩れるっ！」

「逃げるのよっ」

「お母さんー！怖いよー！」

「警備隊はまだかっ！」

建物が倒れてゆく。

崩れる音をかき消すほどの無数の悲鳴。泣き叫ぶ子供の声。

「鬼だっ！」

コナンと平次はその声の方を見た。

平次もハンシンに乗るとその声の方向に走らせる。

しかし必死に逃げ惑う人の流れに出くわし先に進むことはできない。

先に飛び降りたコナンは人並みをぬって駆け抜け瓦礫を駆けあがったすると目の前に鬼が立っていた。

「でっでっえっ！これが鬼・・・！？」

コナンはそのグロテスクな風貌と威圧感に圧倒されてしまった。

電信柱くらい高さにある鬼の額には闘牛のような鋭い角を蓄えその目は大きく紅く血走っていた。

鬼の視線に入ったのだらう。いきなりコナンに振り上げた拳が向かってくる。

「あほっ！」

遅れて駆け上ってきた平次に引つ張られ鬼の一撃を避けた。

コナンの後ろにあった建物のベランダが吹っ飛んで消えた。

「鬼は行人を食うんや。そのためには邪魔者を蹴散らして行く。ぼけっとしてたら殺されるで。」

コナンを征して平次は剣を抜いた。

「ここは俺に任せろや。おまえはみんなを避難させてくれ。」

平次は剣を構え鬼に向かって駆け出した。

「任せたぜ。」

コナンは逃げ惑う人々の誘導に向かった。

#### 4・鬼の出現 その2

「オレが相手やつ。」

振り下ろした剣と鬼の手の鋭い爪が甲高い金属音と共に火花を上げる。

まともにパワー勝負はできるわけない。平次は鬼の攻撃を受け流しさらに一撃を加えた。

コナンが避難する方向を大声で叫んで誘導していると声が聞こえる。  
「諦めちゃダメ！誰かつ誰か手を貸してっ！」

瓦礫に足を挟んだ友達を助けようと髪の毛の長い女性が必死になって崩れた材木を押していた。

逃げ惑う人々は自分の事で精一杯。その横を走り去って行く。

「もうだめっ。蘭は早く逃げて！」

「何言ってるのっ！」

彼女はただ一生懸命押している。

「蘭！？園子！？」

コナンは急いで手を貸した。

「坊やありがとう。」

「さあ力を合わせよう。」

伸縮サスペンダーもただのサスペンダー。腕にあるのはただの時計。靴もベルトもこの世界では自慢の道具として使う事が出来なかった。コナンも掛け声を合わせて押してもびくもしない。

「わたしも手伝うわ。」

通りかかった黒マンートの女性も手を貸した。

・・・黒マント・・・行人？・・・自分が鬼に狙われているのに・・・

「・・・ありがとう。お姉さんはもしかして？」

「わたしが狙われていることは知っているわ。でもこの町の人はいそれ  
でわたしを攻めたりしない。

気にしないで・・・だからわたしも困っている人を助けたいの。

さあ力を合わせましょう。」

マントからその顔が見えた。

その顔を忘れるはずがない。この人は・・・

その名前が口から飛び出そうとしたときコナンの背中を突つつく者が  
いた。

「あつハンシン・・・そうか・・・手伝ってくれるんだね。」

避難する人波に流され置いてきぼりをくった平次のトラが手綱を咥  
えていた。

さつそく手綱を材木にくくり付け3人と一匹は声を合わせた。

「せーのっ！・・・せーのっ！・・・せーのっ！あつ動いたっ！」

わずかな隙間で園子の足が抜けた。

「急いでここから離れてないとっ！」

「怖くないよ。3人とも早くこいつの背中につ。」

「坊やは？」

「平次兄ちゃんに避難が済んだことを伝えないと・・・ぼくは大  
丈夫。怪我人がいるんだから急いでっ。」

コナンはトラのお尻を叩いた。

トラは瓦礫の山をもものともせず駆け上がっていった。

コナンが振り返ると鬼と平次の死闘が続いていた。

鬼の動きが速い。しかしそれ以上に速い平次の俊敏な動きに惑わさ  
れていた。

だが鬼のパワーに底が見えない。ダメ ジが少ないのか平次の剣を  
受けても強烈な反撃を企てる。

何度打ちこまれても鬼の手数は減ることはない。

「あかん・・・かな。」

鬼が動くたび建物が破壊され被害は広がるばかり。さすがの平次も苦笑い。そして肩で息をし始めた。

平次に襲いかかるうとする鬼の足元の石段が崩れ一瞬バランスを崩した。

鬼が倒れたときに飛び散った瓦礫が避難する3人へ向かって飛んでゆく。

大きすぎてハンシンのスピードでは避けきれない。

「間に合ってくれっ！」

コナンは思わず手を伸ばした。

「????」

その瞬間瓦礫は宙に浮いたまま止まった。

誰もが逃げるのが精一杯。もちろん3人もそんな事は気が付かない。ハンシンが走り抜けると瓦礫は運動の法則を思い出したように地に落ちゴナゴナに砕けた。

コナンも何が起こったのか分からないで立ち尽くしている。

平次の視界にもその信じられない状況が入ってしまった。

平次の動きが鈍った。

鬼はこん身の力をこめて振りかぶる。

ギューン！

銃声が響いた。

コナンと平次が振り返ると鬼は目を押えてしゃがみ込んでいた。

「銃！？警備隊が到着したのか？・・・どこに？」

振り向いたそこにはイメージした屈強な男たちの姿どころか誰もいない。

「えっ・・・あの銃声は・・・」

噴煙の上がるその向こう。離れた建物の屋上に銃を構えた人影が見えた。

「黒いニット帽の男……赤井？」

アイツもこの世界にいるのだろうか？

前世ではFBIの捜査員と聞くがどんな人物なのか不明。

この世界では敵なのか味方なのかも分からない。

彼のおかげで鬼の動きが止まった。

「もらったあ！」

平次は剣を構え直すと跳びかかった。

ここぞとばかりに鬼の死角に廻りこむ。

鬼も必死に腕を振り回し、切りかかった平次を叩き落とした。

バランスを失った鬼はそのまま横の建物に倒れると姿が消えてしまった。

「助かった……。」

コナンはホッとして座りこんだ。

「おっおまえ今何をしたんだ！？一瞬瓦礫が宙に止まったぞ……不思議な術を使うとは……まさか……こないなガキが科人！？」

「科人って？」

平次は急いでコナンの左のシャツの袖を捲り上げた。

「やはりな。その腕に描かれた青い紋章が証拠や。こないな坊主がそないなもの入れてるとは思わへんかった。」

紋章を確認すると急いで袖を下した。

「しっかり隠しておけよ。オレはおまえを突き出すことはせん。安心しとき。」

「突き出すってどこにだ？」

「科人は災いを連れてくると言われているんや。誰にも見られてへ

んやろな？

急いでこのから逃げるぞ。科人はどないな罪を背負つとるのか分からん。おまえは何をやったんか言うつてみん。」

「大丈夫かつ！」

やつと警備隊が到着した。

「あかんな。いくぞ坊主つ。」

「えつ警備隊の本所に連れていくんじやなかったの？」

「おまえが科人ならそうはいかんやろつ。」

戻ってきたばかりのハンシンに乗ると警備隊の反対の方向に走らせた。

・・・・・・・・・・

町の広場に設営された避難所では救急チームがケガ人の応急処置を施していた。

そこには国の軍部の人間の姿もちろほら見えた。

ハンシンに乗せられた3人はここに届けられていたのだった。

「なんで警備隊が遅れたんだっ！」

民衆の怒りも爆発していた。

「ベイカ城でも警報が響いてたぜ。」

城に出入りしていた商人も鬼の被害を受けていた。

「それじゃお城にも鬼がつ！」

「鬼の姿は見てねえけどが警備隊が攻撃してるのを見たよ。」

避難民はお城が襲われたことを初めて知った。

「それで防衛軍の制服を見かける訳か？」

「さあな。でも鬼が出るなんて十数年振りだぜ。あの時も軍部が動いてたじゃねえか。」

「そうだったな。でも今回は町にまで現れたんだ。非常事態だな。」



「ああ・・・。」

人々の噂話は広まってゆく。不安は掻き立てられるばかり。

「園子痛みはどう？」

「歩くのはちよつと・・・でも痛みは軽くなつた気がする。」

園子は足を押さえながら言った。

「骨に異常はないそうよ。それにしてもさっきの坊やは戻ってこないわね。」

黒マントの女性が気になって辺りを見回していた。

「私たちを乗せたトラをハンシンと呼んでいたし服部くんの名前を知っていたしあの子はきつと彼の知り合いね。」

「ああ新一くんの友達の・・・そういえば彼はまだ戻ってこないわね・・・。」

「うん・・・でも必ず帰ってくるよ。信じてるもの。」

「その彼はあなたの恋人さんかな？」

「いいいいえっそんなんじや。」

「違うのよ。ダンナよ。ダンナッ！」

3人が話していると軍服を着た男が黒マントの女性に声をかけてきた。

「我々は国家防衛軍のものです。今回出現した鬼についてお話を聞かせてもらえませんか？」

「はっはい。かまいませんが。」

「ではこちらにお願いします。」

兵が彼女を連れてゆく。

「ちよつと待つてください。・・・ありがとうございます。おかげで助かりました。」

兵に断り足を止めた彼女に蘭は頭を下げた。

「いいえ。困ったときはお互い様よ。」

彼女はにこつと笑った。

「お名前だけでも教えてくださいますか？」

「明美。宮野明美といいます。ではまたお会いできたら・・・園子さんお大事に。」

彼女は頭を下げ兵の後ろをついてゆく。

蘭は黒マントの彼女が向かう先に立つ美しい女性と一瞬目が合った。

「ねえ園子。あの人も軍の人？」

「ああ。パーティーでお父様に挨拶してたわ。防衛軍司令官の新しい秘書のクリスさん。」

確かクリス・ヴィンヤードさんだったかしら。」

クリスは薄笑いを浮かべゆっくりとその場を去っていった。

## 5・消えた2人

もう鼻唄などは聞こえてこない。

平次は後を追う者がいないか注意深く辺りを確認しながらハンシンを走らせた。

それだけ慎重にならざるえないということは鬼とはまた違った意味で科人も危険な存在なのだろうか？

街で遭遇した鬼は子供の頃に母さんに読んでもらった本に出て来る空想の生き物。

鬼門と言われる丑寅の方位の通り鬼は牛の角を持ち寅の毛皮をまとっていた。

しかしここ黄泉の国はハデスが統治する冥界。

例えゼウスでもポセイドンでも自由に訪れ出て行くことはできない。それは鬼にとっても同じこと。

ならば誰がどうやってこの地に鬼を送りこんだのだろうか？

あの闇の声の仕業ならば科人と呼ばれるオレも同じなのだろうか？

ハンシンが急にスピードを落として歩き始めた。

場所を確認するかのように平次の顔をときおり覗く。

町の中心から御神体に戻るように走って着いた場所は静かのんびりとした住宅街。

平次の視線の先は石で積み上げられた円柱のちよつと変わった建物があった。

ドカ                    ン！バリバリバリー！

門をくぐるといきなりの爆発音。

また鬼が出たのかと辺りを見回すがその姿は無い。

音の発信源はやはり目の前の建物だと思えるがこの爆音に馴れているのか近所の住人が驚いて飛び出してくる気配も無かった。

静まり返った建物の窓からだたゆっくりと煙が上がっていった。

「・・・いつものことや。気にせんでええよ。」

平次も爆音を気にも留めていなかった。

しかしコナンには不気味さは増すばかり。

平次の後ろについて玄関に向かった。

ガチャンッダダダダ・・・

「あちちちっ・・・。」

いきなりドアが開き白髪でヒゲを蓄えた老人が飛び出してきた。

焦げ臭い上着を一生懸命叩いている。

「博士？・・・阿笠博士か？」

コナンはその顔に驚いて現世の知り合いの名を呼んだ。

「ん？いかにもわしは阿笠だが・・・見覚えのあるような無いような・・・はて？・・・服部くんこの子は誰なんじゃ？」

「江戸川コナン・・・探偵さ。」

コナンはいつもように名乗った。

「コイツを御神体の近くで拾ったんや。・・・まあ詳しくは中で話そうか。」

「ふむ・・・何か込み入った話じゃな。」

博士は見知らぬ少年の素性も気にすることなく部屋に迎え入れた。

博士は招き入れた2人をテーブルに案内するとロウソクを灯した。テーブルの横に旧式の大きなラジオがあるがさすがにパソコンやテレビは無い。

部屋のまん中には炉があり蒸留器が載せられ、

机にはフラスコやビーカーと一緒にガラス瓶に入れられた薬品が並べられている。

その奥には大きな本棚。それでも詰め込めない蔵書が床にたくさんの山を作っていた。

ここはまるで魔法使いの住処のよう。

「危ないから悪戯するんでないぞ。」

そう言う博士は客人にコーヒーを淹れ始めた。

「じーさんは歴史研究家なんやけど爆発を起こすのが趣味みたいなもんや。下手に触ると唯じゃ済まんぞ。」

平次は笑いながら言った。

「じーさんは止めてくれんかのう。」

これでも52歳。花の独身まだまだ若いんじや。服部くんは新一と同じで口が悪いからのう。

「……おおっそうじゃった……。この子は新一の小さい頃に似てるな。」

「新一ってもしかして工藤新一？」

目の前に博士と平次に顔も声もそっくりで名前までも同じ人物がいる。

さっきの現場には蘭も園子もそして赤井も……

そんな安易な思いながらもこの世界にはオレと同じ人間までいるのかコナンは聞いてみた。

「おまえ工藤も知っているんか？」

「あついや……。まあ。」

しかしこの世界の工藤新一は明らかに別人のこと。向けられた視線に重いものを感じるがそれは嘘じゃない。

その問いにコナンは首を振った。

「新一は隣の家に住んでおったんじや。」

「工藤はオレの目の前で消えたんや。ちょうどおまえと会ったあの場所や。」

そしてもう1人。ここでじーさんの研究に協力しとった宮野志保っちゅう姉ちゃんもや。

搜索を続けとるが未だみつからん。」

平次が悔しそうに言った。

「わしの娘同然に暮らしておった志保くんも見つからんのじゃ。」

博士は寂しそうに下を向いてしまった。

「オレにも和葉っちゅう煩い幼馴染がおる。

東に視察に来て離れて暮らしてるとわかるもんや。

オレの耳にあの声が染みついているんやな。あの煩さはかなわんが静か過ぎて物足りん。

けどオレの目の前で消えちまったアイツをそのままに西に帰るわけにはいかんのや。

必ず見つけてあの姉ちゃんの元に連れて帰ると約束したんや。」

その目は閉じたまま平次は腕を組み話した。

「彼女をそのまま残したままでもいいのか？」

コナンは聞きづらい質問をした。

「いいと言えば嘘やな。でもオレのワガママかもしれへんけど工藤を見つけた後でもアイツと逢えるから。」

それは彼自身に言い聞かせているように見えた。

「おおっそうじゃ。込み入った話とは何じゃな？」

コーヒーを運んできた博士は椅子に座って聞いた。

「これや。」

平次はコナンの袖をあげて博士に紋章を見せた。

「こっこれはっ！・・・この少年は科人じゃったのか。」

博士はその紋章をレンズで拡大して詳しく確認した。

「ああ驚いたで。不思議な術を使いよるし。」

「確かに・・・間違いない。」

博士は平次の話に頷いた。

「・・・博士は科人について何か知ってるのか？」

コナンは恐る恐る聞いた。意味深な闇の声が頭の中を駆け巡る。

「科人は鬼と共にこの国に幾度と無く現れるが詳しくは分かっとなんじや。」

古文書を調べてみても鬼については書いていても科人について記述が少ないのじやよ。

そのため科人に対して人々は鬼を呼び寄せる者とか災いを連れてくる者だとか言われておる。

さらに科人はあの鬼を操るという説がある。

もし君の正体を知った民衆は警備隊や国軍に報告して町から排除しようとするじやろう。」

「そんな・・・。」

ため息が漏れた。それならなぜ服部はオレをここに連れてきたのだろう。

コナンは表情を変えずに話す博士の様子を伺っていた。

「上の世界のことは下の世界のことと似ている。錬金術の言葉じや。

これは天と地。太陽と月。もしかしたら現世とこの黄泉の国も似ているんじゃないかと思うんじゃないかコナンくんはどう思うかのう？」

「どう思っつて？」

全く知らない世界の常識に謎掛けみたいな質問にさすがに躊躇した。

「きみは行人の名を知っておろう。」

博士はコナンの表情を見た。

「そやつ確かコイツ・・・。」

平次も頷いた。

「・・・やはり知っておるか。それでもわしは歴史研究家じゃぞ。おぼろげながらその正体を掴みかけておる。

科人は生きながら黄泉の国に送りこまれた現世の人間だと考えておるんじゃないか如何かな？」

「ああ。その通り現世の人間だ。・・・いきなり声がして。」

黄泉の国の阿笠博士はコナンを現世の人間だと答えを見付け出して

いる。このまま正体を隠しても意味が無い。

「それはヘルメス神の声じゃ。そしてその腕の紋章はヘルメスの印。神殿に祭られている玉にその腕と同じ紋章が刻まれておる。

その紋章は不思議な力を引き出す陣ではないかと考えられておるんじゃない。」

「これが・・・。」

コナンは腕に付けられた紋章を擦った。

「この国の王は神のお告げを聞くことが出来る神官の代表。代々管理する神殿の奥底に鎮座する玉を通して執り行っておる。

しかしそんな玉を使わずに神と交信し不思議な術を使う科人の存在が神の代理で国を統治する彼らに不都合なのじゃよ。

鬼と科人の関係がはつきりしないまま民衆に情報操作を行っているのじゃ。」

「・・・そんな。」

ため息が漏れた。

なんとなく分かる気もする。ここは隔離された特別な世界。

何か敵視するものが無ければ突然現れる鬼の恐怖に不安を掻き立てるだけなのかもしれない。

しかしいつかその反動が現れるもの。このままで良い訳ではない。

「だから工藤と自衛団を作ったんや。この国では自分の目で真実を探し出すしかないからってな。」

「わしにはそんな説がどこから出てきたのか解らんし、研究家として根拠なしにそんな説に賛同できん。

学会から謹慎処分にされようともその考えは変わらんよ。

君を神がこの地に呼び出したのなら君がやるべき使命があるからだろう。

神が創造したこの世界を壊すために君を鬼を呼ぶなんて考えられん。わしは科人が危険な存在とは考えておらんし、この国で罪を犯した訳じゃない君を突き出すことはしない。



もし居場所がなければここにおればよい。服部くんの部屋の隣が空いてるだろう。

ただこの巡りあわせも何かの縁。未だ見つからぬ新一と志保くんの搜索を手伝って欲しいのじゃが？　どうか江戸川くん。」

「コナンでいいよ。そうしてもらえると助かるけど迷惑になるのでは？」

「かまわへんよ。これだけ好き勝手に爆発をさせてれば役人なんか近寄らんしな。」

平次が笑いながら言う。

「・・・それじゃ2人を捜す手掛かりは何か残っているのか？」

「残念ながらこれと言ったものは無いんじゃない。」

「科人なら出来ることがあるかもしれない。」

まだ自分に何が出来るとか分からないけど捜してみるよ。」

コナンは悔しそうな博士に手を差し伸べた。

コトン・・・

「だっ 誰や！」

小さな物音に平次が叫んだ。

コナンはいつものクセで膝をつきこの世界では使えないキック力増強シューズのくるぶしの辺りに手を当てていた。

平次も腰の剣の柄を握ってゆっくり動き出した影が出て来るのを待ち構えていた。

「・・・ごめんなさい。お留守かと思ったから・・・。」

可愛らしい聞き覚えがある少女の声。

「だってよ。返事がないけどロウソクの灯りが見えたからな。」

「火事になったら大変ですしね。」

歩美を先頭に元太と光彦の3人が出て来た。

「おまえらか。脅かすなや。」

「歩美っ元太、光彦っ！」

また知っている顔の登場にコナンは驚いた。

そして3人が現世と同じように一緒にいることが嬉しかった。

「君は恥ずかしがり屋さんかな。隠れなくても大丈夫だよ。」

「見たことないやつだな。なぜオレたちの名前を知っているんだ？」

「君は引つ越してきたばかりですか？」

歩美はコナンと視線を合わすように座って、元太はぶつきらぼうに、光彦は丁寧に聞いてきた。

3人は部屋にいた同い年くらいの少年に興味津々。

「あつオレは江戸川コナン。」

「ハハハハ・・・変な名前っ！」

「ふんっ笑つてろっ。」

やはり初対面のとときと同じ。聞こえないように呟いた。

「それよりおまえら大丈夫だったんか。町に鬼が出たんやで。」

「ええっそうだったの？」

「全く知りませんでした。」

「俺たち御神体に行つてたから・・・。」

「おいっあそこは子供だけで行つてはあかんって言つたやろくに。」

「だってケロちゃんとおやつ食べようと思つてお菓子持つてあげたんだ。」

「ケロちゃんやて？」

「うん。おつきいワンコ。一緒に遊んだんだ。大きな背中に乗せてもらつたりしたよ。」

「ハハハ・・・やつぱり。ケロベロスって魔犬とか言われてなかったっけ。」

コナンが平次に拾われた場所で思いつくものはただ1つ。

「まったくガキの菓子にツラれてたんか。」

ケロベロスがコナンに絡んでいたのは子供たちが遊びに来るのを待っていたからだろう。

子供たちの冒険心に驚かされるやらケロちゃんに呆れるやら・・・  
「でも今日は可愛い女の子もいましたよ。」

「博士んとこにいる姉ちゃんに似てたって歩美が言ってたな。」

「かわいいの。そして緋色の髪も志保お姉さんと同じだったよ。」

歩美はお友達になりたいなって声をかけたかったけど兵隊さんがいたし……。」

「そのまま連れていかれたんですよ。あれは軍のマークです。間違いないですよ。」

……灰原か？

「おまえの知つとるヤツか？」

平次がそつと聞いた。

「そつかもしれねえ。」

この世界の工藤新一が消えて江戸川コナンが流されてきた。

そしてこの世界の宮野志保が消えた。この世界に流されてくるのは・

・

もし灰原ならばオレと同じ科人なのだろう。民衆は科人を排除する・

・このまま放って置くわけには行かない。

「城を覗いてみるか？」

「ああ。付き合ってくれるか？」

「まかせろや。」

「ちよつと待ちなさい。」

ガタガタと家を出ていこうとする2人を博士は止めた。

その視線は興味津々の子供たちを見ている。

2人は仕切り直すしかないと立ち止まっていた。

「城が何者かに襲われたようじゃ。厳戒態勢じゃ追い返されるだけじゃぞ。」

博士の言葉に子供たちもつまらなそうな顔をする。

「しゃあねえな。様子を見るか。」

コナンは白々しく諦めの言葉を吐く。

「それよりおめえらは家に帰って両親に無事な顔を見せなくちゃダ

メヤど。」

「「「はい。」」」

3人は良い返事をするとう帰っていった。

「じゃあな。」「気をつけて帰るんやぞ。」

子供たちを追い返すと博士は2人に話した。

「夜まで待ちなさい。わしの知る裏ルートを教えよう。」

## 5 消えた2人（後書き）

06・09・10更新に合わせて前話までの関西弁を修整して見ました。関西弁は難しいですね。勉強不足です。  
byくじら

## 6・囚われの少女

きれいな月が昇っていた。

その崇高な光は街のシンボルでもある壮大な城をくつきりと浮かび上がらせていた。

目的を達成できずに後退した賊を警戒した多くの兵士の姿も映してだしている。

星の声が聞こえてきそうな静かな夜。

静寂を邪魔するように言葉を発するもの者もない。

兵士たちもただ決められた持ち場に立ち続けている。

その顔は白く無表情の人形の様。

月の明かりの所為だけじゃないだろう。

そして彼らの荒い息遣いと手にした銃が震える音が絶えることは無かった。

城内の一室では將軍の高笑いが聞こえていた。

「国王に天ノ国と地ノ獄の使者が接見したそうだ。やつらが疑おうとも証拠がある訳じゃない。」

將軍は部下である司令官とその秘書官に深く座っていたイスから乗り出して言った。

シテヤツタリとまるで子供のように喜びを抑えきれないよう。

「でしょうな。国王が知るよしも無いこと……。全ては將軍の計画どおりです。」

司令官は將軍のご機嫌取りに終始していた。クリスもため息を殺して頷いた。

「ハハハ……。あの国王じゃ計画が完了するまで気付くことはなからう。気の毒にあの地ノ獄の使者の冷たい目は心臓に悪いと溢しておったわ。」

「確かに凍りつくような視線のあの男は只者ではないですな。」

司令官はわざと首を窄めて見せた。

「国王はまだしも使者どもには注意を怠るでないぞ。」

「ははっかしこまりました。」

將軍の指示に司令官は慌てて敬礼した。

「それにしても無垢な科人を手に入れた。これで我々に新たな力が手に入るというものだ。」

クリスくんもご苦労であった。きみのような優秀な人材が埋もれていたなんて未だに信じられんよ。」

「恐れ入ります。ではわたしはこれで失礼します。」

「急ぐ必要はなかるう。どうだ、うまいワインが手に入ったのだが？」

一礼してドアに向かおうとするクリスを將軍が止めた。

「せっかくの將軍からのお誘いだぞ。急用もなかるうにつ。」

司令官は上ずった声で引きとめる。

「いえ。例の盗賊団がまた現れるかもしれません。」

「・・・そうだった。そうだな。多く兵が警戒していると言つのに大將のワシが緩んでいては示しがつかんな。」

「夢が叶うアイテムが揃ったためでたい日でもあります。それも人の心。仕方が無いことです。」

「人の心か・・・そんなものがわしにも残っておったか・・・。」

「將軍に人の心の無いあの鬼のようになられてはわたしくの職を失います。」

「ふむ・・・ではクリスよろしく頼んだぞ。」

「はい。」

クリスは將軍の執務室を出た。部屋からはご機嫌をとり損ねた司令官を戒める將軍の声が聞こえていた。

「どっちもどっち。」

廊下を歩くクリスはやっとため息を吐いた。

国王が何も知らないとも思えない。そして接見を申し込んできた使者どもが気づいてない訳が無い。

潜りこんだネズミの一匹を内々に処理したばかり。

まだ声を潜めて覗き見してる輩が城の中を徘徊しているだろう。それを気付かずに浮かれているなんて組織が緩みすぎている。

だからこそ潜り込んでこの地位を手に入れられたのだが・・・。  
しかしアイテムが揃いつつある。

わたしに与えられた使命とは何なのだろう？

神はわたしに何をさせようとしているのだろうか？  
そつと左の二の腕に触れた。

「ベルモット・・・。」

男がすれ違いざまに声を掛けて来た。

「ここではその名を言わぬ約束でしょう。カルパドス。」  
クリスは顔色も変えずに答えた。

カルパドス・・・FBIに捕まる前に自決を選んだ男。  
キャンティ―は彼がわたしに惚れていたと言っていた。  
組織には一筋縄ではいかぬ猛者が揃っている。

捕まるなどそのプライドが許すはずがない。躊躇いも無く死を選んだ。  
この世界でも頼りになるわたしの協力者。

「・・・そうだったな。」

「油断大敵よ。城のヤツらは調子が良過ぎるからね。」

「それに腕はイマイチだな。」

「あの白いヤツはまた現れるだろう。神殿の玉が偽物だと気がついたようだからな。」

「ああ、今度こそ仕留める。」



「頼んだわよ。わたしは司令室に戻る。何かあったら連絡してこないかしら。」

「OK。」

男は持ち場に帰っていった。

カルパドスに2度目は無いだろう。

しかし気になるのは2つ。

カルパドスのスコープに収められながら逃げおおせた邪魔者の目的。そしてあの坊やまでこの世界に巻き込まれていないこと祈るだけ。

哀が気が付くと大きなベットに寝かされていた。

どこかの王朝の王様や妃様が使うみたいなたいなベットはその脚が上に伸び専用の屋根まであった。

頭の奥に鈍い痛みを感じる。

気を失ったのは途中で嗅がされた薬の所為だろう。

哀はぼんやりとした小さなろうそくの灯る部屋を見渡した。

そこには誰もいない。哀ひとり。

アンティークな家具に囲まれタイムスリップしたかのよう。

一つ一つが丁寧に漆のような独特の光沢が時代を感じさせた。  
私は確か・・・

.....

哀は夕焼け小焼けのメロディを博士の家の前で聞いた。

「ばいばい哀ちゃん。」

「また明日。さようなら灰原さん。」

「じゃあな。」

夕焼け空のした少年探偵団はそれぞれの家路についた。ちよつと遅れて工藤くんも探偵事務所に帰っていった。哀はそれを玄関先で見送った。

その後気味の悪いあの声がカウントダウン0を宣言した。見慣れた景色が布のように切り裂かれ光に包まれた。

気が付いたときには荒れ果てた見知らぬ土地に1人座り込んでいた。甲冑をまとった男たちが現れ囲まれていた。

その屈強な男たちの銃口は明らかに哀に向けられている。抵抗することはできない。

ただその銃口が小刻みに震えているのが不思議だった。

こんな小さなしかも女の子に何を怖いと思っているのだろうか？  
その中の1人が上ずった声で哀に車に乗るよう指示した。  
黙って従う哀の後ろから手が伸びで・・・

・・・・・・

「あのまま連れて来られたのね。」

闇の声は罪を償えと言った。

しかしこの部屋を見る限り丁重に扱われている。

果たしてここはどこなのだろう？

ドアの向こうに人の気配を感じる。

監視付きで幽閉するなら部屋の窓に鉄柵がないのが不思議に思えた。  
恐る恐る窓に近づき外を見た。

「・・・なるほどね。」

ここは大きな城の高い塔。

誰もがここから逃げるなんて考えないだろう。

しかし死を覚悟した人にはあまりに無防備。

「少し前のわたしなら状況によって……。」

そんなことをふと思いついた自分はまだまだなのかもしれない。

窓から眺める街並みは絵本の世界のよう。

「歩美ちゃんがいたら……。」

この世界に来てから彼女の声を聞いたような気がした。

彼女が隣にいたら楽しそうに眺めているだろう。

でも安らぎをくれる友達はいない。

訳も分からないうちに飛ばされた見知らぬ世界。

そして哀は科人。この世界でどんな償いを求められているのだろうか。

罪は罪。償いはもちろんのこと。

でも哀には哀にしかできない使命がある。工藤くんを元の姿に戻すこと。

心の中には早く元の世界に戻らなければならない気持ちとやっと誰かに裁かれるホッとした気持ちが同居している。

気持ちはふらふら空を飛んでいた。

扉の向こうからの金属片が交わる音に飛んでいた気持ちが戻ってきた。

それは甲冑の男たちの腰にあった剣なのだろう。外に立っている番人の交代の時刻なのかもしれない。

大きな号令と規則正しい足音が響く。

そして話し声が聞こえてきた。

「異常なし。部屋は静かなもんだ。あの娘はまだ眠っているようだ。」

「了解。そう言えばおまえさんは聞いたか？ 昼間に城を攻撃したの

は鬼じゃないようだぜ。」

「ホントかよ。いったい何者なんだ？」

「白い盗賊団って呼ばれる例のドロボウさ。なんでも国王の神殿の玉が狙われたらしい。今回はクリス秘書官が連れてきた男が死守したそうだ。」

「やはり噂通りの凄腕か。それにしても他の警備の連中はどうしたんだ？」

「薬で眠らされてたんだと。内勤の連中は油断してるからな。」

「でもなぜ玉を狙うんだ？神官でもなければ使うことは出来ないのに？」

「さあな。ドロボウの考えることなんてさっぱりわからねえよ。」

「今夜は緊急配備だから呼び出しがあるかもしれねえから注意しろよ。」

「ああっそうするよ。お先に休ましてもらっぜ。」

交代して1人の男が去っていった。

この世界には鬼がいる？

そして続いて聞こえた国王の神殿、玉、盗賊団。

男たちの会話からも絵本に出て来るような言葉が並ぶ。

そんな世界でわたしなんかを幽閉する意味があるのだろうか？

更に訳が分からなくなる。

また窓際のイスに座り直して外を眺めていた。

月がとてもきれいだった。

お姉ちゃんが読んでくれたピーターパンのお話。

ティンカーベルが現れそうな静かな夜。

星が流れた。

哀が目を奪われていると声が聞こえた。

「お嬢さん。風邪引きますよ。」

気が付くと窓の外に白い影が立っていた。

「怪盗キッド!?」

「ほうつそんな呼び名は初めてですね。」

その姿はキッドに間違いないはずなのに・・・改めて違う世界にいることを実感した。

「もしかして白い盗賊団は怪盗キッド。あなたのことなのね。」

「白い盗賊団と呼ばれてますがわたしとしては気に入らない名ですね。」

更に1人のドロボウを捕まえられないと非難を浴びるので団を付けているようです。

それより・・・ふむ・・・怪盗キッド。その呼び名は気に入りました。

予告状を届けに来たのですがイマイチしっくり来なかったので使わせていただきますよ。」

「まあ・・・いいんじゃないかしら。」

「それではお礼をしたいのですが何かご要望はありますか?」

「・・・別に。」

「お嬢さんはこの部屋に閉じ込められているのでしょうか。外へ出して差し上げましょう?」

「わたしは罪を償うためにこの世界に飛ばされた科人なのよ。」

「科人? お嬢さんが? うむ・・・それでは本当かどうか腕を捲って見せていただきたい。」

哀は言われるままに腕を捲くってみた。

「えっ! いつの間に・・・」

そこには知らぬ間に痣のようなものがあつた。

「まさしくヘルメスの印。」

「ヘルメス・・・死神の?」

「ここは黄泉の国。ハデス神の統治する冥界ですよ。この地に導くものは死神でも可笑しくはないでしょう。」

「ふふ・・・ふ・・・。」

哀は自分の愚かさを笑った。

黄泉の国では死んだのも同然。やはり死でしか償えなかったのか。それは逃げてしまったことになる。

彼との約束を果たす前に逃げてしまった。

もう工藤新一が戻ることは無い。

彼にそして彼女に謝ることも出来ない。

「いろいろ抱えているようですね。」

「いくら泥棒でも人の心を覗くのは遠慮してもらいたい時もあるわ。」

哀のポーカーフフェイスも限界に近い。

「失礼しました小さなレディ。しかし科人は現世の死者である行人とは違います。」

わたしも詳しくは知りませんが科人はこの世界で特別な存在だと聞いています。」

「特別と言われても私自身何も分からない。」

「思い詰めると体に悪いです。」

ヘルメスは死神とも言われますが旅行の神とも言われています。そして我々ドロボウの神とも。

わたしは仕事をしてきますか。また伺いましょう。そのときまで願いをとっておきましょうか。」

「そうしてもらえると助かるわ。」

「お疲れのようです。今夜はふつくらしたベットでゆっくり休まれた方がいいかもしれません。ではご自愛下さいませ。失礼っ。」

白い影は月の照らす夜空を舞った。

## 7・黒い再会

白い訪問者を見送った哀の後ろの扉で物音がした。  
振り返るとガチャガチャと扉が悲鳴を上げる。

「だつ誰か居るんだろっ!？」

慌てた見張りの兵が剣を抜き部屋に飛びこんできた。

しかし辺りを見渡しても部屋の中は哀ひとり。

「見たとおり誰もいないわよ。隠れるところなんかないでしょう。」

哀は手を広げ目を閉じ洋画で見るようなオーバーなポーズを見せた。

「そんなはずはないっ!確かに話し声が聞こえたんだっ。貴様匿つてるな。」

そのポーズは返って兵士を怒らせた。

クローゼットの中やベットの下はもちろん人が入れそうもない家具の隙間まで覗いた。

必死になって部屋の中を捜しても隠れるような場所はない。

窓枠にぶら下っているのかと窓から顔まで出していた。

優しい光で城を照らす月。

その光が解き放つ静寂は息を殺して隠れることも許さない夜だった。

「この部屋に入るのはその扉からでないと難しいんじゃないかしら。

あなたが居眠りでもしてたんじゃない。」

「なっなんだとっ!小娘が生意気な口を利きやがってっ!おまえなどっ。」

子供に生意気な言葉を使われ激怒した兵士は持っていた剣を哀の首筋にあてた。

でも哀の視線に負けてない。兵士の目を睨みつけた。

「・・・えっ?」

兵士の剣が震えているのに気が付いた。

男の息が荒くなる。

男の表情が険しくなる。

・・・兵士が怯えてる？

小学生相手に屈強な兵士が怯える理由などどこにも無い。  
でも目の前の顔に滴る汗は尋常ではない。

そう言えばわたしを拉致したときも薬をかがしていた。  
誰もいないあの場所で使うとは念を入れすぎている。  
その力で強引に連れ去るなど他愛ないこと。

・・・科人・・・このことに何か関係あるのかしら？  
緊迫した状況下ではその言葉しか見あたらなかった。

「うわあああつ。」

哀が掌を握り締めたとき突然兵士が叫んだ。  
剣から手から落とし急いで部屋の壁に体を押しつけた。

「きさまは訳の分からん術を使おうとしただろっ！？ふふふっオレ  
は騙されないぞ。科人が悪魔だろっつとやられてたまるかつ！」  
息を切らしながら言葉を吐き出す。

「・・・何のこと。」

どうしても1人芝居にしか見えない哀は首をかしげた。

「ふざけやがつて。そうかつそうやってオレを弄んで殺す気なのか  
っ！子供だろっつと容赦はせんっ！」

兵士は怒鳴りながら小銃を抜くと躊躇わずに引き金を引いた。

バシューン

銃声と共に煙があがり弾丸が放たれた。

哀の目はその軌道をしっかりと捕らえていた。

死を覚悟して視線が小銃に集中した所為か弾丸がスローモーション  
に映る。

黄泉の世界でも死んだと思った。

これが運命。生きていない必要のない者だと神が判断したのだと思っ



た。

しかし顔を背けながら腕を顔のあたりまで挙げて、もまだ弾丸が身体に到達していない。

不思議に思いながらも哀は体を反らした。

避けられた・・・そう思った瞬間弾丸は視界から消えた。

窓の外に向かって突き進む空気の震えが哀の横を走り去った。

避けた？なぜ・・・何が起こったの・・・？

「・・・止まった・・・弾が・・・宙に止まった・・・悪魔の力・・・」

兵士の顔は生気を失いその体は硬直していた。

哀はどうしていいのかわからず立ち尽くしていると廊下からコツコツと足音が響いていた。

「どうした？」

部屋の外から女の声がした。

「しょうがないヤツだ・・・」

女は部屋に入ると兵士の頬を叩いた。

「あっ・・・秘書官殿っ。小娘が術をつ！」

数発の鈍い音と共に兵士は我に返った。

「心配するな。気を確かに持て。まずは銃を納めよ。」

「・・・秘書官？・・・この匂い・・・鳥肌が立つようなオーラ・・・急に体が震えだした。」

この押し潰されるような異様な感覚は初めてじゃない。

哀は言葉が出て来ない。

目も合わせらずに俯いてしまった。

「何をしている。部屋の外で監視するように指示したはずだが？」

「しかし・・・話し声がしたもので・・・。そっそれに秘書官殿も気を付けてください。この科人も悪魔の術を使います。」

「案ずるな。科人も万能ではない。貴様もレクチャーを受けてるで

あろう。」

「しかしっ。」

「もうよい。緊張の連続でおまえも疲れてるのであるう。監視を他の者に替わってもらえ。それまでこの小娘は私が見ていよう。」

「はっ・・・もっ申し訳ありません。」

兵士が部屋から出て行くときクリスはドアを閉めた。

「久し振りねシェリー。こんな世界で逢えるとは思わなかったわ。」  
「ベルモット・・・なぜあなたがこの世界にいるの・・・わたしを追いかけてきたとも言っの。」

「あら、ここに着たのは私の方が先よ。何度この世界に飛ばされたことかしら。あなたこそあの坊やとは一緒じゃなかったの？」  
クリスはゆっくり歩いて窓際に立った。

「坊や・・・知らないわ。」

「いまさら隠さなくつても。招待状を送ったわたしが坊やの正体を知らない訳がないじゃない。」

坊やの正体は工藤新一。ジンが始末したはずの腕利きの探偵坊や・・・。

あなたが彼とつるんでいたの知ったときは驚いたわ。かわいい坊やが必死になってあなたを守るから手が出せなかったじゃない。」

「・・・私は罪を償うためにここに連れて来られたのよ・・・彼は被害者。わたしの所為で人生を狂わされた彼が来るわけないわ。」  
罪を犯したのはわたし。

工藤くんは巻き込まれただけ。そんな彼を黄泉の世界にまで付き合わせたくはない。

「被害者は坊やだけじゃない。薬の存在、その研究を引き継ぐ者を許せない私もそこに加えてもらえないかしら。」

しかし坊やとの約束どおりあなたを諦めた。でもこの世界ではその約束もどうなるわかる？」

「ここは黄泉の国。わたしなら覚悟は出来ているわ。好きにしたらいいでしょ。」

「いい心がけね。」

クリスはフンと鼻で笑った。

「償いなんて言っておきながらあなたがさっきの兵士に術を使ったことをわかつているかしら。」

「術？・・・さっきの・・・」

わたしの目に弾丸が止まって見えた。あの兵士も放心状態になるほど驚いていた。

「薬で時の流れを逆らって姿を変えた。今度はこの世界に流れてる時を狂わせた。」

悪魔の力でこの世界の住人に恐怖を振りまいて償いが出来ると思っているの？

悪魔の薬を服用した者の宿命なのよ。まだ使いこなしてないようだけれど科人としての能力に目覚めてくるわ。

現世では歳をとらない化け物。

子供なら可愛らしく魔法使いとも言うのだろうけどこの世界でもあの鬼と同じ化け物なのよ。

人の口に戸は建てられない・・・こうやって科人は悪魔の力を持つという噂はこの国に広まっていく。

償いは現世に対してのもの、この国の住民に何をするつもりなの？」

「それは・・・まだ分からない。」

「でしうね。そしてあなたが坊やにこの世界に来て欲しくなくても薬を服用した坊やが飛ばされていないなんて否定できないわ。

それにまさか私と再会するとも思わなかったでしょう。気まぐれな神のやることは分からないじゃない。」

「・・・そんな。」

「私は好きにさせてもらうわ。運命の選択はあなたも自由・・・その額を動かしてごらんなさい。」

哀は言われるままに飾ってある絵画の額を動かした。

そこには小さな窓。

そこから隣の部屋が見えた。ベットに座る女の人はこちらを見た。

「おっお姉ちゃんっ！」

「そう宮野明美。残念だけど向こうにはあなたの声も聞こえないし姿も見えないわ。」

「でもなぜ？お姉ちゃんはジンに殺されたはず。」

「死んだからこの黄泉の国にいるのよ。彼女の傍に居たければ私に協力してアポトキシンを作ってもらえないかしら。」

「悪魔の薬を作れて言うの！・・・組織に協力は出来ないわ。」

「この世界に黒の組織は存在しない。」

アポトキシン・・・組織では出来そこないの名探偵と呼ばれていた秘薬。作るか作らないか・・・まあ考えるのね。」

クリスは交替してやってきた兵と何か小声で話すとまた扉が閉められた。

お姉ちゃんに逢いたい。

しかしあの薬を造るなんてことはできない・・・

ベルモットは何を企んでいるのだろう？

罪を償えるなら何でもする。それで私をこの世界に飛ばしたんじゃないの。

お姉ちゃんは組織からわたしを助けるために命を落としたのに・・・ベルモットに協力したら合わせる顔が無い。

でもお姉ちゃんはこの壁の向こうにいる。

逢って・・・話すことは沢山ありすぎて・・・この手で抱きしめた  
い。

もう一度抱きしめられたい。

哀はベットに横になった。

これ以上お姉ちゃんの横顔を見るとベルモットの条件をそのまま受け入れてしまいそう。

答えをすぐに見つかるものじゃない。

哀は毛布を頭から被った。

・・・・・・・・

「秘書官殿これが玉座に。」

クリスが廊下を歩いていると兵士が走り寄って来た。

『十三夜の静寂の中。本物の玉を頂きに参上します。  
キッド』

怪盗

「面白い坊やはいろんなところにいるのね。」

「はっ？」

「神殿に向かう。兵を5・6人を連れて来るように。」

「はいっ。」

あの白い盗賊のことだろう。予告状とは洒落た真似をしてくれる。まるで現世の怪盗のよう。

それなら昼間の奇襲は下調べのつもりだったのだろうか。

今もどこかで何か仕掛けを準備を進めているかもしれない。

果たしてどこまでできるヤツなのか。見てみる必要もあるだろう。

「あの・・・司令官への報告はどうでしょうか？」

「あなたから伝えておいてくれないか。」

「秘書官殿からでなくても良いのですか？」

「予告状の存在は先に伝えた方がいいだろう。わたしは現場を確認してから行くとする。よろしく頼んだぞ。」

「はっ。」

クリスは兵を集めて暗い廊下を国王の玉座のある大広間に急いだ。

## 8・迷宮の男

コナンと平次はハンシンを走らせ夜道を急いだ。街中には城に行けば警備兵の検問に引っ掛る。博士の教えてもらった通り2人は提向津川に沿って下り海岸線を走っていた。

岸壁に秘密の国王専用の船のドックがあり、そこから城に続く秘密の通路があると言う。

いざと言う時ため予ねてから極秘にドックが造られていたと聞いた。この国の民がそのことを知ったらどうなるだろう？

鬼の恐怖に曝された一部の民が暴れだすかもしれない。博士が今まで口にしなかった意味も分かる。

しかしこんな重大な秘密を知る博士が束縛されない生活を続けている事も気にかかる。

それとも監視する者がいたのかもしれない。

でも今は考える時間は無い。2人の行動は警備兵はもちろん民の目にも見つかる訳にはいかなかった。

気が付くとききれいな月が昇っていた。

コナンはフツと吹いた。

今回は探偵というよりもまるでドロボウになった気分。

あの気障な怪盗の姿を思い出していた。

別の御神体のあるという祠が崖の中腹にあるという。

そこにドックに続く秘密の扉が隠れていると博士から聞いた。

「ここらへんやなっ。なあ・・・ハンシンストップや。」

2人はハンシンの背から降りると道から外れ崖に触ってみた。ごつごつした岩肌に手を掛け足を引っ掛けてみる。

ここからなら崖を登れそうな手応え。

「さてと。ここからは自分の足が頼りやな。」

「ああつ、ハンシン留守を頼んだよ。」

「ほな行つて来るで。」

月明かりの照らし出された崖を2人は両手両足を駆使して這い上がる。

祠の入り口を月明かりが照らしている。

ぴんと張り詰めた夜に荒い吐息と小さな岩の破片が崩れる音が聞こえた。

こんな所で立ち往生するようなご主人様ではない。

キツイ勾配をゆっくりと着実に登ってゆく。

ハンシンは丸くなって月灯りに浮かぶ2人の姿を眺めていた。

.....

「ここやな。シツ・・・中から灯りが漏れてる・・・。」

「誰がいるのか？」

急に小声になった平次を先頭にゆっくりと覗くとそこには祭壇が祭られていた。

誰かが火をくべているのだろうか松明がたかれている。

「こんな辺鄙なところに誰が？」

「そんなん神官に決まってるやろ。」

「でも服部と出会ったあの場所の御神体はこんな風に祭られてなかったぜ。」

「そやな？なんでやろ？・・・この祠のどこぞに秘密の扉があるんやったな。かえって目立つもんやのに・・・。」

それより扉を捜そうや。時間が無いで。」



御神体に手を掛け松明から火種をもらった平次が足もとの辺りを照らした。

灯りが欲しいだけじゃない。小さな火種から昇る煙で空気の動きを探っていた。

「おまえは壁のほうを頼んだでつ。」

「高い壁に小さいオレが届くわけ無いだろうつ。」

「御神体に乗つかれば届くやつ。文句言わんとちゃっっちゃつやらんかつ。」

平次はコナンに背を向け扉を捜し始めた。

科人は何を目的に現れたのか分からなければ、不思議な術を使うやつかいな存在。

その言伝えを知る者が見たら、そないな少年に背を見せ隙を作るのは危険なことだと言うやつ。

科人を敵だと疑えば山のような言伝えが伝承されとる。

せやけど言伝えは時の指導者の目を盗むため真実を隠して伝えとる。そやから阿笠博士は研究意欲に掻き立てられると言うとった。

真実はいつも1つしかないんだぜ。・・・あいつの言葉。

その真実を見つけ出すのがオレ達の仕事。やからこの街に来てアイツと自衛団を作った。

博士がアイツの子供の頃に似ると言っとった。

子供のクセに物怖じせん度胸と冷静さ。

やけに馴れ馴れしく話してくる少年がどこぞアイツに似た雰囲気がかもし出してるからやろう。

アイツの面影を感じるこの少年の本性を知りたくなりよったっていのが本音かもしれへん。

「へいへいつ・・・。」

苦笑いを浮かべながらコナンは御神体に手を合わせ礼をする。

「ほう。礼儀正しいやんか。」

平次はコナンを背にしたまま声をかけた。

「一応な。知らない世界に投げ込まれワンコに啜えられ鬼に襲われ・

・その上オレ自身が正体不明の存在だなんて。

さらに神にまで崇められたくないからな。」

「ははっ、そりゃそうや。そんじゃ早よう扉を見つけて城に乗り込もうぜ。」

平次は鼻で笑った。

「・・・まったく。」

コナンは不貞腐れた顔を見せた。

しかし平次の仕草に嫌味を感じたわけじゃない。この状況下であったりとした言い回しが返って嬉しい。

鬼まで出現するSF小説のような世界に飛ばされて最初に会った人物。

彼は親友と同じ姿をしていた。彼の行動は熱いハートを感じた。

同じ顔をした別人と理性では分かっているても感情では現世の相棒がいるように思えていた。

コナンはよじ登るのに良さそうなへこみを捜すため御神体に触れた。  
ピカ                      ツ

その瞬間に御神体が光りだした。

目もくらむような光が落ち着くと岩肌が水晶のように透き通ってゆく。

曇りがとれ御神体の中に人影が浮いている光景が見えた。

「えっ？」

平次は目を擦った。・・・間違いない。

岩肌に触れた所為なのか意識が薄れていくコナンの瞳に工藤新一の姿が映っていた。

「くっ、くどー！」

平次が叫んだ。

しかし新一は周りを気にする素振りをするだけ。

「工藤っオレや。分からののか？」

「その・・・声は服・・・部？」

「そうや、服部平次やつ。ん・・・今の工藤の声は頭に直接響いたような？」

平次は辺りを見回しながら違和感を覚えた。

「・・・どこ・・・に・・・姿・・・が見え・・・ねえが・・・。」

「やっぱり生きてたんやな。ここから出してやる。待ってるや。」

平次は御神体を前に構えると剣の柄を握り目を閉じる。

「とりゃあっ！」

居合い抜きの剣の閃光が走った。

しかし手ごたえはない。

「刀が通り抜けた・・・？」

「オレはどこか広い空間を漂ってるんだ。宙に浮いてるというか・・・宇宙と言うところはこんな感じなのかもしれないな。」

「おおっ声がちゃんと聞こえるようになったな。宇宙やと？・・・そこはエーテルで満たされてるのか？その場所はどこなんや？」

「ははは・・・エーテルなんて見たことねえから分からないがな。でも信じられない力を感じるぜ・・・あれっ？」

「どうした工藤。何か見えるんか？」

御神体から周りの様子を気にする新一の姿が映る。

「霧が晴れて人が見えた。・・・人が一列になって河を歩いてゆく。足を滑らせながらも無心で・・・

あつ1人が列から外れていく。でも・・・周りはその人を無視して先に進んでゆく。」

「そいつらから話は聞けんか？」

「ダメだ。近づこうにも体が浮いたまま。近づこうとすると逆の方

に流される。彼らの話し声がしない・・・

いや・・・遠くでケロベロスの鳴き声が聞こえる。」

「向こうの御神体かつ。あれっおまえはあれにも触れたんやろ。おい坊主？どうしたんや？」

平次は座りこんでいるコナンに気がついた。

「だっ・・・大丈夫だ。・・・捜す手掛かり・・・を聞き出すのが先だ・・・ぜ。」

その額から冷たい汗が流れていた。しかし平次を新一と話すことに優先するように仕向けた。

「服部・・・そこに誰がいるのか？」

「ああ。ここにコナンっちゅう坊主がおるんや。こいつが御神体に触れたらおまえの姿が見えたんや。」

このチャンスを逃すわけには行かない。平次はコナンを抱きながら話を続けた。

「御神体？・・・行人が現れると言うあの・・・そうか・・・そうなんだ。」

「そうやつ工藤のいる場所は三途の川かもしれない？現世とオレ達の世界との境界線。ならばその先に流されたらあかんで。」

「ああ、例えゼウスでもオレ達の世界は入ることは出来ても出ることは出来ない。その心配はないぜ。」

それより御神体を触れた少年の正体が気になるんだが。」

「なんでや？こうして工藤と話すごうできたのは御神体の力やろ。」

「神官が神と交信するために玉を使っているって博士から聞いてないか？」

しかしここが神の領地なら御神体と玉は同じモノなのか？違うモノならその少年が謎の鍵を握っているんじゃないやねえかって。」

「そやつ、三途の川は特別な者しか通れない神の領地。（工藤は坊主の正体に気が付いているのかも・・・？）

エーテルはアナガチ外れと限らんかもな。御神体自体が第五元素な

のかもしれへんし・・・。」

科人も神と交信出来ると言う。博士から神官と違って玉を使わないと教えてもらっていたが方法までは不明だった。

「御神体と少年が接触することで第五元素になるっていうのはどうかな？つまり御神体は不完全な結晶とも考えられねえか？」

「なるほど・・・それじゃあの坊主が完全な結晶を精製するための鍵と言うことか。」

「あくまでも仮説だがな。第五元素は偉大な力を持つと聞く。彼がいれば鬼から街を救えるかも知れねえ。」

「ああ、そして工藤と宮野を連れ戻すこともできるはずや。」

「宮野・・・アイツもいないのか？蘭はどうなんだ？大丈夫なのか！？」

御神体が曇り始めた

「安心しい。煩い姉ちゃんがそばについとる。早ようこつちに帰るうな。」

「よかった・・・オレはこつちで宮野を捜す。服部・・・は彼のサポート・・・現世の・・・オレ・・・蘭を・・・」

声が途切れてくる。

「工藤う！？」

「もし・・・捜す・・・頼む・・・は・・・」

途切れ途切れの声が聞こえなくなると同時に御神体は元の岩に戻ってしまった。

その袂にコナンが気を失って倒れていた。

## 9・エリスの番人

御神体に平次が触れても新一の姿は映らなかった。  
手は無常な岩の冷たさを感じるだけ。

「やはり科人は不思議な力をもっておるんやな。」

平次は腕の中のコナンの額をなでた。

工藤にコナンが科人だと正体を明かさなかった。

悪魔と言うイメージが定着しとる科人が傍にいるなんて余計な心配をかけたくなかったから。

しかし工藤のことやから気が付いとるやろう。

オレ達はこの世界から。工藤は閉じ込められた神の領地から。必ず謎を解いて元の生活に戻る。

そのためにはこの坊主の協力が不可欠や。

オレはどこまで坊主を信じられるのやろうか。

心のどこぞ、きっと1欠片くらいは科人を疑つとるのも事実。せやけどこの特別な力に頼らざる得ない部分もあることも同じ。

冷静沈着に行動してこそ真実への近道。

工藤と話せたこの不思議な体験をしたことで揺れ動く心をニュートラルにしていられるんか。

それがオレの力量を試されてるような気がした。

コナンの体温はまだ高めのようなのだが脈は落ち着いてきている。

汗もひいてきたようだ。

「しっかりせいや。」

平次はコナンの頬を軽く叩いてみた。

「あっ・・・御神体は？」

コナンが気が付くまで時間はかからなかった。意識はしっかりしているが体はまだダルそうに起き上がった。

「工藤は消えてしもうた。オレは扉を捜すからオマエは休んでろや。」

「もう一度触ってみれば……。触れた瞬間何かが頭の中を走ったんだ。」

「御神体で工藤と交信出来たつつうことは御神体と科人はなんか関係があるんやろ。調べてみる必要があるが今は無茶したらあかん。」平次はそう言っているとコナンに横になるように勧めた。

「いいアドバイスだ。安易にわたしから楽しみを奪う出ないぞ。」気が付くと御神体の上から声がした。

「科人よ。貴様には罪を償う使命があるのだ。」

振り返ると黒マントを纏いその顔は白い仮面に隠している男がいた。コナンはその姿を見たことがある。

それは現世に存在する人物ではない。小説の中に生きている男。

「ナイトバロン!？」

「何者や？」

「何者って言われてもヤツの格好はオレの父さんが作った物語のキャラクターなんだ。」

「へっ、おまえのおとんは物書きなんか。現世のコスプレしてんつつうことはこの仮面男は現世の人間の可能性もあるってことやな。」

「現世を知っている人物には間違いない。罪を償えって言ったあの声にも似ている。あんたは何者なんだ？」

「ふふふ。これは君の為に用意した姿なのだよ。わたしはヘルメスの使いとでも言っておこう。」

「ヘルメスの使いも神つつうことや。工藤を解放してくれへんか？」

「それは出来ぬ相談だ。工藤新一が同時に2人も存在出来るわけが無い。そこに現世の工藤新一がいるのだから。」

仮面の男はコナンを見た。

無表情の仮面が薄笑いしたように思えたコナンはうつむき、平次は辺りを見回した。

しかし他に人がいるわけではない。考えられるのはただ一つ。平次はコナンに会ったときの博士の言葉を思い出していた。

「こいつの名はコナンって言うてたで。工藤がこんなチビすけの訳ないやろ。」

「この世界に鬼が現れたということは現世のバランスが崩れた所為なのだよ。こうして時の流れを無理に捻じ曲げた者がいるではないか。」

「どういうこつちゃ？」

「・・・服部、実は・・・オレの本当の名は工藤新一。訳あって偽名を遣っている。」

コナンはゆっくり話し始めた。

共に行動する以上隠していられることではない。搜索が進まなくなる可能性もある。

それはこの世界の服部平次を信じると言う意志の表明でもあった。

「ほんならもう1人の工藤新一なのか!？」

「ああ、ある薬を飲まされて体が幼児化しちゃった。」

「ふつ。黄泉の世界の男が現世に飛ばされなかっただけでも救いだつたのでは。なあ工藤くん。」

もし入れ替わって工藤新一が現世に現れていたら・・・

工藤新一が生きていたと組織から命を狙われるだろう。

周りには顔見知りの別人の蘭がいる。園子も博士も大阪から服部もやってくるだろう。

そして組織にFBIとの関係を疑われていたおっちゃんがいる。

何も分からぬまま一網打尽にされてしまっただろう。

「貴様は元の世界に戻りたいのか？」

「当たり前だっ!」



「ならば工藤新一を殺せ。この世界に工藤新一は2人も要らない。そうすればこの世界に貴様の分身が実体となって現れることが出来る。江戸川コナンは晴れて現世に戻るぞ。」

「・・・無論この世界の工藤新一が死ねば現世の工藤も消えざる得ないがな。」

「なにっ！それじゃ戻ることにしないっ。」

「では勝手に彷徨うがよい。」

「ああ、そうさせてもらうさ。他の方法を探しだして元の世界に戻る。」

「過去にそう言ってこの世界の己を殺した科人がいたな。運命に逆らえるか貴様もせいぜい頑張るがよい。」

仮面の男は冷たく言い放った。

「1つ助言してあげよう。」

科人の使う術は時間を操ること。己の特技に利用すれば計り知れない魔法を使うことが出来る。しかしその術は諸刃の剣。

貴様の寿命をエネルギーに発するものだ。使い果たせば貴様は死ぬ。どう使うかはよく考えるのだな。

まあ貴様が死ねば無条件でこの世界の工藤新一は戻ってこれるぞ。」

「なぜ術の秘密を教えたんだ？」

コナンは目を見開いて聞いた。

「貴様は己の命をどう使うか。わたしが楽しむためだ。」

「誰かの命と引き換えに工藤が戻りたいと考えるかっ！コイツが現世の工藤なら信じるさ。」

今まで聞き手に回っていた平次が言った。

神の使いに言いたいことは沢山ある。しかし情報を得るチャンスがほとんど無い以上邪魔せずに喋らせるのが得策だと考えていた。

もういいだろうとガマンしてた口を開いた。

「服部っ。」

「工藤もオマエも生きてなきゃ意味がないんや。最後までオレと付

き合ってもらうで。」

「科人でもか？」

「ああかまへん。その代わりもう隠し事無しやからな。工藤もおまえに期待しておった。鬼から街を救えるかも知れねえってな。」

「この世界のバランスを戻すためにはオレが現世で工藤新一に戻るしかないぜ。」

「ああ工藤と宮野を取り戻してオマエを現世に返すしかあらへんな。」

「

2人の進む道が重なった。

「行くがよい。」

仮面の男が壁に指をさすと魔方陣が浮かび上がった。

魔方陣は光を放ち扉が出来上がった。

「城に繋がる道が扉の向こうにある。貴様らの彷徨う姿を楽しく拝見させてもらおう。」

「ああ、オレ達のやり方を楽しんでや。」

2人は扉を潜っていった。

仮面の男は再び指をさすと扉は元の岩肌に戻る。

「科人よ。その意志を貫け。」

仮面の男が消えると同時に松明の火も消えた。

## 9・エリスの番人（後書き）

更新する予定が所用のためパソも使えず遅れていました。  
今回で何かが見えてきたと思います。

うゝむ、解説してる会話ばかりになっちった。それにしても神話と  
中世の物理がゴチャマゼさ。（苦笑）

今まで辻褄が合わない部分があつたと思います。

ここでやっと彼らの本格的な捜査（冒険？）がスタート。

楽しみにして頂けたらと思います。ではでは　byくじら

## 10・古城探索／地下通路

扉を潜った2人は石を積み上げて造られた地下道を急いだ。

この扉を造るために岩肌に映った魔方陣は博士の話していたヘルメスの印。

コナンの腕に刻まれたものと同じだった。

あれが術と言うものの力なのだろうか？

しかし魔法のような術を目の当たりにした驚きよりもその事実を呑み込んで2人は前に進む。

端から見れば感覚が麻痺していると思われるかもしれない。

麻痺していると言うよりは今やるべき事に集中して落ち着きを取り戻しているのだ。

『冷静、沈着、かつ慎重に・・・』

幼児化して愚痴を溢してたときに博士が思い出させてくれたホームズの姿。

不思議な世界にしようともコナンの頭の中はしっかりと切り替えていた。

暗い地下道に所々に灯りが焚いてあり空気の流れを感じた。

潮の匂いが強く感じる方向にはドックがあるはず。

進む方向はその逆だと推理できる。

それに灯りを焚いているならばこの通路は人が利用している。

ならば先程の祠に松明が焚いてあるのも不思議ではない。

城までの一本道。誰かと出くわすかもしれない。2人は慎重に前に進んだ。

しかしヘルメス神の使いと名乗った不気味な仮面の男の言葉だけは引つかかっていた。

男はコナンの償う罪には一言も触れてなかった。

「どうしたんや？」

先を歩く平次の声が聞こえた。

「なんでもねえよ。」

「・・・そうか。」

平次はそれ以上は聞かなかった。

隠し事じゃない。何を考えていたか分かる気がする。

「今は進むしかあらへんな。」

お互いの目的は同じ。進む道も同じ。

心を隠そうとしなければ言葉にしなくても通じ合うこともあると思  
った。

「そうだな・・・って行き止まり？」

「いや・・・縄梯子が腐って落ちておる。天井に出入り口があるん  
やろな。」

古びたロープを手に平次が言った。

「天井か・・・肩貸してくれないか？」

コナンは平次の肩に乗り壁を調べた。

積み重ねた石の壁に比較的きれいな場所がある。

「これだな。」

押すと隠されていたハッチが現れた。

そのハンドルをゆっくりと押し開けるとコナンは辺りに人がいない  
かを見回した。

「どうや？」

「人の気配は無い。大丈夫だ。」

2人が入ったフロアも地下道のように薄暗い。

檻で囲まれた狭い部屋が両サイドに続いていた。

「ここは牢獄やな。過去の歴史で政治犯を閉じ込めていたって聞い

たことがあるで。」

「この国は神が統治しているんだろ。その神と交信する国王が神官の代表なら取り巻くのブレーンも神官なのか？」

神官って誰でもなることができるのかい？」

「昔は特別な修行とか錬金術を極めた者。または神からの啓示を受けた者やっらしい。」

今じゃその血筋の中で能力がある者が受け継いでいるんや。」

「やはりそれじゃ幽閉されてた政治犯もやはり神官だったのかな？」

「神官だけが神と交信できるんや。やから神の教えに背き歪めて伝える者もいたようやで。」

「確かに民は正確な情報が掴めない。権力者の使う手だな。」

「でも暗黒の時代を民が次の時代の幕を開ける。」

「歴史は繰り返す・・・だな。」

2人は檻に囲まれた廊下を歩き続けた。

突然先を歩いていたコナンが立ち止まった。

「おいっ。」

檻の中に白骨化した遺体があった。

「背は高くないがこの仏さんは男やな。それにしては大腿骨が異常に細いな・・・怪我でもして歩けんかったかもしれへん。」

「ん・・・この腕の辺りに落ちてる物はなんだろう？」

コナンは落ちていた小さな豆粒みたい物を手にした。

「これは神官が祈りを捧げる時に使う数珠やないんかな？」

「それじゃ遺体は神官の可能性があるな。」

あの地下道に人が出入りしていると考えられるとなるとこの遺体に気がつかない訳が無い。

過去の歴史に係わる遺体ならばとくに供養されているだろうし、そんなに古いとは思えねえぞ。

出入りしてる連中ならこの遺体の名前を知ってるかもしれねえな。」

「ああ、ちよっくら聞いてみるしかあらへんな。」

この先は身を隠して探るだけでは済まない。

平次は剣の柄に触れながら言った。

「この国で何かが起きているのは間違さそうだぜ。」

2人はまた突当たりの階段を上る。

このフロアの天井にも隠れたハッチが備えられ牢獄を隠していた。さつきと同じように扉を開け忍び込んだ部屋もまだ地下室のよう。今度は鉄の扉がつけられた2つの部屋があった。

しかしどちらのドアの鍵も壊されている。

とりあえず近くのドアをそっと開け中の様子を探ってみた。

「誰もいないか。ここは書庫のようだな。」

「大事な書物なら鍵が壊れたままにはせんやろつ。ん・・・何か気がついたんか？」

「ああ。蔵書は埃を被ってるのに床は掃除されている。出入りしたのは最近だぜ。」

「それじゃ書物のどこかに調べた形跡があるかもしれへんな。せやけど持ち去ったつちゅう可能性もあるで。

これを全部調べるには時間がかかり過ぎる。今は先を急いだ方がええんとちゃうか？」

「服部・・・おまえが知ってる限りでは科人が現れたっていう話はいつ頃か覚えてないか？」

「そやな。10年くらい前に現れたと聞いたな。丁度国王が替わった頃やて。」

「ならば神官が議題にしているだろう。その頃の議事録に残ってっないかな。

この棚は整理して並べているみたいだし残っていれば調べて損は無いぜ。」

「なるほどつ。それにしてもどれも埃被って汚れとるな。」

とりあえず下の棚はコナン。上の棚は平次。2人は本棚をチェック

してゆく。

「書かれた年が違うつて言っても汚れ具合はあまり変わらねえか。」

「あつ10年前といえはこの辺りやな。」

試しに2冊取り出して読んでみた。

「おい!？」

平次は一冊の蔵書を手にコナンに声をかけた。

「これ見ろや。議事録に参加者の名前がある。」

平次はコナンの背にあわせてしゃがむと手にした書を広げた。

「気になる名前でもあるのか？」

「大有りや。鬼対策についての議事録なんやけど・・・阿笠博士の名があるんや。」

「この会議に参加してるつてことは・・・博士は。」

「ああ神官やつたんや。博士は宮野つちゅう神官の推薦で鬼対策委員会に召集されてたんやな。」

議事録によると鬼対策の作戦に反対して2人して委員を外されておる。」

科人のこと聞いたような素振りでもコナンや平次に話していた博士が城にいた神官だったとは思ひもなかった。

考えてみれば博士の研究室にあった器具は錬金術の道具。

ただの歴史研究家と言うには違和感がある部屋だった。

「それにあの姉ちゃんのおとんまでが神官だったとは・・・。」

「もしかして宮野っていう神官は城から追い出されたとか？」

「ちよつと待てや・・・ふむ・・・あつ除名処分が下されとるなよく分かったな・・・もしかして城に連れてかれたかも知れへんおまえの仲間つて？」

上の世界のこととは下の世界ことと似ている・・・平次の頭に阿笠博士の言葉が浮かんできた。



「ああ現世の宮野志保だ。オレと同じ理由で偽名を使っている。」  
コナンはあえて灰原哀というの名前を言わなかった。

「そんなことまで現世と同じなんだ。彼女の親父さんは学会から追い出されたと聞いている。」

その後鬼対策の作戦はどうなったんだ？」

「そうやったんか。作戦は科人を利用した方法みたいやな。・・・  
残念ながらインクが擦れててこれ以上は解読不能や。」

「・・・読めないか。」

「こんな報告も載ってるで。」

現世の記憶を失っているはずの行人が現世で強い想いがある科人と  
会おうと行人の全ての記憶が蘇ったんやと。

黄泉の世界に現世の記憶は邪魔だと地ノ獄の使者が行人を射殺した  
とある。」

「仮面の男が話し・・・。」

話している途中で2人は目があった。示し合わせて黙りこんだ。

ガタ・・・ガタガタ・・・

「・・・何の音や？」

2人は息を殺して耳に神経を集中させた。

物音は隣の部屋のように。

「行くか？」

「もちろん。」

2人は隣のドアをゆっくり開けた。

そのスペースは物置に使われていた。

何かの式典につかうような装飾のあるテーブルやイス。

山積みになされた箱の後ろでロープ縛られ口を塞がれた男が這っていた。

## 11・古城探索の仲間

男は床の突起部分を使つて必死に口を塞いだ布を外そうとしていた。長い時間もがいていたのだろう。

男の自由を奪つたロープは緩み始めていた。

「あれ……。」

コナンは兵士の格好をした男の顔に見覚えがある。

しかしこの世界では敵なのか味方なのか……コナンが声をかける前に平次が這つていた男の体を起こした。

「ふあつ……はあ……ありがとう服部くん。」

口を塞いだ棒切れを外された男は平次の顔を見ると安堵の表情を浮かべた。

「何があつたんか？ええと……誰やつたっけ？」

平次は本気なのかワザとなのか名前を忘れた素振り。

助けられた男のほう慌ててる。

「あのね。高木です、高木。忘れないで下さいよ。」

「おおうそうやった。でっとうしたんや？」

「ちよつちよつとね。そつそれよりも……君こそなぜこんな所に。」

まさかこんなところで遭うなんてと驚きを隠せない表情。

助けてもらったけれど答えたくないのか話題をすりかえるように高木は言った。

この世界でも高木と自衛団の平次とは顔見知りらしい。

緊張する現場だがコナンにとってホツとする出会いでもあった。

「そやな……散歩の延長みたいなもんや。それより警備隊の人間が捕まつて閉じ込められてたなんて言いふらしてもええんか？」

平次は意味の通じない言い訳で話題を戻そうとする。

「それはっ・・・君たちこそ散歩だなんて言って城の中に侵入して  
るなんて知られたら困るんでしょ？」

「そうやな・・・そんなじゃお互い困らへんようにするしかあらへん。  
・・・しゃあない。元通りにもう1度口塞いでオレ達は先を急ぐわ。」

平次は外したばかりのボロ雑巾を手にした。

「ちよっちよっ！」

仕方なさそうに高木は顔を背けた。

「油断したわけじゃないけど・・・後ろから・・・後ろから何か固  
いもので殴られたようで・・・。」

高木は苦笑いを浮かべながらボソボソ話し始めた。

「黙っててくれないか。恥ずかしいったらありはしない。坊やも頼  
むよ・・・坊や？・・・なぜこんな小さい子供がいるんだい？」

平次の周りにはいる人物はよく知っているはずなのに。

いや・・・この雰囲気はどこかで会ったことが有るような無いよう  
な・・・

独特の雰囲気を持つ少年は誰なんだろう？

高木はマジマジとその顔を覗いていた。

「僕は江戸川コナン。探偵さ。」

「こいつはオレの相棒や。」

「探偵・・・ねえ？」

この世界では聞かない初めての言葉に高木は納得できないでいた。

「警備隊の高木さんが軍属の格好して城にいることも疑問なんやけ  
ど？」

「それは警備について研修を受けてこいつて言われて・・・。」

「ほんまか・・・？」

軍部と警備隊との不仲は西も東も同じこと。

研修ならば参加を許可されるが軍には極秘事項がテンコ盛り。よそ

者を自由に行動させるほど規律が緩やかではないはず。

「それじゃ今度はしつかり柱にくくりつけて先に行くわ。」

「そんなあつ。」

「ちゃんと説明してもらおうか？」

「・・・極秘の捜査なんだ。だから。」

しぶしぶ答えた。

「高木さんが何かの疑いを掛けられてたら牢屋に入れられてただろ  
うね。」

でも鍵も掛けてなかったし隔離されていただけでしょ。それに逃げ  
られないように監視する人もいなかった。

極秘に捜査しているのを知った城の悪い人たちが捜査を指示した黒  
幕を捜そうとしているのかもしれないね。」

「そうやな。顔も割れとるし普通ならスパイ活動やと判断されたら  
とつくにあの世やつたやろうし。」

考えられることはそれだけじゃないはず。

でも情報が欲しい。ここは強引な手法で聞き出すしかなかった。

「うゝん・・・まだ何も掴んでないのに合流する事も捜査を続ける  
事も難しくなったかもしれないな。」

「オレ達にも教えてくれへんか？協力するで。」

2人は示し合わせたように顔がにやけてきた。

「服部くん。まだ小さなコナンくんがいるんだ。君たちは早く城を  
抜け出したほうがいい。」

2人とは対照的な表情で高木は言った。

返ってきた言葉はやはり期待外れ。

現世の高木さんなら多少の捜査情報を流してくれただろう。

名探偵毛利小五郎と同行する小さな名探偵に信頼と期待を寄せてく  
れた。

しかしこの世界ではコナンもただの幼い少年にしか見てもらえない。もちろんこの世界でも自分の正体を明かすことも出来ない。もう1度ゼロからのスタート。

「オレと坊主は運命共同体や。後戻りはせん。」

「服部くんが危険を承知のうえで忍び込んだってことは捜査の為だと思ってるさ。でも僕だって警備隊としての立場があるんだよ。」

高木は二人の無謀な行動に困ったように答えた。少しの沈黙が流れた。

高木は目を伏せた。

「・・・しかしここから引くことも難しいよね。その運命共同体に僕も入れてくれないか。」

高木は言葉を続けた。

「それじゃ。」

「今は捜査内容について話せないよ。」

僕は服部くんと仕事をしたことがある。君の真っ直ぐで強い気持ちと推察力はすごかった。

僕は君を信じてる。しかし幼い子供がいると相手はどんな手を使ってくるか分からない。まだ知らない方がいい。

まずはここから抜け出す方法を考えよう。君も僕を信じて無茶はしないと約束してくれないか。」

「手ぶらで帰るわけにはいかへん。情報を仕入れるために無理はしても無茶はせんよ。捜査のことはあとで教えてや。」

「協力してくれるならね。」

「もちろん。・・・ところでどこまで覚えてるんや？」

平次は縛られたロープを外した。

「僕はチーフから交替を指示されて玉座の警備に向かう途中だったんだ。」

うゝん時間はどの位経ったんだろう。気がついて這い回って1時間くらい過ぎてると思うな。」

縛られてた腕を揉み解しながら高木は言った。

「高木さんが来なければ他の警備の兵たちが気が付くでしょ？」

コナンからもつともな話。

「警備する連中がみんなグルとか。理由をつけて研修を止めさせようとしてるのかもしれないか。」

平次は冗談のつもりで言った。

「研修をやりたくなくても受け入れざる得ない。軍部が研修を受け入れたのは緊急事態だったことさ。」

鬼が出現してたときに城も襲撃されたと聞いている。僕が行方不明どころの問題じゃないってことかもしれないな。」

「襲撃って城にも鬼が出たんか？」

「いや。白い盗賊団だって聞いたよ。」

「ああっ白い装束で現れるっちゃう噂の盗賊団か。軍がおる城に現れるなんて大胆なやつちゃ。」

「玉座の間の警備だけど1時間毎に警備位置を交代して部屋の五つの入り口を5時間かけて一周するんだ。」

一箇所に2人。つまり周りには10人の兵が立っている。全員に気付かないなんて考えられないよ。」

「閉じこめた犯人の目的は何なんやろうな？」

今夜はキレイな月が昇っていた。

白い盗賊団・・・警備の厳しい城に現れるなんて大胆不敵などこそこのソドロのよう。

コナンにはあの男の姿しか思い浮かべられなかった。

「高木さんを監禁した犯人は高木さんそっくりに変装してたりして。」

「そっくりなんてそんなの無理だろう。」

国立劇団の女優さんが変装したのを見たことがあるけど背の高さから声まで似せるなんてできることじゃないよ。

それに僕は城の中じゃよそ者として目立つからね。普段からいろんなところでチェックされてる。

警備の兵はもちろん、城に常駐する軍部の者で知らない人はいないと思うよ。」

「うん……。」

白い盗賊団に続いて国立劇団の女優。身近にいた女優と言えば……。

コナンの頭にまた引つ掛るキーワードが増えた。

「考えれば切りがないで。捜査は足で基本。推理は情報を集めてからや。急ぐで。城で何かが起こっているのは確かなんやから。」

平次は言った。

「警備体制は頭に入ってる。ここからは僕が先導しよう。」

高木を先頭に3人は地下室から抜けだした。

## 12・古城探索／白い侵入者

クリスは兵を従えて玉座の間に急いだ。

白い盗賊団・・・今回からヤツは自らを怪盗キッドと名乗った。

予告状を送りつけてくるとはこの世界にもあの気障なドロボウのような面白い男がいたものだ。

そう言えば組織の情報部からビックジュエルについての興味深い噂話を聞いた事がある。

この世界のキッドが狙う玉も神のお告げを聞く以外に利用方法があるのだろうか？

ヤツは捜し出せなかった真実を知っているかも知れない。

「秘書官殿。どうかしましたか？」

「・・・いや別に。」

クリスの表情に違和感を感じたのだろう。

兵に悟られるわけにはいかない。クリスは気を引き締めて玉座の間に続く最後の扉を開けた。

.....

「秘書官殿も参られたか？」

玉座の間には警備を担当する部隊の隊長が部屋の周りを兵に囲ませていた。

隊長は將軍の甥っ子。戦闘に関する評価は高く裏表の無い真っ直ぐな男。

部下から信頼されているが、特に司令官は部下に甘いとその人気ぶりに嫌悪感を抱いていた。



しかしクリスにとって腹の読み合いの必要の無い分扱いやすい男でもあった。

「警備隊長殿。状況は如何か？」

「直接予告状を見つけた兵に報告させる為連れてくる様指示したところだ。ん・・・ちよつと待て貴様は誰だつ。」

隊長はクリスの後ろにいる兵を呼び止めた。

「見知らぬ顔だな。名前と所属を言え！」

「第三救援部隊、魚塚三郎准尉であります。城が急襲されたと警備の応援要請の連絡があり急遽合流しました。」

男は戸惑いながら姿勢を正し声を張った。

「・・・確かに。了解しております。」

副長が隊長に言った。

「そうか。白い盗賊団が警備に紛れこんでるかもしれないぞな。

気を悪くするなよ。貴様のようなベテランは力なるはず。馴れない仕事だろうがよろしく頼む。」

「はっ。」

隊長が去っても准尉は緊張した面持ちを崩せずにいた。

「気にするな。」

副長が准尉の肩を叩いて緊張をほぐしていた。

・・・ネズミに警戒されては野放しにした意味が無くなる。クリスは小さなため息をついた。

玉座の間の警備を担当した組長が2人の兵を連れてきた。

「失礼します。」

丁度私が玉座の右手前の扉に移動したときに一緒にいた者が変な音が聞こえたと言い出して、

他の警備のものと2人で玉座の間に入りました。」

敬礼を済ませた兵たちが報告を始めた。

「その間は他に警備担当部署から離れたものはいないのか？」

「どこから侵入者が現れるか分かりませんので、

部屋から外へ出る者はもちろん入る者がいないか各扉に1人は立たせて警備を続けました。」

「異音を聞いたのはどっちだ？」

「その男は高木と言いまして軍の兵ではないので玉座の間には入れませんでした。」

兵たちは隊長の顔色を見て落ち着かない。

「司令官殿が軍で警備の研修させよと連れてきたあの男か。」  
クリスが言う。

余計な者を押し付けやがってとも思った出来事だったのだろう隊長はしかめっ面を隠していた。

城の警備さえも軍内部で処理できないことがプライドに触っていたのだろう。

「急に風を切るような音が頭の上を通り過ぎたと言い出しまして。

わたしは気が付かなくて・・・申し訳ありませんでしたっ！」

兵は説明を続けた。

「まだ終わった訳ではない。これからの行動で取り戻せ。」

「はっ！」

兵たちは隊長の戒めの言葉を直立不動で聞いた。

「侵入者を逃がさぬよう城門の警備を強化するよう要請しましょう。」

間を割ってクリスが言った。

「秘書官殿には並外れた洞察力をお持ちだ。それは副長に司令部へ行かせてこの現場に留まって頂きたい。」

「わかりました。お願いします。」

「貴様等が玉座の間に入った時のように行動して見せてくれ。組長はその男も連れて来い。」

隊長はそう言うと言護衛の兵を含めた7人で玉座の間に入った。

「2人で辺りを確認しながら玉座のほうにやってきました。

国王の座の前に一礼してから近づくとあの予告状が落ちてました。この辺りです。」

「わたしはまだ宙を舞っているときに気がつきました。

慌ててこいつに言い天井を見ましたが人の気配はありませんでした。もちろん窓も全て鍵がかけておりました。間違いありません。」

「なるほど扉には警備の兵がいる。これでは密室ではないか？神でもない限りそのようなことはできぬ。」

「その異音を聞いた男はまだ来ないのか？」

「彼は部屋に入っていないのでは？」

「予告状を一礼した時に落とすように着衣にでも引っ掛けておけば外に居ても済むことだろう。」

「そのような方法がうまくいくとは思えぬが？」

「可能性があれば残しておいた方がよい。証言によって後で削除すればよいのだから。」

実況見分は続いていた。

地下室を抜け出した3人は城の中を進んでいた。

警備することになっていた玉座の間は3階。高木を先頭にコナン平次と続く。

高木にとって行方不明の自分は忘れ去られてるんじゃないかと思えるくらい城内は静かだった。

気がつかれないよう細心の注意をして進むが通常の警備体制のまま変わった様子は見れなかった。

よそ者と言いながらも現場の兵士の心は違って見えた。

確かに口は悪いし、すぐにひっぱたくし・・・でも笑い、歌い、仲間として扱ってくれていた。

鬼が出現すれば恐怖を隠し直ちに向かって行かなければならない一線の兵士たち。

限られた時間だけでも命を賭ける仲間として扱われていると思っていたのに。

みんながグルじゃないかって言う平次の科白が頭の中を駆け巡っていた。

「ストップ。・・・角を曲がったところに警備がたつてる筈だ。」

高木の言葉にその後ろにいたコナンがそつと覗いてみた。

「・・・誰もいない。」

「ほんまか？」

シンガリの平次も覗いてみた。

誰もいない・・・

「高木か？今は警備についているはずじゃ？その男は誰だ？」

いきなり後ろから来た兵に声をかけられた。

「襲われて監禁されてたところを彼に助けてもらつて。」

「こいつは何者だ？見たこと無い顔だし・・・兵ではないな。」

銃を構えた兵は二人の影に隠れた小さなコナンの存在には気がついていなかった。

平次と高木はそれをいい事にコナンを隠し警備のいない方に隠れるように誘導した。

「オレは服部平次。自衛団副団長や。」

「民を城にいれるなど無用心じゃないか。」

「しかし彼が僕を発見してくれたんです。状況を知るもの連れて隊長に報告しなければならぬでしょう。」

高木は捲くし立てたと言った。

彼が城に潜入していたなんて言えるわけが無い。

それに何があつても疑いを掛けられるのは必至。

勢いで突き通せば新たなチャンスが訪れるだろうという一心だった。  
「本来なら僕は警備にあたっている時間。城には何も異変は起きて  
ませんか？」

何も問題がないと言うなら理由を説明して頂きたい。」

「おおおい。問題が無いなど言つてねえぞ。警備に穴を開ければ連  
帯責任でぶん殴られてるさ。」

大人しい高木の勢いに押された兵は怯んでいた。

数人の足音が急ぎ足で近づいてくる。

「騒がしいぞ！チーフから指令を聞いてないのか！

たつた今特別警備体制に入った。待機の兵も玉座に集まり隊長の指  
示に従うように。」

急げ……。ん？……。なぜ高木がいるんだ？」

「襲われて警備部所を離れてました。」

「なんだとっ！それじゃ向こうにいた高木は……。？」

2人を部屋に閉じこめておけ。警備の者を1人を残して他のものは  
玉座の間に急げ。賊は高木に化けている。」

「閉じ込めるんですか？」

「本物の高木がどちらか分からないだろう。それに民間人はなおさ  
ら自由に行動させられない。」

もつともな指示。

仕方なく高木と平次はその場に残らざる得なかった。

閉じ込められた部屋は普段兵士たちが待機しているいつもの談話室。  
カードが散らばった長いテーブルと丸い腰掛。

プツプツと途切れた音がするスピーカーが壁に掛かっていた。

入り口で部屋の外で見張りに立つ兵士と高木がなにやら話をしてた。  
「坊主はうまくやつてるだろうか……。まあ、あいつが現世の工藤  
なら心配はいらんか。」

平次は窓から見えるキレイな月を見ながら呟いた。

「お待たせしました。」

玉座の間の7人は聞き覚えのない声を耳にした。

呼び出した男の声とは違う。

振り返ると白い影が立っていた。

「いついつの間に？」

「あの男はどうした？」

「彼なら少し休んでもらってますよ。監視ししながら使っている割には入れ替わっていることに気が付かないものですね。」

高木と思い込んで共に警備していた兵は下を向いた。

隊長も言葉が出なかった。

「賊が分かりましたっ！」

玉座の間の外が騒がしくなっと思ったたらいきなり扉が開けられ兵たちが雪崩れ込んだ。

「これはこれは・・・ふむ・・・もう本物が戻ってきたようですね。少々彼を見くびってましたか。」

多くの兵に囲まれても男は信じられないくらい冷静だった。

言葉通り計画に小さなミスがあつたとは思えないくらい落ち着いている。

「改めまして。初めまして秘書官殿。」

「貴様が怪盗キッドか。兵たちが騙されたお主の変装術を1度見てみたいものだ。」

「ありがとうございます。お褒めの言葉喜んでお受けしましょう。」  
「なぜ危険を犯してまで予告状を送り届けた？」

「素敵なレディにご挨拶に伺いました。秘書官殿。

予告状は何方が処理されるのか行方を見届けようと思ひましてね。あなたと少し話がしたかったのですが、残念ながらもうタイムアップのようです。」

キッドは丁寧にお辞儀をした。

「何がタイムアップだ。おまえがホールドアップするんだよ。」

気障な科白に兵たちは苛立ち銃を構えた。

「ホールドアップ・・・ですか？」

キッドはポケットに入れたその手を上げようとする何かが落ちた。

「閃光弾！？」

クリスの言葉は間に合わなかった。

それは一瞬にして目の眩む光を放った。

「目がっ！」

光の残像が消える頃にはキッドの姿も消えていた。

「ええい捜せっ！城内から出られぬはず。ヤツの変装に騙されぬ様お互いを確認するんだ。」

隊長の大きな声がする。

兵たちは混乱して声が届いていない。

「・・・やられたな。」

クリスは苦笑いを浮かべた。

あの光の中で兵に変装したのであろう。

雪崩れ込んだ兵たちの人数など分かるはずもしない。玉座の間の扉は全開のまま。

これでは城内から逃げおおせるのも時間の問題だ。ならばこの騒ぎを利用させてもらつとしよう。

「このまま野放しには出来ぬ。司令部に行き増援を要請しよう。」  
クリスは隊長に言った。

「かたじけない。よろしく願います。」

「わたしは司令室に戻り態勢を整えたら玉座の間の警備に合流する。」

「了解した。城門の警備は強化されている。我々はヤツを上追い込む。二班は副長に一班は我に続け。」

「『おうー。』」

氣勢を上げた兵たちは合言葉を確認すると一斉に動き出した。

「敵陣に堂々と乗り込んでくる男が合言葉程度は調べがついてるだろうに……」

賊を追いかける兵たちがさらに混乱するのが目に浮かぶようだった。

「ありがとう。状況が分からないと……」

「お互い様だ。殴られ損はいやだからな。」

見張りの兵から現在の状況を聞きだした高木が平次の傍に戻ってきた。

「僕に変装して白い盗賊団が犯行予告状を届けに来たようだ。」

「軍部の人間が変装が見破れないなんて。それにしても予告状をわざわざ届けるなんて。いったい何を盗むつもりや？」

「宝玉を奪うと書いてあったらしい。」

「そんな神官しか扱う事が出来へんのやろ？ コレクションにでもするつもりなんか？」

平次が言い終えると高木は唇に人差し指を立てた。

「君たちの年齢じゃ神からのお告げを聞く儀式が民の前で行われていたなんて見たことないだろう。」

「10年位前から非公開になって軍部が警備にあたるようになったんだ。」

高木は外に聞こえないよう小声で話し始めた。

「そやな。昔は軍部から鼓笛隊が参加するのみで警備隊がやっとっ



たつて聞いた事あるで。

しかしそれも鬼が頻繁に出現するようになって沢山集まる民の避難についても問題があるから非公開になったんやろ。」

それに合わせて平次も声を小さくする。

「確かにそういう公式発表なんだけど・・・儀式に使われる宝玉が偽物じゃないかという疑惑があるんだ。」

今回宝玉が偽物だというタレコミもあった。」

「それって極秘捜査の・・・話してもいいんか？」

「今の状況だと知っていた方がいいかもしれない。」

城内に不審な動きがあるのは薄々気が付いていたんだけど我々警備隊は城内の捜査に入れない。

それだけ軍部の力が強くなってしまった。強くなりすぎたんだ。国王の威厳がただ働いているかも分からない。

今回は鬼の出現で軍が各地に散らばったため、城の警備が薄くなってしまった。

そこで上司が軍の警備体制について勉強させるという名目で研修を打診したらしぶしぶ受け入れてくれたんだ。

ということ僕が参加する事になったんだけど、久しぶりに見たお告げの儀式は昔と変わっていたよ。」

「宝玉が偽物やとなると・・・言っちゃ悪いがあんた1人に荷が重いとちやうか？」

「まだ内密に捜査してる人間もいるさ。それに研修って名目で乗り込むのは駆け出しの僕が適任だろ。」

「なるほど。ボテッとしたあんたの相棒じゃきついだろうしな。」

「ダイエツトにはいいかもしれないけどね。」

「はは・・・そんじゃ、ここからどうやって出ようか？」

「そうだね。賊が侵入したのにわざわざ予告状を届けて盗まないなんて気にかかる。」

「それは直接聞いてみると分らんもんな。」

2人の口元が緩んでいると部屋の外が騒がしくなった。

「出るっ！賊が変装を解いて城内を逃げている。直ちに一班に合流して賊を捕らえよ。」

急にドアが開きチーフが叫んだ。

「オレは一般人やろ。」

「構わん非常事態だ。協力しろ。」

「じゃあないな。」

心の中と口から出る言葉は正反対。

堂々と城の中を探し回れる。坊主の仲間の存在も。

2人は部屋を出され、言われるままに兵の後ろに続いて走っていった。

クリスは司令室に戻り司令官と対面していた。

侵入者の知らせに司令室も緊張が走る。

賊を追いかける兵からの調査報告が逐一届けられていた。

「もう報告は受けておられるでしょうが例の盗賊団が侵入しました。司令部を占拠されては一大事。」

ヤツラは変装術にも長けてます。部屋の周りを兵で固めこの部屋に出入りを制限しましょう。

念には念を。司令官殿もご注意くださいませ。」

「君はここで補佐してくれないのか？」

司令官は明らかに落ち着いているように装っている。

「警備体制の変更で兵を動かしたため玉座の間が手薄。神からのお告げを聞く大事な宝。わたしはそちらに向かいます。できれば警備を増員していただきたいのですが？」

「いらんっ！……いや……警備はどこも手一杯だ。兵たちは賊

を追いつ込んでゐるはず。現状でしのいでくれたまえ。」

・・・気の弱い男。銃の腕前より風見鶏の如く頭でこの地位までやってきた。

軍にいてスピード出世するなど功績を立てなければ難しいもの。それ相応の窮地を経験してきたであらうにこの程度の状況でボロをだす。

鬼の恐怖にさらされる民よりも権力争いしかなかった城内の方が平和すぎたのかもしれない。

他の兵たちをどこの警備に当らせているのだろうか？

予告状の通り本物の玉は別の場所にあるようだ。

この司令官が独自の思惑で隠しているとは思えない。やはりタヌキ爺（将軍）が仕組んでいるのだろう。

「では兵に開発したマシンガンを用意させよ。」

「あれをですか？」

「この部屋に侵入できる輩がそれほどもいとは思えぬ。例えやって来たとしても蜂の巣にしてくれるわ。」

「ただいま準備させます。」

クリスが司令室を出ると警護する兵に新兵器の準備するように、そして賊が変装して現れるかもしれないから入室を制限することを指示をした。

特に信頼できる地位の者ほど確認を簡略化されて危険だと付け加えておいた。

玉座の間に戻る途中辺りを気にしながら通り過ぎる兵の後姿を見た。ネズミもドサクサに紛れて動き出したか・・・

策を練っていると男の声がした。

「昼間の男が現れたんだって？」

「カルパドスか。兵どもがヤツを上を追いついでいる。ヤツにとつては上に引き連れていると言ったところかな。」

「空から逃げるつもりだな。兵たちとは別行動の方がいいだろう。オレはどこで待機すればいいか？」

「西の塔に誘いついでいるのだろう。おまえは東の塔で待機してくれぬか。」

「東の塔から西の塔だと距離がある。さすがに俺でも打ち落とすのは難しい。」

「ヤツには聞きたいことがある。今回はこの騒ぎを收拾する為に追いついでいい。ここは堪えてくれ。」

「くっ・・・了解。」

カルパドスは銃を手に階段を上がって行った。

それだけじゃない。

兵の中に地ノ獄の使者が混ざっている。

行人のカルパドスと使者を接触させないためにもその方がいい。

しかしスナイパーとしてのプライドが邪魔しないだろうか。

指示に従ってくれるようお願いながらクリスはその背中を見送った。

### 13・古城探索へ思惑

城内は賊を捕らえるため、5人の兵で1組になってグループで搜索を始めた。

一般人の平次も副長に指示され高木と見知らぬ3人の兵士と城内を搜索していた。

城の廊下にずらっと並ぶ部屋の扉。

先頭の平次が賊が潜んでいるかもしれない扉を開ける。

賊が撃ってきたら1番危険な役目を押し付けられていた。

その横に高木が並び、兵たちはその後ろに控えていた。

信用しろっていうのは無理な相談なのか・・・

後ろの兵は平次と高木の背中に銃口を向けている。

賊は1度高木に変装した。また同じ手を使うとは思えない。

しかし裏の裏は表。同じ手には騙されないと兵たちは疑いを解かなかった。

平次が最初に部屋の中を調べられることはプラスの要素もあった。

張り詰めた緊張が続き兵たちはナカナカ自分達から部屋に入ろうとはしなかった。

誰にも邪魔されず高木と2人で室内を物色することができる。

どうせ搜索を指示された部屋に坊主の仲間がいることはないだろう。

しかし手掛かりがあれば間違いなくこの手に触れることが出来る。

そして緊急事態は何が起こるかわからない。

少女を非難させるなどの指令があるかもしれない。

その少女が科人となれば危険は計り知れない。

危険な指令ほど平次が使われる可能性が高い。

今はそう割り切るしかない。

「一旦隊に戻るぞ。」

後ろから兵の声がした。

異常がなくてホッとしたのか3人の兵は先を急ぐ。

「まったく肝っ玉が据わっておらんな。」

平次は怒りを通り越して呆れていた。

「服部くん。・・・コナンくんは大丈夫かな？」

隣を歩く高木が不安そうに声をかけた。

「アイツはオレの相棒。心配あらへん。」

平次は安心させるよう笑みをつくって言った。

「彼はまだ小さな子供だよ。」

「山椒もピリリと辛いつてな。」

平次はやはり同じような反応をした。

「・・・ごめん。」

はっと気が付いた高木は下を向いた。

しつこく言い過ぎた。彼の心の中はその表情と裏腹。彼が心配して  
いないわけがない。

「早よう賊が見つかる見えな。」

「そうだね。・・・きみは部屋を回って何か見つけたかい？」

「いや、今のところおかしい所はあらへんな。」

「どこに隠れているんだろう？」

「運命共同体・・・その言葉に二言はないな？」

「あっああ。二言はないさ。」

「坊主はもちろん、城に連れ去られた少女も捜しとるんや。協力し  
てくれるやろ。」

「それは・・・協力するよ。しかしどんな事情があるのか教えてく  
れないか？」

高木は質問した。

誘拐なら警備隊の仕事。城の中で捜査権がなくても自分の正義は曲

げたくない。

「こらっ遅れるな！何コソコソ話してるんだっ！」

先を急いでいた兵が急に振り返った。

「いや城の中はこんな広いのにトイレは少ないんやなってね。」

平次はすらすらと言いつくを作る。

「こんなときにクダラナイことを。」

兵士は呆れて歩き始めた。

「話せば長い話やから。後でな。頼んだで。」

「ああ。」

.....

隊に戻ると副長とクリス秘書官と話していた。

「先程の救護班から派遣された男もそっちで城内の搜索に入れてないか？」

「魚塚とか言ったベテランなら少し前にもう1人の兵と玉座の間の警備に戻しましたが。」

副長が説明していた。

「こっちには戻ってない。」

「えっ戻っていない！？」

「司令部から戻って警備の報告を受けた。」

国王家の警護、神官の警護、そして城門と司令部の警備の強化に取られこっちの警備に数が足りんのだ。

残念ながら司令官殿には増員は断られ、恥ずかしながらわたし自ら問い合わせに来るしかない始末。」

「ここから玉座の間は階段を降りるだけ。本日付で派遣されたとは言え道を間違うことはないだろう。」

隊長が歩み寄って言葉を挟んだ。

「まさか・・・」

いやなイメージが頭を駆け巡った。

「隊長つ・・・兵が殺られました。」

高木に変装したキッドと警備していた兵を含む組が急いで報告した。  
・・・不安敵中。

魚塚と同行した男の遺体を搜索した部屋から見つかったのだ。

「非常事態に油断していたとは思えん。賊は何人いるんだ？」

クリスが言う。

「あの白装束に意識を持っていかれてたかもしれません。何人もの賊が軍服を着て紛れていたら・・・。」

副長が下を向きながら言った。

「このことはここにいない探索中の兵どもにも話したのか？」

「いえ。わたしはあの変装を見破れなかったので直接隊長に。知っているのは一緒に搜索したメンバーのみでまだ誰にも。遺体は部屋に残したままです。手厚く弔ってあげたいのですが今は

非常時。」

「そうか。それは間違いないな。すると賊はまだ魚塚に化けている可能性があるな。」

「魚塚・・・応援で合流したあの男ですか？」

ならば副官の指示で行動しているとこの下の廊下で会いました。」

兵士は言った。

「本当か！」

「城門の警備は万全だ。賊は門から外にはでられない。」

クリスは言う。

「上に行くで見せかけて下から逃げようとしてたのか・・・しかしここに我々が待機しているのを知っているはずだな。」

「・・・閉じ込められた賊が考えるとしたら・・・混乱を起こすために情報操作。」

クリスが呟いた。



「なるほど脱出経路を作るにはその手が考えられますね。すると狙いは司令部。」

「よしつわたしが行こう。」

隊長が言った。

「隊長自らですか？賊討伐の大將が動くのはっ」

「司令部を占拠されてはならない。しかし状況は刻々と変化するだろう。」

状況を把握することが先だが報告から指示を待つ余裕がないかもしれない。

大人数で動くと賊に察知されるだろう。

わたしを含めた小人数で動く。副長はひそかに兵を集結させわたしの一斉攻撃命令に備えよ。」

「はっ！」

副長は敬礼をした。

「キャンティはいるか？」

「やっとアタイの出番？」

部屋の壁に寄りかかっていた女兵士が歩み寄ってきた。

「おいっその口の聞き方は隊長に無礼だぞ。」

副官が急いで女兵士の前に立った。

「かまわん。おまえの腕に期待してる。上から逃亡を企てる賊を仕留める。いいな。」

「OK。あたしのスコープに捕らえられたら死あるのみさ。」

自信たつぷりの女は愛用のスコープを覗いて見せた。

「頼んだわよ。キャンティ。」

「クリスっ邪魔しないでよね。スコープに割り込んだらあんたでも撃つよ。」

クリスの声に女兵士のテンションが激高する。

「おいっ秘書官殿にまで。」

副官がまたたしなめた。

軍部は縦社会。生意気なキャラを多少の多めに見られていてもソウ

ソウ許されることではない。

キャンティは大人しく下がった。

愛用のライフルにスコープをセットし隊長に敬礼をした。

「Good Luck。」

クリスが言葉を送る。

キャンティは舌打ちで返し兵を連れ出て行った。

「すまない。あいつの腕は確かなんだが。」

隊長はクリスに氣を使つて謝った。

「氣にしていないわ。女同士はいろいろあるのよ。」

クリスは笑みを見せた。しかしその目は冷たかった。

・・・・・・・・

「危なそうなやつだな。」

その光景を離れて見てた平次は高木に言った。

「ああ。彼女は腕利きのスナイパー。そのうえ早撃ちの達人なんだ。科人でさえ術を使う暇を与えないだろうと言う評判だ。

だいが隊長に目を掛けて貰っていて、周りも扱いに手を焼いてるよ。うだよ。

それに女性や子供でさえ容赦はしない。賊もスコープに捕らえたら最後だろうな。」

「そうなんか。でも自分勝手なヤツの自信は命取りになるで。

そやつ何でこのフロアに兵が集められるスペースがあるのやるか？」

「このフロアは城が攻められた時の国王を守る最後の戦場になるんだってさ。」

「しかしここまで城に侵入されたら守りきれんやろ。」

「そうだったら最後の最後だね。」

高木の答えに平次はため息をついた。

ここが最後の戦場になるとは国王を逃がすための砦と言つの意味だろう。

このどこかにフロアを縦断する隠し通路があるのだろう。  
まだ坊主が見つかったと言う報告もない。

これだけ兵士が捜しても坊主の姿を見つけれないのは、その通路を見付け出したのかもしれない。

しかし問題はその出口。

オレ達は地下通路から進入して来た。坊主が下に向かう筈はない。  
兵に囲まれたら上からでは逃げられない。

さらに危なそうなスナイパーが向かっている。  
いざとなったらどうやって脱出経路を作るか。

平次はこっそりとフロアを探索することにした。

・・・・・・・・・・

隊長は部隊の猛者に司令室のあるフロアまで別々に集まるように指示した。

「ではわたしはこれで。」

「必ず賊は討つ。吉報を待ってくれ。」

隊長は自身満々の顔でクリスに警備に戻るよう促した。

クリスは階段を降りて行った。

しかし玉座の間には戻らない。

クリスは辺りに人がいないことを確認すると先程と同じように右手を左腕にあてた。

科人の紋章に意識を集中させる。

すると一瞬にして魚塚三郎准尉に変わっていた。

科人の術は時間を操ること。変装術に長けている科人ならば一瞬に変装を完了させてしまう。

「・・・変装は白い彼だけのものじゃないのよ。」

集められた兵たちより先に司令部へと急いだ。

## 14・古城探索へ遭遇

「・・・賊は見当たらないな。」

「ああ、ここじゃねえみてえだ。・・・あの気障野郎め。今度逢ったらあの口を2度と使えなくしてやるっ！」

兵たちは賊と接触しなくてホッとしたのか急に強気な言葉を吐いて部屋のドアを閉めた。

ここは玉座の間から2つ上のフロアにある大広間の隣にある控え室。先代の国王の妃様の肖像画が飾られ、格調高い暖炉の前にゆったりとしたソファーが向かい合っていた。

誰が部屋のドアを開けるか？誰が1番最初に中に入るか？

モメタ末に調査を始めた部屋の中でも兵たち5人が寄り添いビクビクしながらソファーの周りを一周しただけ。

しっかりと調べず、そそくさとドアを閉め出ていった。

「・・・見つからなかったか。」

暖炉の中に隠れていたコナンは安堵のため息をついた。

しかしゆっくりもしてられない。

ホコリを叩くと部屋のドアに耳をあてて廊下の様子を確認した。

兵たちの会話の意味は理解している。

今まで聞いた会話を繋げてみると賊は高木さんに化けていた侵入者・・・銃を手にした兵士が恐れる賊はどんなヤツなのだろう？

しかし玉を盗みに来たドロボウには興味はない。

今は城のどこかに捕らえられているだろう灰原を捜し出さなくては。

ドアの向こうの話し声が遠ざかってゆく。

隙間から兵士が廊下の角を曲がったのを見届けると、急いで廊下に

飛び出し隣の部屋のドアをゆつくりと開けた。

ここも人の気配は無い。

慎重にドアを開け中に入ると廊下の状況を確認しながら静かにドアを閉めた。

服部たちと別れたコナンは入り組んだ城の造りは迷路。

困惑しながらも1人で城の中を調べまわっていた。

兵士が集まって騒いでいた玉座の間をうまくすり抜け、辿り着いたこのフロアもたくさん部屋の壁が並んでる。

さらにフロアに接続するたくさん階段の上から下から部屋の中からも兵士の声や足音が聞こえてくる。

さすがのコナンも身動きが取りづらくなっていた。

それでも慎重に探索を進め、やっとこのフロア最後のドアを開けた。部屋は物置代わりに使われているのだらう。

部屋の奥から幾卓かのテーブルやイスが隙間無く並べられていた。

この部屋は兵たちによって調べられた後なのだらう。

窓から差し込む月明かりは長い間放置された備品たちから舞い上がったホコリも照らしていた。

「隊長が上のフロアで報告を待っている。早く報告してしらみつぶしに調べていかないと。」

「ああ、あの男に城の中をウロウロされては腹が立つ。でもよ。階段を登ったり降りたりオレはもう脚が張ってるぜ。」

「階段がこれだけあるとキツイよな。」

変装術の使い手だからって俺たち兵士同士が何度もかち合うように回って搜索するなんてな。増員は無理なのかな？」

「だろうな。報告の内容も七掛けにして判断しているっていう噂だぜ。俺たち現場の声は大げさだって言ってたらしい。」

あの司令官はキャリア組。現場を知らないし視察さえイヤイヤだつてと聞くしな。いくら秘書官が言っても難しいのかもしれないな。」  
忍び込んでいた部屋の前ですれ違った兵士たちの会話が聞こえてきた。

「ツシユン……上のフロアにも兵士が集まっているのか……それにしても……ゴホゴホ……」

舞っているホコリを吸い込んだコナンは彼らが通り過ぎるまで必死にガマンしていた。

新鮮な空気を取り入れるため窓を開けると城の中庭が見えた。

これだけ捜してもまだ4階。上の方を見ると窓が小さく見えた。

「かなりの部屋が残ってるな。このままじゃ朝になっちまうぜ。」

時間は待つてはくれない。

上のフロアには兵士達が集まっている。しかし進まなくてちゃんらない。

焦るな……

もう1度城の全景を思い浮かべ考えてみた。

高木から城の全貌を簡単に説明してはもらっている。

中庭を囲んだ巨大な四角い建物の四隅に塔が天を目指して伸びていると聞く。

現世から飛ばされた灰原は科人。それを知ったことならば人の目につかないところに幽閉するだろう。

人の目に付かないと言えば1番最初に思いつくのは地下室。

しかし地下室は服部と見て廻った。

そして目に付く最上階の塔。

城の全景が見渡せる場所に見張りがいて当然の場所。

しかも普段から誰もが通る場所ではない。

調べに登ってゆくしかないが兵に見つかれば逃げる場所はない。

しかも塔は4箇所ある。

身につけている物に武器になりそうなものはない。

例え剣のような物を持っていたとしても使いこなせないのは京都の事件で分かっている。

できる限り兵と鉢合わせになることなく進まなくてはならない。

さらに隠し部屋もあるだろう。

しかし人目につかないといえども恐れている科人に警備をつけていないとは思えない。

必ず最低限の見張りはつけている筈。

賊の騒ぎでも彼らは持ち場を離れることはないだろう。

同じように国王家の寝室や財宝を入れた金庫室等のような部屋も兵たちも警備を解くことはない。

外からの判断はかなり難しい。

オレは何か感じていなかったか？何か見落としていないか？

窓から入るひんやりとした空気がオーバーヒート気味の頭を冷やす。月明かりを見ているとふと気が付いた。

下から見て遠くなるほど窓が小さく見えるのだが窓自身が小さくなっているのかな？

1つ上のフロアの窓のサンの数が少なく思える。すると窓の作りが違う。部屋の作りが違うのだろう。

さらに視線を上げると決定的なモノひとつ。

もしや・・・

コナンは廊下をすり抜け、前に確認した部屋に急いだ。



窓から城の屋根に煙突が見えた。

あの下は大広間。格調高い暖炉にはマキがくべてあった。

しかしその隣の部屋の暖炉の煙突がない。

さつき隠れたとき感じたもの。それは・・・

コナンは急いでその冷たい石の囲いに頭を入れた。

ここで服についたホコリを叩いた。しかし服やその叩いた手は黒く汚れることはなかった。

やっぱりススを被っていない・・・そしてりっぱな蜘蛛の巣。ここは使われていない・・・

捜していたもうひとつの可能性。

それは上層部しか知らない抜け道。

阿笠博士から聞いた緊急脱出用のドックに続く地下道を使って城に侵入した。

いざと言う時に使う避難経路が城の中に隠されていてもおかしくなかった。

積み上げられた石の隙間に手を掛けようにもきつちりと積み上げられ余裕は無い。

コナンは壁面に足を伸ばし背中をくっ付け、軀を突っ張って通気口をゆっくりよじ登った。

壁と同化していた蛾が一斉の飛び立つ。

暗闇の中、小さな吐息の周りに羽音をたて怪しく踊っていた。

しばらくすると頭に鈍い音。

上には行き止まり。そして横穴があった。

「見つけたぜ。」

さてどこに出られるのか？王の寝室かそれとも・・・

コナンは暗い通路を空気の流れる方向に進んだ。

大人が通るように作られているため幼児化した体には余裕があった。

しばらくすると行き止まり。しかし隙間から石の向こうの方が明るいのが分かる。そして空気が流れている。  
音はない。誰かいたら・・・

コナンは慎重に石の板を押した。

ゴゴー・・・ゴゴー・・・ゴー・・・

一旦止めて様子を伺う。室内ではない。

この向こう側は外。テラスのような部分なのだろうか。

兵士たちの話し声も足音もない。

さらに石を押す。

「うわっ。」

石が重みで落ちた。

「やべっ。」

一瞬コナンが手を伸ばすと石は宙で落ちるのをやめた。  
科人の術。自分で使用する機会を制御できないのだろうか？  
命を削って使うならその方法を見つけなければならない。

石はコナンの意志によってゆっくりと地面に降りた。

人の気配はなかった。

コナンは辺りを見回しながら通路から這い出た。

月の位置からしてここは東の塔の下の踊り場あたり

「子供の寝る時間は過ぎてるんじゃないのか？」

「・・・しまったっ。」

気配に気付かなかった。しかしこの声に聞き覚えがある。

「キッドっ!？」

ゆっくりと振り返ったそこに白い影がいた。

「ほう・・・その名を知っているとはね。」

月を背にした白い影はゆっくり近づいてきた。

コナンが身構えると歩みを止めた。

「まだ力を操れないじゃないのかい？」

「……。」

こいつは石版を浮かしたところを見ていたのか。もう正体がばれている。

「科人の少年に興味があっても戦う気はないさ。」

キッドは手を広げその意を示した。

「何か盗んだのか？」

この顔を見るとそう思ってしまう。

「いや。今日は予告状を届けにね。ただ厚いもてなしに断りきれなくてね。」

素直に答えた彼の後ろであちこちの窓に浮かぶ灯りが兵たちの影を映していた。

「盗まれると思うとやたら嚴重に警備するらしい。あれじゃどこに隠してあるか教えてるようなものだな。」

城の中には警備の状況は把握できないが城の外から見れば灯りの様子で一目瞭然。

「おまえがいることは知ってるんだろう。罠……とは考えないのか？」

「もてなしてくれた相手次第だろう。」

「これからまた行くのか？」

「いや、今夜は終わり。坊主は何をしてるんだ？」

「人捜しさ。」

「警備の目を盗んで城を駆けずり回って……彼女でも捜してるのか？このオマセさん。」

「そんなんじゃないよ。」

「ふん。お互い追われる身。坊主のジュリエット捜しに付き合ってもいいぜ。」

「オレの名は江戸川コナン、探偵さ。ロミオじゃねえよ。」

「へえ、コナンというのか。面白い名前だな。」

「悪かったなつ。」

「親のつけた名前をけなしたつもりはない。1度聞いたら忘れない  
と思っただけさ。」

「なんならオレの名付け親も紹介しようか？」

キッドはこの世界のキッド。同じ科人ならばオレの本名を知っているはず。

「モノクルで素顔を隠したコソドロさんの名付け親に逢わせてもらえるのかい。面白いじゃねえか。」

「赤みのかかった茶色い髪は坊主の好みじゃないかな？」

「名付け親って・・・」

「囚われの科人の少女。興味深いだろう。」

「ああ・・・ん？その口癖は・・・。」

「気にするな。」

キッドはコナンを連れて階段を上っていった。

「ここから先は予定外の行動。オレは西の塔に向かうつもりだったのでね。」

兵がいるかもしれないから気を抜くなよ。」

キッドはコナンに背を向け歩き出した。

両手をポケットに入れて先を歩くその振る舞いに隙がない。

コナンの正体。科人と知っているだけに当然のことだろう。

そして灰原のところに連れていってくれるという。

彼も追われている身。ゆっくり寄り道することに意味があるのだろうか？

白い怪盗は何を考えているのだろうか？

何を狙っているのだろうか？

コナンが考えながらついてゆくとT字路でキッドが立ち止まった。2人が歩いてきたテラスからの通路の先には塔の屋上に続く階段。その手前に下からの階段からの通路と合流している。

「おでした。」

キッドは胸元からトランプ銃を抜き出した。

コナンは武器になるようなものは持っていない。防御する盾もない。人が人を殺す事は理解が出来なかつたと接触は避けられない。

現世のキッドは殺しはしなかつたがこの男はどうなのか？

近づいてくる足音に緊張が高まるばかりだった。

## 15・古城の探索と接触

隊長が自ら銃の点検し始めると集結した兵士たちは浮き足立っていた。

その銃は普段腰に収められている物とは違い、数々の逸話を残すスナイパーの愛銃だったと聞く。

窮地に追い込まれながらも怪我を負った仲間を救出し盗賊団を蹴散らしたという語り継がれる伝説を作り上げた相棒でもある。

あの銃はいくら名手でも重くてクセがありなかなか使いこなせない。しかしその精度は高く、どんなに離れていてもターゲットに収めた通りに撃ち抜き奇跡を起こしてきた。

伝家の宝刀と言ってもいいその銃を手にした隊長の顔はにこやかに変わっていく。

返ってその方が恐ろしく見える。

「静まれ！命令が下されるまで待機だ。今のうちに貴様等も銃の点検を済ませよ。」

副官の指示が飛ぶ。

それでも兵士が集まった広間はヒソヒソ話は止まなかった。

1人こっそりと抜け出し搜索を始めた平次はフロアを歩き回っていた。

搜索が続いているコナンと合流することもある。彼の仲間を捜すこともある。

しかしこれだけの兵が賊を捜していて歩き回って見つからないとなると・・・

あいつは隠し通路でもみつけたんとちゃうやろか？

まずは自ら搜索していないフロアをしらみつぶしに調べるしかあらへん。

もしかしたら賊もその通路を使っていたかもしれない。

坊主は大丈夫やるか。急がなくちゃ・・・

賊といえば兵たちが殺人に気がつかなかったのはなぜだろう？

殺人現場はこの上のフロア。男の目撃証言はこの下のフロア。

フロアに搜索中の兵士がうろろしてようと隊に合流して間もないベテランが極秘任務と言えば信じてしまうだろう。

しかし殺人まで計画的だったとは考えられん。

玉座の間から消えた賊を当て無く兵士たちが捜しに飛び出した。

しかし人が消えるはずは無い。

わざわざ目立つ高木さんに変装してまで予告状を届けたのが目的ならば、

また変装して隊の中にいるかもしれないと疑心暗鬼にさせて逃げる機会を作る計画なのだろう。

それなのに・・・殺人をしなければ逃げられない状況にあったのやろか？

いや・・・遺体を隠さずに変装した姿を見せるのは大胆な計画というより不用意な行動。

まだ平次の勘でしかないが賊と殺人者は別のような気がした。

緊急事態のため殺人現場はそのまま残されているはず。

調べれば高木さんの係わる捜査の手がかりが見つかるかもしれないな。

平次が歩いていると冷たい目をした男がいた。

先程の女性と同じスナイパーなのだろうか？

軍服ではなく黒いロングコートを羽織りついていた。その裾から銃の先が見え隠れする。

その醸し出す異様なオーラは戦場を感じさせる強烈な緊張感を押し付けてきた。

「・・・」

「あつ・・・いやトイレを探してん。」

平次は何も話さない男の雰囲気飲まれていた。

「・・・」

男の視線から突き刺すように身体を突き抜ける。

「ああ見つかった。すまんのう。」

平次は仕方なくトイレの方に歩いていった。

・・・・・・

その頃一階では先鋭部隊が揃い隊長からの命令が伝えられた。

「皆を集めたのは他でもない。賊が10年前のあの男ではないかという疑念がある。我々はヤツを捕らえ葬り去る。」

隊長が話し始めた。

「10年前と言えば・・・あの男は死んだのではないですか？」

「ヤツの遺体は見つかっていない。」

あの装束といい予告状を届ける手口といい共通点が多い。

しかし模倣しているとも限らない。捕らえればはつきりするだろうがな。」

その男の話は軍の誰もが聞いたことがあること。

現在の将軍が大佐の頃に直属の部隊に指令を出していた事件。その部隊に隊長はいた。

未だ詳しいことは公開されていないが十年くらい前に国王の行った儀式にクレームを着けたと言われている。

当時は国王にたてついた極悪人として国中の話題をさらったが、男が姿を消してから時間が経ちすぎた。

言われるまで誰もの記憶から消え去っていた。



「見つからなかったのは国王の祈りを神が受け入れ迷宮に葬ったと聞いておりますが？」

「そうだつ。神官の調査であの男はこの世界に初めて現れた科人だとか言っておったな。」

「確かに科人が相手となると術を使いますからな我々先鋭部隊の一番となったわけですね。」

でも・・・本当に同じ人物ならば偉大なる国王の術を破ったことになる。そんなこと考えたくは無い。」

「科人が相手なら不足はない。我々の腕の見せ所じゃないか。」

先鋭の兵士たちも動揺を隠せない。

「王を崇める気持ちは分かるが、鬼が出没する今となつてはその目で事実を確認しなくてはならん。」

ヤツが例の男ならば以前も協力者の影がちらついていたから1人は限らんぞ。

もちろん模倣していても同じこと。気を抜くなよ。」

「はっ。」

集められた先鋭部隊の皆は頷いた。

「賊が司令部に向かつているのを目撃と報告がありました。」

伝令から状況を聞いた兵が言った。

「やはり秘書官の読み通りか。司令部の警備は万全か？」

隊長はため息をついた。

「はい。それが妙なんです。」

司令部よりこちらの警備は万全だ。周りに兵を並べ厳重に警戒していましたが我々には戻るよう指示が出てるの一点張りです。」

司令部と連絡を取った兵が言った。

「まったく実戦経験も大した事無いのにプライドだけは高いのかっ。」

「1人は吐き捨てるように言った。」

「あの司令官のこといざとなればすぐに心変わりするさ。」

しかしあの男が他の誰かと接触したという報告はないが、城の中を自由に行動できるとはどんな完璧な下調べをしていたとしても信じられん。

城内に手招きしている者がいるのでは？」

「共犯者は追い詰めれば炙り出せるさ。」

それよりも現状打破だ。窮鼠ネコをかむと言っだろう。

例の男は人の命は取らないと言われていたが追い詰められ殺しまで犯した。

こうなればたとえ1人になっても玉砕覚悟で司令部を襲撃するだろう。」

「司令部を占拠されたら城の伝達経路がすべてヤツの手に落ちる。」

軍はバラバラにされては賊の思うまま急がないとならぬな。」

「先鋭部隊の腕の見せ所だな。副官に状況を見ながら行動するように指示を出してある。存分に暴れてくれ。」

隊長が言った。

「ヤツの仲間が城外からの侵入を企てても秘書官が警備を強化している。」

我々は司令部を占拠される前にヤツを確保する。最悪の場合ヤツが口が聞けなくてもよい。いいな。」

「了解であります。」

兵たちは司令部に向かって移動を開始した。

.....

テラスから塔に向かうコナンたちは兵たちの足音を聞いた。

「来たな。」

聞こえる足音は十人も居ないだろう。

だからといって一戦交わう余裕などはない。

それにコナン達の方が不法侵入者。彼らはその職務を全うしているだけで罪はない。

「それでは。」

キッドは廊下に飾られている花瓶を撃ち抜いた。中に仕込まれていた油が流れ出す。

「うわっ！」

階段を駆け上ってきた兵が足を滑らせた。

後に続いた兵士を巻き添えにして転がり落ちた。

本当に彼にとって予定外の行動なのだろうか？

「時間を稼いだまでだ。先を急ごうかロミオくん。」

コナンは笑みを浮かべた。どの世界にいてもキッドはキッド。人を喰ったような手を用意している。

「ああ。」

コナンは後ろを走った。

しかし追いかける足音が無くなることはない。

別の階段を使って追っ手が迫っていた。

「まずいな。」

「その部屋に入るぞ。」

コナンはキッドに言われるがまま入っていった。

「ここは・・・？」

「備品倉庫さ。」

この部屋にはテラスに使うデッキチェアやパラソルが置いてあった。

まるでアウトドアのショップのような品揃え。

「このガラス板は・・・この鉄骨に繋げて温室でもを作るのか。」

「科人の坊やは知らないだろう。黄泉の国は陽の光が弱い。」

行人の現れるあの大地はもう痩せこけて草木が生えてこないのさ。生きるもの誰もが光に当たることを欲しているんだ。それが1番の

療養とされている。」

「そうなのか。」

コナンが見てきたベイカの街は活気があふれ人々の声が溢れていた。牛車で青々とした野菜や果物が運び込まれていたのを見ている。

ではあれはどこから運ばれてくるのだろうか？

ハデス神はプルトンとも呼ばれている。それは富の象徴。それなのに住人は・・・

それが軍の存在理由なのかもしれない。

「その陽さえも拒まなくてはならない存在が行人。黒マントを頭から被り判決が決まるのを待つ。」

それが神の決めた事だから彼らは受け入れている。そしてこの世界の住人も彼らを受け入れ送り出している。

しかし鬼が現れてその神の決めた連鎖が崩れた。誰が壊したのか神は何も暗示しない。

連鎖が崩した者が自覚しているからだと言っているようなものだ。

ならばそれを元に戻すのも人の力でやるしかない。」

「課された罪・・・おまえはドロボウなのか？」

コナンは呟いた。

「坊やが科人だから教えたままでさ。この奥に隠し扉がある。その先に塔の階段が見えるはず。」

キッドが邪魔なデッキエアーを蹴り飛ばすとコナンはテーブルに飛び乗った。

そしてその先のかくし扉を開けた。

「先に様子を見てくれないか。」

「ああ。」

コナンが潜りこむと2人のいる部屋の扉が開いた。

「ネズミ一匹になに時間かかっているのさ。」

兵たちを割って1人の女兵士が出てきた。

「腕利きのスナイパーのお出ました。」

「あの声は・・・確かキャンティ？」

コナンは現世で盗聴器で聞いた声を思い出した。

キッドは潜っているコナンが出て来るのを止めた。

「あたいのスコープにロックした獲物は逃げられないよ。」

「ほう。」

キッドはトランプ銃を撃った。

キャンティも引き金を引いた。

しかし飛び出したカードは彼女の放った弾丸に撃ち落された。

「お見事。しかしわたしは撃ち抜けませんよ。」

キッドはガラス板の後ろに立った。

「次は心臓を撃ち抜いてもいいわよ。その方が楽になれるからね。」

「ほう。しかし仕留めそこなわれて苦しむのは耐えられませんか。外さないようにここに印をつけておきましょうか。」

キッドは自分の心臓の位置に合わせてガラス板を指で叩いた。

「あたいの腕を見損なうな。」

「チャーミングな女性がそのような言葉は頂けませんよ。」

「ふふふ・・・先にその口から撃ち抜いて差し上げるわ。」

キャンティのスコープにキッドの顔がロックされた。

銃声と共にガラスが割れ飛び散った。

ガラスが粉々に割れ埃舞う中に人影が浮かび上がった。

キッドは倒れていない。

そしてその口は弾丸を咥えていた。

ゆっくりと手を伸ばし弾丸を取るとその場に落とした。

カラン・・・カラン・・・カラン・・・

金属音が床に転がる。

「そんな・・・。」

残りの弾丸も全てキッドに向かって撃ち込んだ。  
やはりキッドは倒れない。

そして掌から弾丸を見せると兵士に向かって放り投げた。

「なっなんなの・・・さ・・・。」

キャンティは声にならない言葉を発した。

「弾丸まで素手でキャッチした。・・・あの男は科人だ。やばい。  
科人には銃なんて通用しねえんだ。」

兵士達はキャンティを残し蜘蛛の子を散らすように消えて行った。

・・・負けた。

キャンティは身体力が抜け座りこんだ。

予備の弾はジャケットの中に残っている。

例え賊が時を与えてくれたとしても震えたこの手では詰め込むこと  
さえもままならない。

初めての負けゲーム。

失敗は取り返せても負けは『THE END』

「・・・殺せ。スナイパーは殺し屋。他の連中のように捕虜にはな  
れない。生かしておいたら危険なことくらい分かるだろう・・・。」

内紛の地で捕らえた敵のスナイパーは丁寧な銃を置きそう言った。

「何か言い残す事は無いか？」

隊長は静かに言った。

「この銃に罪は無い。引き金を引いたのは血で汚れた俺だ。なか  
かの逸品だぜ。」

「私が貰い受けよう。」

「ありがと。」

あのスナイパーは命乞いもせず嬉しそうに笑った。  
煙が上がる戦場に一発の銃声が鳴り響いた。

あの日の記憶が蘇ってきた。

あのスナイパーのプロ魂など理解出来ず、負けるヤツは自分の腕を呪いなど高飛車な言葉しか思い浮かばなかった。

引き金を引くその手が血で汚れる事は無い。だからスナイピングは命を賭けてゲームだと言い聞かせてきた。

追い込まれてゲームの恐ろしさに気が付く愚かさ。

・・・あたいはまだ死にたくない・・・

無様な姿を見せて隊に戻ることもできない。

キャンティは目で訴えた。

「わたしは軍人ではありませんから。」

キッドが彼女を置き去りにして奥の隠し扉を潜っていった。

キャンティはうな垂れたまま。もう軍に居場所はない。

「計ったな。」

1番近くにいたコナンは気がついていた。

「・・・一発は実弾を入れないと相手にばれてしまうからな。

残りは空砲、火薬の音だけさ。あの銃だけは実弾を抜いておいたからね。」

「銃の腕は調査済みだったんだな。」

「ご明察。・・・元々この世界に魔法など無いのさ・・・。」

キッドの言葉には何か隠されている。

コナンはこの言葉の続きが気になっていた。

「さあ行くぜ。」

キッドはコナンの肩を叩いた。

「ああ。」

南の塔の階段は目の前。2人はまた走り出した。



## 16・古城探索／策略その1

司令室に続く廊下に辺りの気配を気にする兵士がいた。誰もいないことを確認すると近くにある機械室の扉をゆっくり開ける。

「さあどう出てくる？」

クリスの声が微かに空気を震わせた。

しかしその声と似遣わないガタイのいい兵士の姿しかいなかった。

兵士は部屋の壁を這っている通信回線に繋いだ特殊な通信機のヘッドホンを耳に当てた。

「副長の隊を二手に分け玉座の間の警備に回って頂きたい。」

回線をダイヤルを合わせるキューンというチューニング音がしたと思うとまた違う声質。

『了解した。』

受信した向こうも違和感もなく指示を承諾した。

タツタツタツ・・・

速やかに指示に従い行動を始める兵士の足音が真夜中の廊下から響いてくる。

「疑うという言葉は知らないのかしら？」

呆れたような気だるい声。

『・・・セットできないのかっ！』

通信を切り替えたヘッドホンから叫び声が聞こえる。

有線のおかげで司令室の話も仕掛けたマイクからクリアに聞こえていた。

「・・・こちらは相変わらず落ち着きが無いわね。」

クリスの声を発する口元から笑みが漏れた。

「そろそろ先鋭部隊が近くにいます。役者が揃ったときにわたしの舞台が始まる。」

・・・・・・・・・・

「警備はどうなっている？」

マシンガンの点検を終え、その引き金に指を掛ながら司令官は聞いた。

「賊の情報は集まっていますが、接触したという報告はありません。」

情報収集していた通信班が答えた。

司令室では情報の伝達に使われている各回線を解放して流していた。全ての会話を傍受することで状況を確認していた。

ここは黄泉の国。城内もまだ有線しか使われていない。

特異な世界のため現世と同じようには技術革新は進んでいなかった。

「将軍に目をかけてもらっているんだから早急に処理してもらわんと困るんだが。」

新兵器を前に司令官の言葉にはまだ苛立ちを隠す余裕があった。

「ここにいる兵たちも厳しい訓練を受けております。命を賭けて死守いたす所存です。」

司令官の前に立つ男が言った。

男の名は富沢雄三。

裕福な家柄の出で気が優しく画家になるため勉強をしていたが父の死をキツカケに入隊した異色の男だった。

隊長のように大きな実績はない彼も家柄を考慮した上層部の計らいで、

あまり前線に出ることなく若くして城内警備として十数名の部下を

率いる立場に立っていた。

「前線を経験した兵士らを信じてないわけじゃない。

その大將も実戦経験が少ないながら戦術や用兵法などに長けていると評価されてるようだし。

・・・貴様に任せて間違いないんだろう？」

司令官は叩き上げの戦士よりも話が通じると魅力的な家柄と関係を築きたく彼を傍に置かせていた。

しかし有事であればそんなことは関係ない。

一発の弾丸が勝敗を左右することもある。

実戦経験が少ない者に命を任せることになるなんて嫌味の1つも言いたくなる。

「軍は縦社会。上の者の指令にはYESしか答えがないのだよ。

それがいやなら上の地位を手に入れることだ。

隊長だと持ち上げられて上の者にも意見するヤツは縦社会を湾曲させている馬鹿者だ。

あれでは示しがつかない。誰も取り上げようとはしない。

だからいつでも死と隣り合わせの指令ばかり請け負うことになる。

それに答えた力は認めざる得ないが、軍とは小隊と違って大局を考えるもの。縦の繋がりは崩しては成り立たない。

將軍直属の小隊などと司令官のわしを差し置いて將軍と直接話をするなんて物事の順序を理解しておらん。

登城して普段の任務とは違うものであっても任務は重責。

賊を捕まえたとしても侵入された責任はヤツに背負ってもらう。

貴様も勝手な作戦や行動は慎みたまえ。経験が少ないのだから。いいな。」

「責任につきましてはわたしが物申す立場ではありません。

今は賊を捕まえるのが先。その作戦の打合せをしたいと思います。」  
聞いていて見苦しい話に嗜めるように言った。

軍が縦社会だというのは重々理解している。

しかしその地位を手に入れるために実績以外のものを過大評価されても意味は無い。

それは富沢自身がよく解っている。

隊長も秘書官もその経験から醸し出すオーラに誰もが圧倒されるのも事実。

作戦会議でも司令官も肩書きによって抑え付けているようなもの。

その腕と頭脳が確かなことは誰もが認めていた。

秘書官とはあまり話したことはないが隊長には自分に足りないその経験談を拝聴させてもらっていた。

部隊というよりも小人数の特殊なゲリラ小隊の方が合っていると自覚している男。

危険な仕事ばかり与えられる職場で部下とは家族のような信頼関係を築いていた。

そして出世は部下の生活に多少は必要だと考えているだけであまり興味ないことも知っていた。

そういう生き方ができる隊長を富沢は羨ましく思い、完璧に仕事をこなしてもその自由すぎる態度が軍の規律を重んじる司令官は妬ましく思っていた。

「まあいい。ここまで来て見る。賊などこの新兵器で木っ端微塵だ。」

新しいものには目がない司令官は強力な兵器となると手元に置きたがる。

実験の段階から現場よりも城に常備させることを進言していた。誰もが必要ないと思っても直接言える筈はない。

しかしこういう状況になれば文句の言いようも無いだろう。

富沢に経験がないと詰つても司令官自身戦場の経験が乏しい。力を倍増してくれる新兵器が頼もしくて仕方が無かった。

司令官はその先見の明を鼻にかけ、マシンガンの性能を嬉しそうに通信班に説明していた。

「しかし使い慣れていない兵器はその性能を生かしきれません。しかも移動がままならない武器は城内で持て余します。」

「うるさいやつだな・・・貴様は早く持ち場に戻れ。その顔を見ると気分が悪くなる。」

「・・・警備に戻ります。」

その腹のうちを隠したまま富沢は部屋を出た。

「まったくあれでは警備隊長になめられるわけだ。彼は恵まれた環境を手にながら使い方を知らん。

現場でしか生きられないヤツに頭を下げ続けるなんてプライドというものがないのか。」

司令官は嫌味を1つ2つ溢しながら同意を求めたが司令部にいる通信班たちは何も答えなかった。

・・・・・・・・・・

「屋上で賊と接触。抹殺許可求めます。生け捕りならば至急応援求めむ。」

ヘッドホンから声が聞こえてきた。

「キャンティのところの兵ね。カルパドスより腕は落ちるけどあの子はシツコイわよ。」

気障な坊やはどうするのかしら。早くケリをつけてもらわないと幕が上がらないわ。」

機械室からまたクリスの声がした。

・・・・・・・・・・

「屋上で交戦中？賊はこっちに向かったのではないのか？」

「分かりません。至急とのこと。どう返答しましょう?。」

「生け捕りだ。賊の仲間を燻り出さなくちゃなら無いからな。至急秘書官の隊に回るように指令を出せ。」

「はい?。」

通信班は玉座の間に連絡を取った。

「戦況はどうなってますか?。」

富沢が急いで司令室に戻ってきた。

「秘書官殿は玉座の間に不在です。」

連絡を取っていた者が言う。

「おらんのか! 持ち場を離れてどこに行ったんだ!?。」

「秘書官殿は隊長の指令でこちらに向かったそうです。玉座の間は副長が一部の兵を警備に回しました。」

「どうなってるんだ!? 誰もそんな指令は出しておらん。」

司令官の口調は少しずつ荒くなっていった。

テラスにはどの塔にも通じる通路がある。

捕らえた科人は將軍直々の極秘任務。

1度は閉じられた出世のチャンスを取り返すためには間違っても警備の兵たちに知られるわけにはいかない。

そのために秘書官を差し向ける予定だった。

「止むえん。至急副長を国王の警護にまわせ。通信班は回線を私に回して銃を取り司令室の警備に回れ。」

「.....」

一瞬言葉を失った。通信班はお互いの顔を見合わせていた。

「何をぐずぐずしている。兵隊なら銃を扱えるだろ。」

司令官の苛立ちを隠せない。

「富沢隊。おまえが増援に向かえ。隊長も秘書官も必ず司令室の警備に合流する。」

自分に言い聞かせるように言うとマシンガンを構えた。

標的になる賊は命乞いなどするはずはない。銃口を当てられても最後まで抵抗するだろう。

初めての戦場の恐怖が蘇る。

あの緊張は耐えられなかったから城の警備への移動に不満な顔をして内心喜んでいた。

弾丸が飛び交うことのない安全なこの場所で見つけ出した出世コースに乗る手段。

この場所を手放さないためにもここは正念場。

「いつでも来い。」

体中の力を振り絞って言葉を吐いた。

.....

「あの男にしては思い切ったじゃない。」

外したヘッドホンを近くのパイプに引っ掛けた。

「富沢隊が出すと司令室には通信班を含めても20名も残っているかしら？」

ふ・・・キャストを変更しても舞台の脚本は変えられないわよ。

しかし富沢か・・・。」

クリスの声が途切れると共に扉の開ける音がした。

まるで出番を迎え控え室の扉を飛び出すように。

## 17・古城探索へ策略その2

「何をしている？所属と名を言え。」

富沢隊は移動する廊下で不審な男と遭遇した。

「魚塚准尉。応援要請を受け警備隊に参加しております。」

男は直立不動で答えた。

その姿に見覚えがある。

「おまえは秘書官に同行していたな。非常時の単独行動は禁止だ。何をしている？」

「言えません。極秘任務です。」

「なんだと！非常事態に何を隠す。」

富沢は銃口を向けた。

これから賊と交戦するその高揚が大胆な行動をさせた。  
当然男が緊張した表情を演じていたことは見抜けなかった。

「・・・ガス使用の許可ができました。その準備に。」

少しの間をおいて男は観念したように口を開いた。

「ガスは仲間の兵たちをも巻き込む。誰の指令か・・・まさか！？」  
一瞬誰もが言葉を失った。

「・・・司令官です。緊急事態に多少の犠牲は止むえんとのこと。

救護部隊所属のわたしにその後被害を最小限に抑えるための処置を準備せよとの命令です。」

富沢の顔から血の気が引いた。

「司令官なら言いかねません。我々をも巻き込むつもりだったのでしょうか。」

富沢について来た兵たちも浮き足立った。

避難の為にガスマスクを装着を指示すれば賊にとって変装の必要も



なくなる。

逃亡を企てる賊の思うつば。

「わたしは準備に向かってよろしいでしょうか？」

「当たり前だ。万が一に備え万全を尽くせ。」

その言葉に男は心の中で含み笑いをしながら走って行った。

.....

「足音・・・10名は欠けると思いますが・・・。」

先頭を努めた者からの報告に先鋭部隊のメンバーは身構えた。

ここから司令室までは目と鼻の先。

しかし敵からの襲撃に備えて作られた入り組んだ廊下が続いている。  
この場所からその様子を目で伺うことは出来ない。

軍靴の音だけが近づいてくる。

「撃ちますか？」

部隊の皆は隊長に威嚇の決断を求めた。

足音たちが姿を見えた。

「あいつらは回りを見えていない。」

警告してこちらの出方を見極める時間を与える必要はない。即取り  
押さえる。」

隊長の暗号のような指で作られた合図と共に与えられたフォーメー  
ションで作戦を決行する。

互角の人数ならば特殊部隊の方に分がある。

相手に考えさせる時間を与えず足音は止まった。

廊下に取り押さえられた兵に銃口が向けられた。

目の前にちらつかされた銃口に倒された兵士たちは声を殺した。

しかし唯一倒れながらも銃を抜いて銃口を向けた男が1人いた。

「貴様らの目的はなんだ！」

隊長はゆっくりとその男の前に立ち、首筋に手をあてた。

いざとなると経験の違いが見えてくる。大胆不敵な賊がそこまで細やかに演じるとは思えない。

隊長は男の銃を持つ手首にもう片方の手を掛けた。

「・・・富沢。銃を下せ。」

唯一銃を手に出た男に隊長は声をかけた。

「・・・隊長。」

「戦場では死んでたぞ。警備とはいえ油断するな。」

隊長は震えていた手について口にしなかった。

「司令官が賊討伐にガスの使用を許可しました。

司令室に戻って掛け合うこともできるが増援が遅れてしまう。わたしたちは使用される前に賊を・・・。

こんなに未熟なのに・・・あの通信機が壊れてなければ意見だけでも話せたのに・・・」

比重が重いガスが城内に漂ってしまう。時間は待つてはくれない。

「それは誰から聞いた情報か？」

「応援要請で救護部隊から来た男が使用後の救急処置の準備に動いてました。」

こうして入られません。早くしないと賊ともども。」

「待て・・・それは魚塚三郎のことだろ。あれが変装して侵入した賊だ。」

「ヤツが賊・・・それではガスを使うというのは・・・賊？・・・狙いは武器庫かもしれません。」

ガスならば城の出入り口に兵を集めても脱出は可能じゃないですか。」

富沢は早口で1つの仮説を説いた。

「少し落ち着け。情報を混乱させるためとは言え計画を簡単に白状

するとは考えにくい。

あそこは普段から玉座の間のように警備は万全。今はさらに警備を強化している。

いくら大胆不敵と言っても武器庫を襲うなら賊が姿を現してからでは順序が違う。

それにわたしには賊の行動が腑に落ちない。」

「・・・何か？」

「我々が司令室に向う。貴様は指令通り応援に行ってくれ。

しかし交戦するのが目的じゃない。念のためガスの使用を止めさせ、緊急に備えて救護処置を準備しろ。」

「了解しました。」

隊長と司令官。どちらの指示を優先するのは決まっている。

隊長の疑問に問いかけできなくとも富沢は兵を連れて屋上に向かった。

・・・・・・・・・・

「何か引つ掛りますか？」

「10年前のあの男は殺しはしなかった。その証の白い装束で現れたと言うのに何故なんだ？」

「隊長は玉座の間に現れた男をあの男であって欲しいと思われているのですか？」

わたしは国王の術を信じております。

申し訳ありませんが、わたしは賊はあの男のスタイルを模倣したと考えております。」

「目の前で起きているこの状態では仕方が無いか。姿を現したあの男に例の男と同じ匂いがしたのだが。」

「匂いですか・・・わたしには分かりませんがそう言った演出をしているでしょう。」

しかし殺しをしてからの行動はただのかく乱。昔の彼と比べて品格

を感じられません。

国王の手まで煩わした例の男に敬意を証して物真似ショーは幕引させましょう。」

「うゝむ……。」

「賊の計画と違う何かが起こったように思われます。

逃亡経路と思われたものが上と下の全然違う方向というのは緊急に用意されたものと考えると、

現れた男を城内に手引きした者がいるのではないのでしょうか。・・・

隊長？」

隊長は富沢の言っていた通信機のボタンを押してみた。

反応は無い。今度はカバーを外してみた。

「見る。配線が繋がっていない。この配線をどこかで利用してるんだ。」

通信機には配線が取り外され、その線自体が無い。

「この壁の向こうに点検するスペースがあるだろう。そこに賊の隠れ家があるはずだ。」

その言葉に兵が辺りを見回した。

「……。」

一人が指を指すと近くにある扉を開け機械室に乗り込んだ。

「もぬけのカラでした。通信機材がありまして城内全ての回線を聞く事が出来ます。」

さらに司令室も盗聴してたようです。」

すぐに調査報告が届いた。

「やはり情報操作されていたな。一瞬ごとに変わる状況下での判断力・・・物真似ショーであつてもかなりのやり手だな。」

「ですね。では賊が言っていたガスはフェイク？」

富沢大尉から必ず誰かに伝わります。嘘の中に本当の事を混ぜてるなんてことをしますか？」

「正体がばれてるのにいつまでもあの変装を解かなかったのは、この場所に隠れて情報操作をしていたからだろう。」

「・・・その通信機で構わない。武器庫と司令室に連絡を取ってくれないか？」

「通じません。・・・配線は外れていないのですが。」

まわりを調べながら答えが返って来た。

「切られたな。ヤツも仕方なく動き出したんだよ。富沢に残した言葉は兵たちを疑心暗鬼にさせるのが目的だったのだろう。」

「手引きした仲間に裏切りられたのかもしれないね。」

「ここで二手に分かれ司令室に進む。いいなつ。」

・・・・・・

廊下を曲がると隊長の視線の先には司令室の扉とその手前でこの廊下に合流するもう1つの通路。

当然のように正面には警備兵が銃を手に立っている。

通信班の者だろうか。離れて見てもギコチナイ者もいた。

「停まれっ！」

銃口を向け叫ぶその声も震えている。

「わたしだ。緊急事態のため司令官に会いたい。」

「止まれっ！誰も司令室には通す事はできません。」

「ならばわたし一人がいく。身体検査をするがいい。」

情報をかく乱され通信機での話では意味を成さないのだ。そちらでも分かっているだろう。」

「だめです。それ以上近づくと撃ちますよ。」

その言葉にため息が漏れる。

確かに変装の名人を相手に離れた場所から見抜けと言っても無駄なこと。

だからと言ってこのまま時間を無駄に使うことは許されない。

分かれた組が城外を通って合流する通路に到着した合図が送られてきた。

「隊のリーダーは誰だ。このままでは何人もの兵が死ぬことになる。」

隊長は銃を隣の兵に手渡した。

.....

静まり返った空間に荒い吐息と心臓の鼓動だけが支配している。なんともいえない重圧感。

戦場とはこういうオーラの渦がぶつかり合う場所なのだろう。

戦場の経験の無いものにとっては威圧するものは敵としか理解できないでいた。

しかし近づく隊長は銃やナイフを取り外し丸腰になろうとしている。

「威嚇射撃をしたほうがいいのでは？」

警備マニュアルにない行動に躊躇していた。

隊長の声は扉を越えて司令室にも届いていた。

「威嚇じゃない撃て！」

室内に残る司令官の叫びに兵士達は戸惑っていた。

賊ならば撃たなければやられる。

味方ならば撃つわけにはいかない。

しかし相手は近づいてくる。

そして緊張が続く彼らにはあの言葉が耳に残っている。

それはクリス書記官が残していった指示。

賊が変装して現れるかもしれないから入室を制限すること。

特に信頼できる地位の者ほど確認を簡略化されて危険だということ。

信頼できる地位の者・・・それは隊長や秘書官。

普通の我々ならば確認などほとんどしないで通してしまっ。

このまま撃たないわけには行かない。威嚇でもいい。引き金にかかる指が緊張で動かなくなる前に。

「ここは城の警備を任されてる重要な場所。戦場に建てた拠点の1つとは違う。」

その言葉が終わらないうちに一発の銃声がした。

端にいたヘルメットを深々と被った警備兵が放った弾丸が隊長の隣の兵士の体を撃ち抜いた。

兵が倒れるのが戦闘開始の合図。

恐れて萎縮していた警備兵たちは彼を咎めることもなく一斉に引き金を引いた。

周りを見ることもないまま全ての弾を目の前の敵に撃ち込む。

弾を撃ち尽くすまで、いやかけた指が動く限り引き金を引き続けた。

.....

銃を持つ手が震えているのだろう。

とんでもない場所で兆弾する音が聞こえる。

柱の影に隠れ前進する事さえままならない。

「大丈夫か？」

怪我をした仲間を担いで避難する。しかし彼は一発で息の根を止められていた。

偶然の一発なのかあとの射撃は標的を見失っている。

「あいつらは何処を狙っているのかわからん。」

壁に隠れた兵が溢した。

この狭い空間では催涙弾などは使えない。

「確か消火栓があつたな。」

「なるほど。ホースを伸ばしてきます。」

放水する前に照明を切る。無闇に撃つのを止めざる得ないだろう。

「了解しました。」

再度照明が灯る瞬間勢い良く水が放流された。

騒ぎの中兵士の数が1人減っていた事など誰も気が付かない。

それでも銃の引き金を引く。

しかし近くの壁や天井に兆弾するだけ。

すぐに火薬も湿り使い物にならなくなった。

「今だ！」

号令と共に放水は停まり足音が大きくなった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「戦況は！戦況を伝える！」

声は壁を叩く大きな音に消されていた。

それでも部屋の中に兆弾する音が聞こえてくる。

それさえも次第に聞こえなくなってきた。

制圧できたのか・・・いや軍靴が廊下を走る音とともに人の叫び声  
が大きくなってゆく。

「やられるものか！」

司令官は扉が開くのを待ち切れずマシンガンをぶっ放した。

本来なら戦場で使う固定式のマシガンは弾丸は扉を破り壁を削り  
先鋭部隊を攻め立てた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「隊長ご無事で・・・。」

司令官の放った弾丸の盾となって兵の1人が倒れた。

「死ぬなっ！」



歴戦の勇者たちは想定していなかったその破壊力に倒れていく。

使えなくなった銃を振り回して警備を続ける兵たちさえ背中から撃たれて落ちてゆく。

「このままでは賊の消息も分からず共倒れだ……。」「

「あの兵器の弱点はわたしが知っている。援護する。」「

秘書官の声がした。

「本当だろうな？」「

隊長はにやりと笑った。感じるオーラに変装などという疑いはない。

「もちろん。本物だと分かる方に付いたままだ。」「

「ふっ頼んだぞ！」「

「御武運を。」「

その声を信じて隊長は司令室の飛び込んでいった。

秘書官の銃が何度も火を噴く。

ターゲットを捉えた弾丸がマシンガンの弾丸の補充部を撃ち抜くと弾はジャムってしまった。

「うつ出ない。どうしたんだっ！」「

「馬鹿者っ！」「

隊長が襲い掛かりマシンガンの台座から司令官と転がり落ちた。

力では勝負が付くのが早い。

しかし身に着けていたナイフを取り出し隊長の腕に刺し締められていた腕を外した。

「わたしは死にたくない。」「

「わたしは死ぬわけにいかない。」「

離れた瞬間ナイフを抜いた。

鬼のような形相と噴き出した鮮血を見て逃げ出した。

「司令官は城内警備の責任者。逃げることは許されないっ。」「

「触るなっ！」「

司令官は後ずさりしながら当たり構わず手にするものを投げつけた。

「お立場を弁えて頂きたい。」「

銃口を向けた秘書官も司令室に入ってきた。

「うつ撃つなっ。」

司令官は気が狂ったように叫んだ。

「牢に閉じ込めておけ。」

押さえつけていた隊長が離れて立ち上がろうとすると銃声がした。振り返ると司令官のブーツに隠されていた小銃から煙が上がっていた。

・・・最後の抵抗。

隊長はそのまま倒れた。

「貴様が悪いのだ。賊の侵入を許した貴様が。」

「ふざけるなっ！」

生き残った先鋭部隊の1人が引き金を引いた。

司令官もそのまま息を引き取った。

・・・・・・・・

そこには数人の警備兵と先鋭部隊。そして秘書官が残された。

「隊長っ！お気をしつかりとっ。」

「わたしの甘さだな。軍に身を置く者。あの男にも潔さはあると見ていた。・・・秘書官殿・・・後は頼む・・・。」

「了解した。」

秘書官の言葉にホッとしたのか隊長は息を引き取った。

「隊長！！！！」

抱きかかえる兵の叫びとすすり泣く声が静まった戦場に静かに流れていた。

「遅れてすまぬ。」

「いえ・・・わたしたちが・・・。」

「少しでも開発局の情報を流しておけば作戦が立てられたのに。」

「いえ。戦場では自分の出来る事の半分しか動けやしません。例えば知っていても秘書官殿のように出来たかどうか。」

「・・・わたしの立場もない。賊を手引きした者を特定するのが遅れたからな。」

「・・・誰なんですか？」

「不審な男がいただろう。」

「・・・まさか！」

2人はマシンガンの横で倒れている遺体を見た。

「しまった。オレは聞き出すことが出来なくしてしまったのか。」

「仕方が無いこと。貴様が撃たなくても誰かが撃っていた。わたしも気持ちを押し留まるのがやっとだ。」

次の機会にこの穴埋めを頼む。隊長の弔い合戦には貴様の力が必要になるからな。」

「はっ。」

「皆の者。負傷者の処置を優先しろ。遺体は手厚く頼無ってやつてくれ。」

一幕が降りた。

脚本はかなりの場所が書き換えなくてはならなかった。

おかげで必要な男が舞台を降りてしまった。

しかし邪魔な男には死を。

少なくとも辻褄を合わせたが脚本は修整せざる得ない。

クリスには余韻を楽しむ余裕はなかった。

## 18・古城探索へ再会

「内輪もめか？」

階段を上がるコナン達2人にも激しい銃声が聞こえた。塔を警備していた兵士も気になって顔を見せた。

「手間が省けた。」

キッドは睡眠ガスを詰めたカプセルを投げた。

警備の兵はガスを吸って寝てしまった。

口や鼻を塞いだ2人は急いで駆け抜けた。

「さっ口ミオ。行くがよい。」

頂上にあるただ1つの扉を前にキッドは胸に手をあて言った。

「まだ言ってやがる。」

コナンは苦笑いを浮かべながらゆっくり扉を開けた。

「工藤くんっ？」

哀が振り向くと開いた扉から頼れる憎憎しい顔が現れた。

お姉ちゃんが亡くなってから強がって隠していた感情を解き放った彼の顔。

一瞬だけ哀の口元が緩んだ。

「灰原・・・やっぱり灰原だったんだな。大丈夫か？」

「・・・あなたまで・・・わたしが引き寄せてしまったのね。」

話したいことは沢山あった。

しかし彼の顔を見ると最初に出てくるのは捻くれた強がりか懺悔の心の2つだけ。

ホッとしたのも束の間、ベルモットの言葉が頭を過った。

「そんなんじゃないよ。」

「声を聞いたんでしょ・・・全てあの薬の所為よ。」

「さあな。罪を償えって言って連れてきたクセに未だ何も起こってないぜ。」

「・・・試されてるのよ。わたしたち。」

「試されてるなんて都合がいい言葉だぜ。とにかくここを出て、元の世界に戻る方法を探そう。」

「・・・行けないわ。わたし・・・。」

「何言ってるんだ？」

「お姉ちゃんが捕まっているの。私だけ逃げるなんて。」

「明美さんはどこにいるんだ？」

「隣の部屋に監禁されてるわ。そこに窓があるわ。その額を動かしてみて。」

哀は額を指差した。

コナンは扉の外で壁に寄りかかっていたキッドと顔を見合わせた。

この部屋が塔にあるただ1つの部屋。

「わたしにやらせてもらえますか？」

「キッド？」

何かに気が付いたキッドがコナンを制して額の前へ歩いて行く。

そしてゆっくりと額を動かした。

一瞬モノクル越しの瞳が光ったように見えた。

「ここに窓などありませんよ。」

そこには明美の姿どころか部屋を囲む壁と同じように石が積まれただけだった。

哀はコナンの顔を見た。

コナンの目は諭すように伏せた。

「お嬢さんは覗く時触れましたね。」

「ええ。」

哀はキッドの言葉に頷いた。

「やはりこの部分は御神体の欠片。科人だけが開くことができる迷宮を覗く窓になったのです。」

「迷宮・・・御神体に触れたとき映ったあの場所が迷宮なのか？」

コナンは祠にあった御神体のことを思い出した。

「坊やも経験しましたか。わたしはそう聞いてます。

迷宮の窓が開く為に科人は多くのエネルギーを使う。

それに傍にいただけで力を弱めてしまう。唯一科人が苦手にしていくアイテムと言われています。

お嬢さんを監禁するためにこんな物をはめ込んだ部屋を用意しているなんて、科人が現れるのを待っていたかのようにですね。

それとも過去に・・・。」

「早く見つけないと・・・お姉ちゃんは死んだけれどこの世界では生きているの。」

哀は焦り出した。

「オカシイじゃねえか。あそこに送り込まれるのは同じ世界に同じ人間が2人も要らないということなんだろう？」

明美さんにはオレも街で逢った。彼女は行人なんだぜ。彼女は現世で死んだんだ。

この世界で静かに判決を待っていたのに誰が何の為に迷宮に？」

「わたしも迷宮は何なのか、どこに通じているのか詳しくは分かりません。」

しかし・・・なるほど行人の彼女が迷宮に送り込まれたとなると替わりが何かが現れることになりますね。

おふたりがこの世界に現れたように。」

「替わりにだと。」

「この城の秘書官はベルモットなのよ。何を企んでるのか分からないわ。」

「ベルモットだと！？なぜアイツがこの世界にいるのか？ジヨディ

先生が言つてた歳を取らないというのはもしかして？」

「わからないわ。でも薬の研究を引き継いだわたしを恨んでいるベルモットがああ薬を作れと言ってきた。」

「・・・何を考えてるんだ？」

2人は顔を見合わせ沈黙した。

・・・・・・

スコープの中で人影が陽炎のように揺れていた。

月明かりや照明とは違いうねるような人影が闇に紛れようとしている。

「俺の目がオカシイのか？」

北の塔にいたカルパドスは目を擦った。

しかしスコープに浮かぶ南の塔は変わらなかった。

確実に仕留めるために指示を無視した行動は反って標的への距離を広げた。

しかしこの距離で仕留め損なうなんてありえない。

「早く出て来い。貴様に相応しく翼を広げたまま堕してやるよ。」

固くなった腕を回しもう一度銃を構えた。

・・・・・・

「気まぐれはこれくらいにして、わたしはそろそろ失礼しましょうか。」

御神体の欠片を調べ終えたキッドが言った。

「気まぐれじゃねえんだろ？」

「まあ、どう取ってもらっても結構ですよ。」

キッドは意味深に答えた。

御神体の欠片・・・キッドがここにいる理由と何か関係があるのは

明白。

それを頭に入れたいと欲しいと科人のオレに言っているようだった。

外から戦う男の叫び声がまだ聞こえる。

中庭の兵士も移動を始めていた。

「急がないと。オレ達もこの騒ぎが落ち着いてからでは難しいからな。怪盗さんは最後まで付き合ってくれるよな？」

「さあどうしましょうか。」

キッドは言葉を濁した。

すると部屋の照明がいちだんと暗くなった。

この城で使われている照明は阿笠博士の研究所のろうそくと違い白色電灯。

コナンは地上に上がってからずっと違和感を感じていた。

「発電機でも壊れたのか？・・・そういえば発電所のようなものは見なかったし送電線も見なかったな。」

「送電線・・・そのような言葉はこの世界にはありませんね。城の照明はエレクトロンというエネルギーを使われています。」

この世界のキッドには言葉が通じなかった。

「エレクトロン・・・琥珀・・・電気の語源となったものね。」

哀は言葉の意味を推理した。

「この城の何処かにあるあの宝玉が空気中の波動をエレクトロンに変換するのです。」

但しどういうシステムで城の中に流しているのか分かりませんが、城内でしかこのような灯りは無かったでしょう。」

「確かに・・・でもそれを奪いに来たんじゃないのか？」

「宝玉は波動を取り込みいろんな物に変換する。神のお告げを伝えるというのも嘘ではない。」

しかし波動は行人の身体には異常を来すものらしい。

彼らが黒マントを羽織っているのは波動を遮断する力を持っているからだと言われているね。」



「波動つて電磁波のようなものかしら？電気に変換できるし強ければ体に悪影響を及ぼす。」

携帯電話のように通話も出来る。それなら今起きているのはデリンジャー現象のようなものかもしれないわ。」

哀が仮説を立ててみた。

『上の世界のことは下の世界のことと似ている。』

コナンは阿笠博士の言葉を思い出した。

「現世にも似たものがあるのですか。この世界でも定期的に起こることです。今夜がその周期にかかっただけのこと。」

「周期？なるほどそれも計画に入っていたということか。」

ここからどうやって抜け出すのかも準備できているんだろう？」

「計画は計画でしかありませんよ。1人で帰る予定が崩れたのですから。」

それでもキッドは自信に満ちた笑みを見せた。

「灯りも落ちたし今のうちだな。行くぜ灰原。」

コナンは哀に声をかけた。

「お姉ちゃん・・・必ず・・・。」

哀は彼女の姿を映し出した石に思いを託けた。

3人は塔の屋根に登った。

さらに上にある城の見張り台に行けば城外に飛び立つことが出来る。

「大人1人は一緒に飛べるでしょう。子供2人ならなんとか。」

足元の先に月明かりに照らされ城の全景が浮かび上がる。

哀の足は震えていた。

コナンはその腰を抱き支えながらキッドの用意しロープを受け取った。

キ  
ン

屋根の何処かで弾が跳ねた。

「どこから？」

コナンたちは辺りを見回した。  
しかしスナイパーの位置は把握できないでいた。

## 19 古城探索と脱出

カルパドスは己の眼を疑った。

「オカシイのは腕なのか？標的からかなり外れている。」

ミスが続けるわけにはいかない。

「追い払うだけでは癪に障る。」

カルパドスはスコープを覗きつづけた。

「やはりぶれる。何か得たいの知らないオーラのようなものが溢れている。」

このままでは捕らえた小娘を撃ち抜いてしまうかもしれない。

しかし小娘まで逃がしてしまつたらもとのこもない。

カルパドスは1度銃を下ろし構え直した。

.....

「まだスナイパーがいたか。」

「・・・しかしこの距離で外すとは考えられませんね。」

九死に一生を得た場面でもキッドは表情を変えなかった。

彼にとって勝算があつて計画したこと。それを読まれていたことになる。

昼間いたスナイパーは城にいなかったはず。

潜り込むのに苦しんだ分調べは尽くしたはずなのに。

あの男は普段から身を隠しているのか？

何のために・・・

「これではむやみに飛び立てませんね。」

「ああ、どこから狙っているのか分からねえ。」

コナンは哀をその場に座らせた。

月明かりの下、塔の屋根の上では身を隠す場所ない。

下手に動いて背を向ければそれこそ狙い撃ちされてしまう。

コナンはふと不思議な力を使えないか考えていた。

あのととき大きな岩を宙に留めることが出来たあの力。

『科人の使う術は時間を操ること。己の特技に利用すれば計り知れない魔法を使うことが出来る。しかしその術は諸刃の剣。』

貴様の寿命をエネルギーに発するものだ。使い果たせば貴様は死ぬ。

」

ナイトバロンは科人のオレに言っていたはず。

命が尽きるなら銃で撃たれても同じこと。コナンは覚悟していた。

「光ったっ！」

「対角線上の塔からだ。」

キン

コナンやキッドの声を発するや否や今度はコナンの右脚を削って兆弾した。

踏ん張る力が抜け屋根から滑り落ちた。

両手が辛うじて屋根のへりを掴む・・・いや掴み損ねた。

「まずいつ。」

キッドは翼を広げコナン目掛け真直ぐに落ちて行った。

コナンは声をあげなかった。

真下に広がるテラスが近づいてくる。

落下しながらもコナンは両手に力が満ちるのを感じていた。

「もしかして・・・キャパシタ。」

キャパシタ・・・コンデンサとも呼ばれる電気を蓄える事や放出する事が出来る受動素子。

武道家が気を練るが如く両掌を平行に並べる事で不思議な力を集ま

るのが分かった。

あの御神体の所為で力が弱くなっていたのか？

落ちて離れる事によって力が集まるのを感じた。

キッドが壁を蹴り急いで近づいてくる。

銃口が窓から顔を出しこちらを向いた。

この力を届けるためには・・・あの仮面の男の言葉を信じよう・・・  
己の特技・・・それは。

コナンは集めた力をボレーシュートの要領で塔を目掛けて撃ち込んだ。

波のような衝撃が塔に向かって走ってゆく。

その衝撃に弾丸は天に向かって放たれていた。

「掴まれ。」

コナンは伸ばした手を掴んだ。

しかしハングラライダーの先が空を向けるのを風が邪魔をする。  
体を反るうにもコナンの体重がそれを拒む。

キッドは塔の壁を蹴ってなんとか向きを変えた。

「助かったぜ。もう少して叩き付けられていた。」

コナンは塔を見た。

銃口は標的を捜している。

「灰原は？」

「部屋に戻ったようですね。」

これでは仕方ありません。ジュリエットの救出は後日にするしかないでしょう。」

高度を上げるには難しい状態。

コナンを抱えたキッドは城のテラスをかすめて空に飛び立った。

「灰原待つてろよ。必ず・・・」

一日に3度も力を使い消耗しきったコナンの意識は薄れていた。

哀は空を舞う白い翼をホツとして眺めていた。  
彼は必ず来てくれる。  
それまで・・・

・・・・・・・・・・

カルパドスは銃を構え直すと標的を見失っていた。  
捕らえた少女も自ら塔の中に戻って行く。

「結局、ベルモットに言われた最低限の仕事しか出来なかったのか。」

ため息が零れた。

これが組織で一目を置かれたのスナイパーの腕前なのか。  
最初の一発をあの距離を外すなんて・・・

あの世に來た理由が身に染みて理解できた。

引き金から指を解き相棒の銃を壁に立て掛けた。

「惨めな思いをさせちまったな。」

懺悔をしていると後ろに気配を感じた。

「見つけたぜ。」

振り向くと男がいきなりナイフで切りつけてきた。

「貴様は何者だ。」

銃を手に取り、振り回し応戦を試みた。

「甘いな。狭い部屋の接近戦。長い銃は役に立たねえぜ。」

見張りに使う望遠鏡などを倒れる。

2人は床に転がり格闘は続いた。

「行人のクセに記憶なんざ取り戻しやがって。掟っていうものがあるんだぜ。」

男のナイフはカルパドスの右腕を傷つけた。

その瞬間防御に使っていたライフル銃は床に落ちた。

「じゃあな。」

男は馬乗りになりナイフをカルパドスの顔辺りに振り上げた。  
パシユッ！

トドメの一撃を受ける前に銃声がした。

「甘いのはどっちだ。銃は1つだけじゃねえんだよ。」

男は後ろに崩れた。

カルパドスは立ち上がり男を蹴り飛ばした。

「はあはあ・・・そんなもんをもってたのかい・・・武器商人に転職を勧めるぜ。」

男は腰の辺りを押さえながら言った。

「死ぬのは貴様だ。」

引き金が引かれた。

銃声とともにカルパドスが倒れた。

「ウォツカ。隙を見せたら死ぬだけだ。」

「兄貴っ。」

平次が城で見かけた黒づくめの男が立っていた。

冷たく凍りつくようなその眼に睨まれたカルパドスの遺体は短銃を残し光を放ち消えていった。

「地ノ獄の掟は死をもつて償うのみ。その身体さえも持てず無間地獄で彷徨っただけだ。」

仕事はひとつ済んだ。ずらかるぞ。」

「へっへい。」

ウォツカは差し伸べられた手に掴まり立ち上がると姿を消した。

.....

コナンが目を開くと大きな黒と黄色の顔が覗き込んでいた。

「・・・ハンシン？・・・えっ・・・もう朝か・・・。」

どうやら城の外に出たようだ。

そこは洞窟に近い海岸線。

空をトワイライトに染め、朝日が飛び出す準備をしていた。

「気がついたようですね。工藤新一くん。」

ハンシンの後ろに立っていたキッドが言った。

コナンは肯定も否定もしなかった。

「彼女が工藤と呼んだときに気付きました。

ライバルと認めた男が消息をたつたのは迷宮に送り込まれたからだ  
つたですね。」

もちろん君の正体をばらす気はありませんよ。ご安心を。」

コナンの足は丁寧に包帯が巻かれていた。

「さんきゅ・・・おまえの本当の目的はなんだ？」

彼の気まぐれの行動に怪盗を装う彼の真意を尋ねてみたくなった。

「さあ何でしょう。わたしは怪盗。自ら話すことなどしませんよ。

しかし君が工藤新一ならば謎は解くでしょう。」

十三夜に宝玉を盗みに城に現れると予告状を届けておきました。」

キッドの言葉にコナンは頷いた。

「・・・会ったとしたらその時かな？」

急にクダケテ話すキッドの顔は好敵手にあつた喜びが見えた。

「そうなるかもしれねえな。」

コナンは答えた。

十三夜に必ず・・・無言の会話を続けた。

ガウ

ハンシンが吠えた。

「こいつが送ってくれるらしいぜ。」

「ハンシン。・・・服部はどうした？」

「服部？城にいた関西人は空から見た限りでは見当たらなかったな。  
アイツは工藤の相棒だろ。下手はしないぜ。西の国の連中はしぶと  
いしな。」

それじゃまた月灯りの下で。じゃあな。」

コナンをハンシンの背に乗せるとキッドは海に向かって飛び出した。



朝日が顔を出した。

海風に乗った白い翼は高度を上げ見えなくなった。

## 20・オルファ

東の空から陽が昇る。

それはこの黄泉の世界でも同じこと。

空を昇る陽は昨夜の騒ぎなど知らない素振り。

柔らかな光で大地や海に全ての生に闇の時間を終わりを告げた。

キッドが去った後もコナンはその場に残っていた。

一緒に城に忍び込んだ平次の帰りを待たなくては。

それもある。

しかし今はただ居るしかなかった。

キッドの前では立ち上がり弱みを見せずに振舞う。

しかし大地を踏みしめる足はもちろんのこと、

空氣の層に纏われた皮膚に至るまでダルイという言葉を通り越している。

自分がどうやって立っているのかさえ分からない。

緊張の続いた所為もある。

マンガのヒーローのような不思議な力が体の中の全ての力を吸い出した。

心地よい海風にふらつくこの身体は枯れ木にも劣る。

「ありがとうハンシン。」

コナンはハンシンに抱かれ平次の帰りを待った。

しかし陽が頂上に近づいても平次は戻らなかった。

だからと言って再度城に潜り込もうにも、昨日の今日では警戒も厳しい。

自由の利かない小学生の身体のうち1人では無謀過ぎる。

命が惜しいとかじゃない。アイツの足手まといになるのが苦しい。

アイツがこの世界の服部ならミスる筈がない。剣の腕は天下一品なんだ。

それに高木さんもいる。警備隊の連中も潜り込んでいるだろう。力がない今は信じるしかない。

コナンは街に向かった。

今は情報を手に入れて策を練るしかない。

闇が去った街は賑わいを取り戻した。

いや昨夜の騒ぎに街中が大騒ぎ。

まだ開いてない酒場の前でも早くも号外が話題になっていた。

コナンは風に飛ばされてきた一部拾って見た。

『白い盗賊団が城を急襲。城内警備幹部に死者あり。城内に盗賊団に内通者の存在か!?!』

見出しに驚いたコナンは一気に読み上げた。

「・・・おかしい。盗賊はキッド。やつは殺しはしない。城内に何か起きている。」

城内には灰原を拘束したベルモットがいる。

組織の仲間もいるのだろうか？

辺りから無責任な戯言が聞こえてくる。

飲んだクレの酔っ払いはどこの世界にも同じこと。

通行人は関わらないように避けて通っていた。

ハンシンに乗っていたコナンは避けるなど考えず、通る道をハンシンに委ねていた。

「久方ぶりだな。今度は盗賊に宝玉が狙われるなんてな。」

「でも今回は軍人に死人が出たんじゃ洒落にならないぜ。」

それにしても宝玉なんて盗んでも使えるのは国王様だけだろ。なんの意味があるんだろな？」

「さあな。国王に成り代われるとか考えてるんじゃないか？」

「国王に齒向かうなんてことはこの国を統治する神にケン力を売る

ようなもんだ。命知らずのバカなんだろう。」

「そこまでおめでたいヤツじゃねえだろう。」

幹部が死んでいるんだぜ。そこまで宝玉を欲しがるなんて何か意味があるんじゃないかねえかって思っちまうぜ。」

「盗賊のやることに意味なんてあるのかよ。」

「宝玉って言えばしばらく神のお告げを聞くあの儀式は公開されていないな。」

「そりゃあそうさ。誰だっけ・・・あの男・・・。」

「ああ国王の魔法をトリックだと言ったヒゲの男だよな。」

「思い出した。あのときも大騒ぎだったよな。そのくらいの魔法は誰にでも出来るなんて言い出して。」

「宝玉が盗まれていてあれは偽物じゃねえかって噂になったよな。」

騒ぎが起きて怪我人が出たから非公開にされちまったけど結局あの騒ぎはなんで収まったんだ？」

「もう昔の話さ。忘れちまったよ。オルファの連中が動いてたんじやねえか？」

「おいおい。そんな危ねえ名前を出すんじゃないよ。」

「そんなものはお伽話のようなホコリを被った名前だぜ。」

「軍の連中はそう見てないかも知れねえぞ。」

確かに古い話さ。けど大騒ぎになってる今は酔っ払いの戯言なんて見てくれねえかもしれねえ。」

コナンは興味深い単語をインプットした。

「もう二度とその言葉を口にするなよ。酒も飲めなくなりそうだ。」

「触らぬ神に祟りなしっていうしな。」

酔っ払いたちは辺りを見回しながら話していた。

酔っ払いたちに目もくれず行き交う人たちの中に立ち止まった大きなトラに乗った少年。

「なッ何見てんだよ。あっちに行けっ。」

「坊主はママに甘えてりゃいいんだ。消えなっ。」

目障りな少年に口々に手を払い遠ざけようとした。

「おじさん。オルファって何なの？」

そんなことはお構いなしでコナンは聞いてみた。

「バカやろうつ！死にたくなければその言葉は2度と吐くんじゃねえぞ。」

「オレは知らねえからな。」

「酔いが覚めちまったぜ。坊主なんてほっておいて別の場所で飲み直そう。」

「いいな坊主。忘れるんだぞ。」

酔っ払い3人は急いでその場から酒ビンを持ち上げ、

アルコールが回った覚束ない足で苦しそうな顔をして逃げていった。

「そこまでヤバイ言葉を言ってしまうものかな？」

コナンは大げさな態度に不思議そうに見ていた。

「軍に見つかり拘束され戻ってきたヤツはいなかった。今ではその言葉を知る兵士も少ないと聞いているがな。」

「誰だ！？」

後ろから聞こえた声にコナンは振り向いた。

現世で見覚えのある姿。

そしてこの世界でも遠くから確認したトレードマークのニット帽。

あのとき一撃で鬼を怯ませた男。

「・・・赤井秀一。」

「オレの名を知っているのか。科人の坊や。」

「・・・知っていたのか？」

「ターゲットを忘れる筈がない。」

「ターゲット・・・？」

「現世の関係は知らないが、科人を捕まえるのがオレの仕事だ。」

「オレに罪を償わせるためにか？」

「どうか？」

そう言い残して赤井は通り過ぎた。

「捕まえないのか？」

彼の銃の腕前は知っている。

身構えることなく覚悟していたコナンは意外な行動にあっけに取られていた。

「捕まりたいのか？」

赤井は立ち止まり言った。

「そんな訳ないだろう。なぜ見逃す。」

「仕事には優先順位がある。おまえはオルファを調べるんだろ？それからでも遅くはない。」

赤井は煙草に火をつけると何も無かったように歩き出した。

この男は鬼と遭遇してからずっとオレを見ていたかのよう。

クイズのヒントを教えたような雰囲気。

調べると何が出てくるのか？

今できることは何でもさせてもらうさ。

コナンは声にならない言葉で不思議な出会いを見送った。

.....

国王の会議が終わると將軍は自室に戻りタバコの煙をくぐらせていた。

軍幹部たちが行っている後任人事選考の会議が終わり秘書官が尋ねてくるのを待っていた。

机に無造作に置かれた昨夜の詳しい報告書は風に飛ばされ床に散らばる。

それは盗賊を取り逃がした事。

司令官が盗賊一味の仲間などと軍部に負の内容が行儀良く並んでいた。

軍隊など一癖ある者の集まりでもある。

国王の信用を失った・・・いや元々腹の底では信用などしているはずはない。

その地位を守るために軍部とも親しく装っていたただけだ。担がれた手にした国王の地位。

その座を追われない程度にわたしに將軍としての司令官の任命責任などとネチネチと突ついてくるだろう。

飾り物は所詮本物の品格が備わることはない。

いつでも首を挿げ替えることは容易いこと。

国王の権力は気になる問題ではない。

終わったばかりの国王の会議後に報道の規制は解いたと報告があった。

民に作られた報道が発信される。

おかげで更に軍に小さいとは言えない損害を受けるだろう。

その重大な責任において軍組織を浄化しなくてはならない。

犬猿の仲と言われる警備隊の協力も仰ぎ内部調査を進めることも承諾した。

さらに組織の改革を進めると国王自ら宣言があった。

しかし問題はこれを期に極秘の計画をどう運ぶか・・・

ある程度信用のおける者を集めたつもりだったが、司令官が裏切ったとなると計画が何処に漏れているか調べる必要もある。

やはり計画の一部を知る秘書官を抜擢するべきだろう。

そろそろ大役を任せてもいいかもしれない。

「失礼します。」

ノックの後にクリスが入ってきた。

「どうなったかな？」

「穩便に副司令官の昇格で如何でしょうか？」

將軍が人事を一新して組織改革をすると言言されていたので、今改めて繋ぎの後任に上がる名前は少なかったです。

しばらくは土門殿が兼任されてはという声がありましたか、

彼の任務に兼任は困難、代理を置くなら同じことと却下されました。

「

「よからう。でも土門が・・・なるほど・・・民には人気があるが幹部には嫌われたな。」

ヤツは軍の浄化後のシンボルとしての役割が残っている。今汚れる必要はない。」

「亡くなった隊長の後任に富沢を推しますが如何でしょうか？」

「彼か・・・荷が重いのでは？」

「時限的な人事ですし隊長の弔い合戦でもあります。彼なら期待に添うよう行動するでしょう。」

「富沢と言えば家は鈴木家や四井家、旗本家に並ぶ名門だったな。しかし例の事件で名家としての威光が落ちた。将来鈴木家に婿入りするのだろう彼が軍に身を置くなど未だに信じられんよ。」

「精神的に鍛えないという気持ちからだと聞いたことがあります。事件後は色眼鏡で見られたでしょう。自らを鍛え妻となる彼女を守るためでもあると。」

「純粹なのだな。その人事も悪くないが・・・一筋縄ではいかない連中を扱えるかだ。」

「彼の補佐に民間から京極真を置きます。」

「あの変り者の武道家がそんな要請を受けると思ふのか？」

「彼は富沢の婚約者の妹と付き合っているのです。未来の義兄の補佐は簡単に断れないでしょう。」

それに今回の盗賊は西の国の剣豪を破ったと伝えるように指示しておきました。」

「・・・闘争心にも焚きつけてるか。」

將軍は選考会議の報告を了承した。クリスが机に置いた書類に印を



押した。

「クリスくんは今まで通りの司令官の秘書官を続けるのか？」

受け取り下がるうとするクリスに声をかけた。

「と言いますと？」

「わたしの直属の部下に任命する。」

「・・・わたしでよろしいのですか？」

クリスは勿体ぶったそぶりを見せた。

「昨夜の事実は君が1番詳しいのだろう。」

「何のことでしょう？」

「わたしの目は節穴じゃない。1人で出来ることは限界がある。思い通りにことは進まなかった事は自覚しているはずだ。

きみは我々の手の上で踊って見せたに過ぎない。わたしがそのテストに合格点を与えようと言うのだよ。」

「科人を捕らえよと指令を受けたときから薄々は気付いてました。しかし毒であるわたしをも取り込もうとは考えてませんでしたか？」

「組織が変化を求めるときには毒薬も刺激的な良薬となる。」

「賭け事が好きなのですね。」

「現世の者は神の領域に手を伸ばす。知恵の木の実を食べ墮落し地を這いずり回って諦めたわけじゃない。

上の世界が求めることは下の世界でも同じこと。我々は与えられるだけの閉じ込められた闇の世界から地上を目指す。」

「そのために科人の力を？」

「両方を行き来する科人は神に近い存在と言う者がいた。しかし神の逆鱗に触れ時間の鎖に繋がれたまま。

神に成れなかったなれの果て。神に進化するための貴重な標本。例える言葉はどうであれ、求めることも無ければ蔑む必要は無い。

生への欲望に囚われた君が我々と手を組むことを拒む理由はない。」

「わたしも賭け事は嫌いではありません。」

「オルファの為に働いてもらおう。」

「オルファ・・・嫌味な名前。」  
クリスは呟いた。

・・・・・・・・・・

「大丈夫か服部くん。」

「ああすまんのう。」

待機室に運ばれていた平次は濡れタオルで頭を冷やしていた。

「あの黒のコートを羽織ってた男の消息はわかったか？」

平次の質問に高木はすまなそうに下を向いた。

それは信じたくない答えだった。

「不問やと！」

「国王の命だ。」

高木は問いかけを遮るように言った。

「しかしあそこのトイレの通気口からテラスの抜ける通路があったのは事実や。」

テラスに現れ逃げたのが玉座の間に現れた賊やで。

それに城に手引きしたのが司令官やてなぜ分かったんや？あんたらが調べたんか？」

自分が動けなかった苛立ちから声はドンドン大きくなった。

「彼はオルファ。」

高木の答えに平次は一瞬言葉を失った。

それは幼い頃親父の書類で見つけた覚えたての文字。

あの親父さえも苦しんだ強大な秘密組織の名前。

未だにその残党が残っていると言うのか？

「んなあほなつ。でっち上げとちゃうんか？あの盗賊もオルファだと言うんか。」

「それは考え難いよ。機密保持のため軍部が内部調査を行ってこんな最悪の報告を我々に公開しないだろう。」

まだ御伽噺の続きを聞いているようですぐに信じられるものじゃない。

「僕もピンと来なかったよ。本当にあのオルファなのか可能性が0にならない限り調べて見るさ。」

2人の間に時計の音だけが流れた。

「コナンはどうしたんか？」

不機嫌そうな顔をした平次が沈黙を破った。

「彼は城にはいなかった。盗賊が人質として連れ去ったと城門の警備をしていた警備隊の仲間から聞いたよ。」

「それじゃ捜さんと！」

「いや、彼は解放されたと阿笠さんから連絡を受けてる。」

「じいさんから？」

「僕が城にいることを知っているのがコナンくんが無事な証拠さ。」

「そうか・・・オレはこれからどうなるんや？」

「安心して良いよ。君はおとがめなしだ。」

これから警備隊も協力して調査を行う。僕は司令部付きで常駐することになったんだ。

もし民間人の君を罰つせれば城の警備に問題があると軍を締め上げる手もあるんだが、

彼らも警備隊が紛れてるのを知っててその正体を調べるために泳がせていた。

お互いの立場を考慮して伏せることになったよ。」

「大人の事情ってやつやな。」

「君は夕方に出る牛車に乗せて城外に出る手筈になっている。」

「じゃあ。おとがめなしってことで高木さんが捕まってた書庫の辺りを調べたいんやけど？」

「自由っていう訳にはいかない・・・でも調べるんだらう？」

その場所なら我々が調査しても構わないと司令部から許可を取っている。現場にいる千葉に言うといい。」

「それは警備隊にとって欲しい情報は無いってことやな。」

「かもね。でも君のは別件だろう。では僕はこれで。」

「ありがとうございます。」

高木は手を小さく挙げて返事をする。と部屋を出ていった。

柔らかな光が射し込む一人の部屋。

裏腹に心に闇がかかったよう。

「・・・オルファヤと。」

平次は頭を抱え呟いた。

## 21・仲間たち

さてどうするか？

ハンシンの背に揺られながらコナンは知らない世界での捜査方法を考えていた。

王立図書館に行けば王国の歴史が解るだろう。

しかし一般的な誰もが知ることができるもの。

ましてやこの姿であれば専門書を見ることがさえ断られるかもしれない。

さらにオルファの関係した事件を調べようにも民に知らされてることは微々たるもの。

マスコミや研究者に聞くほうが確かかもしれない。

両方を知る人物・・・やはり阿笠博士になるのか。

神官だった過去を隠して生活している彼。

あの隠し通路まで知っているとなるとかなり深いところまで真実を把握しているかもしれない。

しかし博士に話しても素直に話してはくれないだろう。  
どこから手をつけるべきか・・・

「コナンくんだったっ！」

後ろから元気な声が聞こえた。

振り向くと博士の家で逢ったカチューシャをした少女が駆けて来た。

「歩美ちゃん？」

遅れないように元太と光彦も走ってやってきた。

「ケロちゃんところでも遊びに行くのか？」

「うっん。あのね、歩美たちはこれから探検するんだ。コナンくんも一緒に行こうよ。」

歩美はハンスの背に乗るコナンを見上げて言った。

「探検？」

今は子供の付き合いどころじゃない。

コナンは呆れ顔を取り繕いながらもため息混じりに聞き直した。

「ある屋敷に1人で住んでた男の子がお化けに食われたって噂なんだぜ。俺たちがその噂を調べるんだ。」

リーダーでもある元太が言った。

「でもお化けなんて居るはず無いですよ。その噂の真相を僕が暴きますよ。」

「そんなことないぜ。鬼が出るんだからお化けがいても可笑しくないだろう！」

「鬼は特別な存在です。お城の近くしか現れないじゃないですか。」

「それは鬼だつて知らない所で迷子になりたくないからだろう。」

「それじゃお城の近くに鬼の家があると言っんですか？」

いきなり元太と光彦の言い合いが始まる。

「もしかしてその屋敷が鬼のお家かも？」

「俺がついてるって。安心しろよ歩美。」

鍬を振りかざし元太は胸を張った。

「鬼なんていませんよ。あんな大きな鬼が屋敷の中に入れるわけないでしょ。」

光彦も負けられない。

「鬼の子供なら入れるかも知れねえだろう？」

元太も退くことが出来ない。

「ばかばかしい……。」

懐かしい雰囲気の話に苦笑を噛み殺しながらもそっけない。

「そんなこと言っつて。本当はコナンも怖いんだろう！」

こういうときだけは元太と光彦2人の意見が揃う。

「そんなことねえよ。」

いつの間にかいつものパターン。

3人のペースに嵌ってゆく。

さてどうやって逃げようか・・・

「お化けじゃなかったらその男のコはどこに消えちゃったんだろうね?」

「引っ越して空き家になったんじゃないかねえのか?」

「そんなことありません。」

「そうだよな。蘭お姉さんが心配そうに見てるのを知ってるもん。」

「だから俺たちがその秘密を調べてきてあげるんじゃないか。」

3人が冒険に向かう理由がそこにあった。

「蘭って・・・もしかしてその家主の名前って?」

「ええとね。エトウさんって書いてあった。」

そつか、この世界のオレの住む家。

服部と自衛団を組織しているオレなら捜査記録があるかもしれない。もしかしたらこの世界の父さんの事件データなどもきつと。

「もちろんコナンも行くよな!」

「・・・しゃあねえな。」

急に気がころつと変わるのは現世でも同じ。

話しながらもコナンは思わず苦笑い。

「本当に?」

「ああ。お化けがいないことを証明してやるよ。」

現世では止めることだけど、ここは誘いに乗ろう。

連日の探検。しかし今度は昨夜ほど緊張を強いられる場所じゃない。真実を求めるために必要なら今はやるしかない。

「それじゃ歩美も乗せて?」

「ああ。」

歩美が伸ばした手を引いた。

「でっけえトラだな!？」

「僕たちも乗れそうですね？」

鍬を抱えた元太がハンシンの身体を叩くと、ハンシンは2人に向かって欠伸をする。

開けた大きな口に驚いて座り込む2人をハンシンがシッポで背中に乗せた。

黄泉の世界の少年探偵団の出勤が決まった。

.....

しばらくすると工藤の表札が目に入った。

工藤新一の自宅と言ってもここは別の世界。

それは周りよりも少し大きな建物は格調が高く感じられた。しかし掃除をされてない所為で庭の草はボウボウ、窓は煤で汚れたまま。

これではお化け屋敷に見えなくもない。

ハンシンの肩辺りが屋敷の門に触れるとギーっという音をたてて開いた。

歩美は無言のままコナンに擦り寄った。

木で組まれカンヌキは外れて鍵も使われていなかった。

「大丈夫だよ。歩美ちゃん。」

コナンが優しく声をかけた。

「いくらなんでも鍵も掛けてないのですか？物騒ですね。」

「・・・昨日来た時はちゃんと閉まってたぜ。裏の塀の隙間から入るつもりだったんだけどな？」

コナンを先頭にハンシンの背から飛び降りた。

「お化けが開けたのかな？」



歩美が最後に滑り降りる時にはコナンと光彦で門の回りを調べ尽くしていた。

「これを見てください。木枠のところが壊れてるんじゃないですか？これでは鍵はかかりませんね。」

「そっか。牛車がぶつかっただらう。見た目にも古そうだからかな。」

光彦たちは好き勝手に判断している。

その傷は新しく回りも老朽してるわけじゃない・・・それに内側からの力がかかっている。

外側からの力なら事故などの可能性もあるが、こうなると誰かが出入りしていたと疑わざる得ない。

「・・・誰かが部屋に入ったな。」

コナンは呟いた。

隣を見ると昨日服部に連れてこられた博士の家。

彼はオレたちの帰りを待ちながら研究を続けているだろう。

自由に気の向くまま・・・元神官という人物が自由に？・・・まさか・・・監視されてる？

2階建てのこの屋敷からならば博士の行動を監視するのに都合がいはず。

でも鬼が現れるこの世界であつてもお化けの噂で近寄る者が無いとは言えない。

そしてこんな証拠を残すミスもしないだろう。

・・・少なくとも今は小さな仲間を連れている身。

冒険なんて安易に考えすぎたか？・・・しかし資料はここにあるはず・・・でも今は退くべきか。

コナンの考えなどお構いなしに3人はとくに玄関前に立っていた。  
「でっかい玄関だよな。」

「でもこのトラさんは入れないかも。」

「牛とか大きな動物は外で飼うものですよ。」

「そっか。こんなに懐いてるのに可哀想だね。」

歩美はドアにあるドアノックを叩こうとしている。

「止めましょう。入りますよって教えてるようなものじゃないですか。」

光彦が手を抑えた。

「光彦もお化けがいるって思っているじゃねえか？」

元太が言った。

「ちっ違いますよつ。」

「・・・でも本当にいたら怒られるだけじゃすまないよ。」

歩美も不安になってきた。

「オレが付いてるから心配いらねえぞ。」

そう言う元太も腰が引けていた。

冒険するワクワク感に隠れていた小さな不安が見え隠れする。

「それじゃ一旦外に出て様子を見ようか？」

コナンが3人を呼び止めた。

「止めないもんっ！」

「行きましょう。」

小さな冒険家たちは前へ進む。

「そうだ。コナンを先頭に中に入るぞ。」

入り口だけで大騒ぎの4人組。

やはり鍵の開いている玄関を光彦が開けると元太がコナンの背中を押した。

ハンシンも4人を追って大きな身体を無理やり萎めて玄関の枠を抜けた。

部屋に入るとやはり黄泉の世界の造り。

システムキッチンなど現世のものは無く、玄関を潜った先土間があ

リマキが山積みになっていた。  
屋敷の造りは現世の工藤邸と同じでリビングなどの間取りにズレが無い。

階段があるが、まだ分からない部屋に誰がいるかもしれない。  
逃げ場を失わないようにまずは1階を回ることにした。

3人はコナンを先頭に奥の部屋に進んでいく。  
この奥に父さんの書斎があるはずだから。

「なんですかここは!？」

コナンのすぐ後ろにいた光彦が声をあげた。  
窓さえ本棚で隠れているこの部屋は暗く閉ざされていた。  
微かにほんのスキマから差し込む光に見えてくる蔵書の絶壁。

「これが全部本ですか? 図書館に負けてませんよ。」

「でもよ。難しい字ばかりで読めねえよな。」

「マンガはないのかな?」

気の遠くなるような本の数。

この壁は大人が見たら返ってぞっとするだろう。  
コナンもパソコンもないこの世界でこの壁から資料を捜すのかと途方にくれた。

しかし子供たちは冒険者。興味は尽きない。

「この本なんて記号ばかりですよ。」

とりあえず近くの机にある本を光彦が開いて見た。

「何だろう?」

それは整理した資料の索引集。

「辞書・・・ですかね?」

光彦はコナンに渡した。

この記号は本棚と段数とページを示している。  
これを使えばデータを見つけることができる。

「・・・Aは・・・上のほうじゃねえのか。順番も合っていないのかよ。」

「さらにA B C・・・O・・・あった。」

コナンはさっそく調べ始める。

独り言を言いながら動き回るコナンを3人は不思議そうに見ていた。

「おい。なんかミミズが這ったような・・・きたねえ字だな・・・これじゃ読めねえよ。」

興味の湧かない本の山に元太は飽きていた。

「これは旅行記ですね。なにか変わった物もないし・・・旅行と言うより散歩みたいな感じです。」

「光彦は読めるんだ。」

「いえ・・・読めるところだけちよつと・・・。」

それもそのはず危険なデータは誰もが理解できないように変えてある。

錬金術書のように日記や料理のレシピのように一般には分からないように理解できないように書いてある。

「・・・おもしろいじゃねえか。」

小さくても頭脳は大人。コナンには推理して書かれている意味を推理した。

コナンは本の前に辞書や辞典を片っ端から出しては読み続けた。

歩美はコナンの行動に見とれていた。

出会ったばかりの少年。しかし何か気になる少年。

知らないはずの名前を呼んでくれた彼に運命的なモノを感じていた。

「コナンくん。次はどのご本取ればいいの？」

興味深い彼になにかと世話を焼きたくて仕方が無い。

さすがに光彦も飽きてしまった。

「おいっ光彦。向こうに階段があったよな。」

「僕たちは探検を続けましょうか。」

歩美をコナンに独占され、つまらない2人。

ここは抜け駆けしてでも先にオバケの正体突き止める。

元太と光彦が2階に上がると後ろから肩を叩かれた。

・・・・・・・・・・

「元太くん・・・光彦くん・・・。」

歩美が呼んでも返事が無い。

「ねえ隠れてるの・・・返事くらいしてよ。イジワル。」

部屋を見渡しても誰もいなかった。

「ねえコナンくん。2人がいないの。」

「えっ・・・まさか・・・。」

夢中になっていたコナンは急いで立ち上がり近くの部屋から2人を捜し始めた。

「まさか2人・・・。」

「そんなことないよ。」

2人は土間に戻ると階段から野太い叫び声がした。

急いで階段を駆け上がった。

「ハンシン？」

少しドアの開いた部屋の前で申し訳なさそうに座っているハンシンが振り向いた。

「ガウ・・・。」

彼の前には長い足が見える。

「・・・誰？」

歩美はコナンの背に隠れた。

ゆっくりと近づいてみる。

コナンはその倒れている男に見覚えがあった。

「おっちゃん？」

その顔は毛利小五郎。蘭のおやじさん。

探偵という言葉が無いこの世界でこの場所で何をしていたのだろうか？  
この部屋からなら博士の家を監視できる。

まさか・・・？

「んっ？」

コナンたちの気配におっちゃんが目を開けた。

「まだガキがうるついてんのかっ！」

コナンたちと一緒にハンシンも一緒に顔を覗いていた。

「・・・ああっ死んだフリしねえと喰われちまう！」

その言葉に歩美がクスツと笑った。

「おっちゃん、クマじゃなくてトラだよ。死んだフリなんてしなくても大丈夫だよ。」

「えっ・・・ああ。トラを家に居れるんじゃないねえ。間違えるだろうっ！」

トラはもちろんのこと。クマだって家に居るものじゃないはず。  
気が動転したのかおっちゃんの対処方法がこんがらがっていた。

コナンの背にしがみ付いていた歩美が部屋のベットに寝かされている元太と光彦を見つけた。

「心配するな。気を失ってたからそこに寝かせておいた。」

「ガウ。」

「大丈夫だトラ公。おまえは見てたんだろう。・・・このトラはおまえのか？」

「彼は平次兄ちゃんの。」

「・・・おまえは西の坊主の知り合いか。」

「おじさんは何をしていたの？」

「それはこっちの科白だ。ガキの遊び場じゃねえぞ。不法侵入って言葉くらい聞いた事があるだろう。」

「だって門が壊れてたんだよ。何かあったって思うじゃない。おじ

さんこそ不法侵入と器物破損じゃないの？」

「バカヤロウ。オレはちゃんと家主の許可をもらってるんだ。」

「そんなことないもん。ここには男の子が1人で住んでたんだよ。」

「新一のことだろう。オレはその母親の有希ちゃんに頼まれたんだ。この通り鍵だつて預かってる。」

「でも門は内側から力を受けてるよ。」

「ありやオレが入る前からだ。だから部屋の中を慎重に調べてたんだ。」

「……つてオレがガキに尋問されるんだ！？」

こいつらは親を呼んでお灸をすえてもらわんとダメだな。」

目を覚ました2人もこつぴどく怒鳴られ探検は継続不能。

4人と1匹は屋敷の外に出された。

「坊主は見ない顔だな。家は何処だ？」

コナンはとりあえず博士の家を指差した。

「西の坊主のことも知ってたし……おまえに聞きたいことがある。事務所まで付き合え。」

解放された3人と一匹を残しコナンは小五郎の事務所に連れて行かれた。

## 22・籠から籠へ

「2人で話がしたい。」

「了解しました。失礼します。」

クリスを残し昼食を届けた兵が監禁部屋から出ていった。

兵士の足音がゆっくりと遠ざかる。

鳥たちの羽音が窓の外を横切った。

「どうシエリー？薬を造る気になったかしら。」

ドアが閉まってからも続いていた沈黙がやつと解かれた。

昨夜の騒ぎが嘘のよう。

この部屋を警備する兵士が替わり昨夜のように科人と恐れる様子も見せない。

それはこの女が仕組んだことなのだろう。

「造らないと言ったら・・・どうする？」

哀には昨夜の一件がどう処理されたのか分からない。

しかし彼ならキッドと共に城から脱出できただろう。

何があっても諦めることはしないスーパーマン。

大丈夫。彼が必ず迎えに来てくれる。

哀は強がって見せた。

「・・・どうしようかしら。」

クリス、いやベルモットは窓際に立ち、まわりの塔を見渡した。

「昨夜・・・カルパドスが消えたわ。彼は白い幻影に執着していた。あなたは彼の最後を見たのかしら？」

「カルパドス・・・組織のスナイパーまでがなぜこの世界に？・・・もしや昨夜の？」

「彼は現世で死んだのよ。覚えてない？赤井に掴まるより死を選ん



でこの世界にやってきた。

あなたも知ったでしょう、行人は死んでこの世界で旅をする。しかし判決が下りればその旅は強制的に終わる。彼も宣告を告げる弾丸から逃げ続けることが出来なかった。」

「行人・・・お姉ちゃん。あなたはお姉ちゃんを迷宮に閉じ込めてどうするつもりなの!？」

「迷宮・・・そう・・・白い幻影から聞いたのね。

やはりあの男はここに來たのか。

獲物を前に彼は宣告を受けたのか・・・わたしたちの末路はそんなものだろう。

崇高な目的を掲げ動き出したとしても時は無常に過ぎてゆく。手に入れたかったモノを目の前にして時代錯誤の遺物とされる。」「ベルモットは空を見上げながら言った。

部屋の窓から見える空は雲一つない快晴。

頼れる相棒を失ったベルモットの心と同じような空虚の色。

陽の光は今の彼女には眩しすぎる。

「・・・でもあの女をあそこに閉じ込めたのはわたしじゃないわ。」

「あの石版は科人の力を弱めるモノ。あなた自ら石版を利用するにはリスクが大きすぎるという訳ね。

まだここに組織の仲間がいるのね。

でも大事な事を忘れてないかしら。わたしが科人だからこの場所に閉じ込めているのでしょ。

兵士たちはあなたの正体も同じことを知っているのかしら? 外にいる監視にでも試してみる?」

「どうかしら? これでも”千の顔を持つ女”と呼ばれているのよ。

細工はいろいろとあるわ。彼らには見破れないでしょうね。

それにあなたの言葉を信じるとでも思う?」

「でも今日の味方は明日の敵になる。」

「わたしたちの世界はいつもそんなものでしょ。裏切りは日常茶飯事。」

あのジンでも組織の balanサーのウオツカがいないと仕事に潰されてるわ。

組織の偵察部隊にいれば、そんな状況も沢山見てきたしね。」

百戦錬磨の女にハツタリは通用しない。

「それより安心して。あの迷宮にさまよう旅人には弾丸は届かない。宣告を受けることはないわね。」

「それってどう言うこと？」

何を考え何をしようとしているのか見当もつかない。

どちらにしろお姉ちゃん是人質にされた。

「1つの不安を取り除けただけでも感謝したらどうかしら。

でも薬を作らないと時間は無いわよ。弾丸は届かなくても再会できる保証は出来ないわ。」

「保証？」

「完成したら教えてあげるわ。急ぐことね。」

クリスは勝ち誇ったように言った。

A P T X 4 8 6 9 のアポはアポトシス。

つまりプログラム細胞死。・・・自らの容を変えて生きる為の死。

薬はアポトシスを誘導するだけでなくテロメアーゼ活性を持っていて細胞の増殖能力を高める。

生きる為に必要な細胞を増殖しアポトシスで入らなくなった細胞を殺す。

人の手で時の流れを操り、肉体の進化を促進させてゆく。

始まりと終わりの一致。

生と死の一致。

輪廻転生。

進化し続けたその終着地点は死。

だからこの薬は出来そこないの名探偵。神秘的な毒薬。

現世では毒薬でもこの世界ではどんな薬となるのだろうか？

しかし神に逆らう悪魔の薬はどの世界にも存在する必要はない。

「急ぐつてここであの薬を作れると思うの？ここには組織のような設備も無い。

それにあの薬だって研究にどれだけの時間を費やしたと思うの。」

「簡単なことよ。

あの薬を作り出したのはあなた自身。

薬の設計図はあなたの記憶の奥に眠っているだけ。

全ての記憶を吸出し必要なデータのみを再構築すればいい。

どんなに時間がかかることであっても、その時間を操るのは科人の力。そのための準備は進んでいる。

良い返事を期待してるわ。」

クリスは部屋を出て行った。

哀は意味不明の科白に頭を悩ませていた。

薬を作らせて何をするつもりなのだろう？

このままこの場所に居ればベルモットの言うがまま。

そしてどうやってお姉ちゃんを救い出す方法は？

どんな世界にしようとも彼はその好奇心が渴き切るまで謎を追いかけているはず。

だからと言って彼を信じてただ待っている訳にはいかない。

・・・わたしは王子が来るのを待つお姫様じゃない。

もう結論は出ていた。

「食事は済んだか？」

考え事をしているところに声が聞こえた。

先程の食事を持ってきた男と違う声に哀はドア越しに立ち様子を伺った。

気配は監視の一人。ベルモットのいやな匂いがしなかった。

準備をするまもなく訪れたチャンス。

監視の人数もじきに元に戻るだろう。

また返事を聞きにベルモットがやってくるかもしれない

「・・・今しかない。」

哀は決心した。

ガシャ　ン。

兵がドアノブを握るとテーブルが倒れる音がした。

「だっ誰なの！」

哀の叫びにドアの向こうの兵が反応した。

「ちよつと、何も無いわよ。」

「どうした？」

鍵を差し込む音がする。

「窓に白い影が・・・」

「まさか昨夜の！？」

兵士がゆっくりとドアを開けると哀が壁に張り付いていた。

「ヤツは何処にいる？」

ちよつと腰を引けた感のある兵は恐る恐る部屋を見回した。

テーブルが倒れ食器が床に転がっていた。

「あの窓の裏側に・・・あの赤いのって・・・傷を負ってるのかしら。」

「なるほど未だに塔の屋根にいたとなれば翼をもがれたな。

手負いは手強いと言うが、翼が使えなければオレに分があるということだな。」

あの盗賊を１人で相手にはできず応援を頼んだだろう。

しかし相手が怪我をしていれば逃す手はない。  
ここで捕らえれば表彰物だ。  
兵は銃を構えた。

ゆつくりと窓に近づき上半身を窓の外に出すと、哀は兵の背にスプーンの柄を突き立てた。

「大人しくすることね。命までは取るつもりはないわ。」

哀は腰に下がっている鍵を抜き取った。

「ガキに何が出来る？」

「動かないで。刺すわよ。」

哀は急いで窓を下に降ろした。

兵は窓に挟まれたまま身動きが取れない。

哀は窓を上げられる前にストッパーを留めると急いで部屋を飛び出した。

鍵を掛けようとドアに手を掛けると銃声と共にストッパーが飛んだ。子供の力では甘かった。

もう少し強く閉めていれば身動きが取れなかったのに・・・

もうサイは投げられた。

鍵を下ろす暇は無い。哀は階段を駆け下りた。

わたしにしか薬が造れないのなら命を取る真似はしないだろう。たとえ捕まったとしても彼に有益な手がかりを掴むまでは・・・

「お嬢さん。ここは子供の遊び場じゃないよ。」

螺旋の石の階段を駆け降りる先にメガネの大男が立っていた。ホンの数秒でチェックメイト。安易な行動は命取りになった。

「おいっその娘をよこせ。貴様は何者だっ！」

「わたしは本日の辞令で城内の警備隊長付となった。」

あまりにも待たせるからこうして階段でトレーニングをしてたまで。他意はない。」

「そんな話は聞いてないぞ。」

兵は力の無い声で言う。

「お嬢さんと追いかけてこしてれば聞くことなど出来ないだろう。」

子供相手に銃で威嚇するなど軍も落ちぶれたものだ。」

「なっなにをつ！」

「この娘はわたしが預かるう。文句があるなら富沢隊長に申し出よ。元々軍族ではないわたしは免職になろうと構わないのでな。」

兵士は黙ってしまった。

それはこの男の発するオーラが兵士の闘争心を抑えつけてしまったのだった。

「もう大丈夫だよ。」

立场上知らなくちゃならないことがあるようだ。できたらわたしに話してくれないか？」

メガネの男は優しく哀に言った。

彼とも西の探偵とも似た怖いくらいの真っ直ぐな瞳。

この男の正義感と優しい眼差しは哀を落着きを取り戻させてくれた。

しかし組織の連中は甘くは無い。

ベルモットが監視を一人にした時の哀の行動を見抜いていたかも知れない。

現世では出会ったことの無い目の前の柔らかな笑みに哀は素直に口を開く事は出来なかった。

## 23・手がかり

「どうだい服部くん。何か見つかったかい？」

高木が地下の蔵書置き場にやってきた。

ここは昨夜高木が捕らわれていた部屋の隣。コナンと2人が忍び込んだ書庫。

そして議事録から知ってる名前を見つけた場所。

軍からの許可を取って千葉の立会いの元、平次も独自の捜査をさせてもらっていた。

「まだこれってものは見つからへんのや。」

重い、厚い、字が細かいうえに変色して擦れてる。

10年前の神官の名簿は見つからず、

あの御神体や科人の研究書を読んでみたが聞き慣れない言葉にうんざり。

気合いを入れて難儀な蔵書を読み漁っていた平次もさすがに床に座りこんでいた。

「それより上の方が騒がしかったけど何かあったんか？」

「人事発令だよ。」

亡くなった隊長に替わり富沢くんが警備の指揮を取ることになった。もう君付けじゃ呼べないな。」

「富沢っちゅうたら例の事件の？」

いくら呪われた名家とか言われても財閥には変わらへんのやろ。その兄ちゃんが何故軍に入隊してん？」

「僕は詳しくは分からないけど・・・」

今回事務調査の指揮を取る警備隊の白鳥隊長なら知ってるかもしれないな。」

「同じような名家出身ちゅうことやな。それで事務調査なんてうまくいつてるんか？軍と警備隊は仲が悪いんやで。」

お互いにバカし合いして何にも出て来んかったら民が騒ぎ出すやろな。」

平次の言葉に高木はため息をついた。

平次の言う通り始まったばかりの調査で小競り合いはちよくちよく上の方は腹の探り合い。

このままでは何の手掛かりも得られずに調査期間が過ぎてしまう。今まで事件があっても捜査権限の無いことにグレーな報告を甘んじて受けるしかなかった。

だからこそ民は警備隊に味方した。結果を残さなければ軍の言いなりと思われ警備隊は存在価値を問われてしまう。

「でも・・・その人事おかしいんとちゃうか？」

例え親しい間柄であっても彼は軍人。

軍が知られてはならへん秘密は口にはしない。

その富沢つちゅう隊長がどんな人物か分からへんが立場的に真実を封じこめるかもしれん。

しかし調査の現場責任者が互いに昔からの知り合いのなれば民から馴れ合いと言われるのがオチや。

軍もそれも考えてるやろか。

名家の隊長はトカゲの尻尾にされちまうんとちゃうか？」

「確かに指名したのは幹部たちだ。

富沢くんなら過去の家のスキャンダルで叩きやすいと言つのもある。彼等が指名したのも軍も事件の重大さにどう收拾するか考えたから



だろう。

こっちは軍の奥まで調査を延ばせるように慎重にいかなくちゃね。」  
高木は自分に言い聞かせるように言った。

「軍が相手だけに加減が難しいが・・・何が出てくるかちつと怖い  
で。」

「・・・確かに。」

「ところでその分厚い本は何が書いてあったんだい？」

高木は平次が何を調べているのか知っておきたかった。

必ず軍が監視しているはず。彼は一般人。そのときの逃げ道だけは  
用意しておかないとならない。

「かなり昔から科人や鬼の研究を続けられていたんだな。

鬼はともかく、誰もが科人の存在を知ったのは10年くらい前。知  
らんことばかりや。」

平次は話ながら手にしていた蔵書を閉じた。

「鬼は昔話や言伝えとしても聞いていたからねね。」

「鬼は生きた化石とも言われる存在や。」

それやのに未だにその生態が分からないでいる。

この世界に生きるものはいつまで鬼に怯えた生活を続けなくちゃな  
らへんのやろ。」

平次の言葉はこの世界に生きるものの全ての気持ち。

いつまでも続く戦いにゴールは見えない。

「でも研究から科人が鬼を操っていると分かったんだろ。

僕でも聞いたことがあることだ。その研究もかなり進んでいるはず  
だよ。」

「ここに過去の科人を研究しているレポートがあるんや。

これは科人との対話からまとめられているが、操るなんて言葉はな  
かったで。」

平次はその文を簡単に説明した。

現世は智識の実を食べエデンを追放された者の世界。

しかし強欲な感情は生命の実さえ手に入れようとした。

智識を過信した一部の者が真似て作った生命の実を口にした。

俗に不老不死の実とも呼ばれるそれは神の創造した世界の根底を崩壊させてしまう。

智識で神の力さえも手に入れたと豪語するものたち。

人々は恐怖を振り撒くこの者をこの世にならざるものとして鬼と呼んだ。

神はそれを許すはずがない。

神への冒涇、そして神の想像した世界の秩序を破ったものたちに罰を与えた。

神の逆鱗は人々が作り上げた物までも巻き添いにした。

人々は神の怒りを静めるために祈りを捧げ、自らがその者を裁き罰することを神に願い出た。

そして罪を償う機会を与えられた者を科人と呼んだ。

今でも科人は鬼と同じ神の領域に手を出した罪人だとまとめている。

「科人はまだこの世界に紛れているんだろうな。」

平次はコナンのことを思い浮かべていた。

あいつは自分の正体も宿る特別な力も知らなかった。

科人は本当に罪人なのだろうか？

「それは分からないけど、警備隊には科人と呼ばれる男と気が合って話していた人がいたんだ。」

高木は言った。

「それって10年前の事件だね。」

話を聞いてただけの千葉も入ってきた。

「なんやそれ？」

「一般には知られてない話だよ。僕も入隊してから聞いたんだから。」

「千葉の言う通り。恥ずかしながら今回の捜査資料を読むまで知らなかった。」

高木も頷いた。

「その科人は軍の工作部隊によって暗殺された。でも遺体は判別できなかった。」

その男は科人の術を使って難を逃れたんだ。そして昨夜現れた。

「白い盗賊団」と呼ばれている男だよ。」

「なるほど。科人が現れたのなら昨夜も鬼が現れたのは嘘じゃなかったのかもしれないね。」

「昨夜？現れたのは昼間だろ？」

「いや、夜中に海上に姿を現したようなんだ。しかし暴れる事もなく被害もなかった。」

町外れの酔っ払いからの通報なので報告書も話半分で書いたようですが。」

「鬼は科人と同じ罪人だと書いてあるだけで操っているなんて文章はどこにもなかったで。」

「でも昼間だって白い盗賊団に城が襲撃されていただろ。」

「そうやったけど・・・まだ断定できへん。」

科人のコナンは現世の工藤新一。

人がそれぞれ考えが違つように科人をヒトづくりに出来ない。彼を信じられても他は分からない。

「そうだね。まだ謎だらけだから何も進まない。」

ここの蔵書のようにたくさんの情報があるように見えても、ほとんど無いのが実情さ。

調査だつて手探り状態。

何でもいいから手がかりが欲しいんだ。

その科人の話を聞いた人に会えば君が調べている事の何かヒントが見つかるともしれない。

軍も調査メンバーに過敏に反応している。

その人も軍と揉めて事件後に警備隊を辞めさせられてるから、調査に参加している僕らは近付けないんだ。

君なら大丈夫だろう。多少の危険は付きものだけど行くんだろう。」

「もちろんや。その人って誰や？」

「君も知っている人だよ。ベイカの町で何でも屋をしている毛利小五郎さんだ。」

高木は言った。

## 24・名探偵登場

城内のことは何も知らず、コナンは連れて来られた部屋の窓から城が見ていた。

そこはメインストリートから外れた小さな建物。

小さなカフェテラスの横にある階段を昇ると、こじんまりとした部屋に丸椅子とテーブルが並べてあった。

「やはり子供なのか。まあ、楽にしろ。」

窓に寄り添い城を見るコナンをそのままに、小五郎はキッチンを見渡した。

「おまえが飲むようなものって・・・ないか。コーヒーくらいしかねえか？」

「ぼくコーヒー好きだよ。」

子供口調で行ってもそんな子供はいない。

「へっ？ガキのクセに・・・今夜は眠れなくなるぞ。」

小五郎はそう言いながらもコナンの前にコーヒーを注いだカップを置いた。

「さっきの続きをするつもりはねえ。」

あの爺さんの家にいるってことは西の坊主とツルンデルのは嘘じゃないさそうだな。

おまえがツルンデル西の坊主の溢してた言葉、意味が分からないオマジナイのようなものでもいい。何か覚えてないか？」

「平次兄ちゃんを疑ってるの？ぼくコーヒーで買収されないよ。」

「疑ってるわけじゃねえよ。」

「こっそり聞くななんてって疑ってるのと違うんじゃない？」

理由を言わないと全て平次兄ちゃんに話すよ。おじさんの行動もす

べて。」

「嫌になるくらいいつかりしたガキだぜ。オレは有希ちゃんに依頼されてると言っただろう。」

小五郎はコナンの目を睨んだ。

「おまえはこいつを探してたんだろっ。」

小五郎は机の引出しからノートを出した。

それは工藤新一の捜査記録。

コナンは手を伸ばした。

「誰も見ていいとは言ってねえぞ。」

小五郎はコナンの表情を観察していた。

「でも目の前に置かれると誰だって興味が湧くもんじゃない？」

コナンもそれを認めるわけがない。最初から子供の姿を利用し続けた演技。

「これを読んでるってことは、おじさんはあの屋敷に住んでいた男の子を捜して欲しいっていう依頼を受けたんでしょ？」

「まったく・・・ただの幼いガキだと思ってなかったんだが・・・  
つこつちを探ってるみてえだ。」

軍部の連中は子供扱いしねえぞ。オレが相手に良かったな。」

「それじゃ僕のこと疑ってるの？」

「初めはガキ共が悪戯に忍び込んだと考えたさ。」

おまえが服部の仲間と聞いて考えが変わったんだ。

あの坊主は危険を承知でおまえのようなチビすけを巻き込むような真似はしない。

それでもおまえが探りに来たのはとカナリ深い関係者だってことだろう。

工藤邸は危険な場所じゃねえし他のガキ共はカモフラージュに使ってたんだろっ。」

小五郎の推理は偶然の一致。

演技も何もない。1番最初に疑いの眼から外れる子供だと言う条件

が通用しない。

まさかこんな展開が待ち受けてるとは思わなかった。

「ひどいよ。まるで彼らを危ない目に合わせたみたい。そんなことしないよ。」

「このノートを読む限り、消えた坊主はオレが係わった10年前のヤマに触れたようだ。」

当時の関係者は誰もが口を噤んだ。

そんなヤマに軽く考えてるおめえらガキドモに関わってもらいたくねえんだよ。」

本心が溢れた。

おっちゃんは服部にも係わって欲しくないと言っていたのだった。

「監視つて？10年前のヤマつて？・・・おじさんは一体何してる人なの？」

「まだ名前も言ってなかったか。」

オレは毛利小五郎。昔は警備隊にいたが、訳あって今は何でも屋だ。

「

「平次兄ちゃんは自衛団を作って動いてるんだよ。元警備隊なら尚更直接聞かない理由がわからないよ。」

これでは平次の仲間だと言っているようなもの。

しかし10年前の話は聞いておかなければならないと思ったからだ。

「この件には軍が絡んでる。一般人相手なら西の坊主にも手はあるだろう。」

しかし軍部が相手なら話は別だ。いいか大人の言うことは素直に聞くもんだぞ。」

「だから平次兄ちゃんに仲間が必要なんだ。」

「こらっ相手を舐めてかかるな。」

おっちゃんの顔は苦しんでいるように見えた。

「おまえにも両親がいるだろ。警備隊関係者か？軍関係者か？」

コナンは首を振った。

「一般人ならなおさらだ。命を粗末にするな！」  
おっちゃんは静かに言った。

「・・・お父さん。危ない仕事を受けたの？」  
入り口から声がした。

コナンがよく知る彼女と同じ声。

「蘭、帰ってたのか？」

「園子のお姉さんが大変なの。」

富沢さんがお城の警備隊長に任命されただって、もう姉さんもシ  
ョックで・・・

それで園子はお姉さんに付き添ってお城まで。  
「蘭は自分のことのように心配顔で話した。」

コナンは昨夜のことを思い出した。

この世界の住人は現世と同じ人物が存在している。

しかしその名前は現場で見なかった。

現世でイラストレーターを目指していた温和な彼が、

この世界では軍部に所属しているなんて信じられないくらいイメー  
ジとかけ離れている。

現世では父が実の息子によって殺されるなんてスキャンダラスなニ  
ュースを提供してしまった。

その後の富沢財閥の話は園子から聞いていない。

またお姉さんが婚約破棄したとも聞いていない。

あんな事件の後だけに色目で見られるのは仕方が無い。

その報いがこの世界でも変わらないのだろうか？

「あれっ昨日の男の子？昨日は命拾いしたわ。どうもありがとう。」  
「なんだっ？このガキと知り合いか？」



「昨日話した子よ。鬼が現れた時瓦礫に挟まれた園子を助けるのを手伝ってくれたの。」

「そうか・・・ありがとうな。」

「いえ・・・。」

急におっちゃんに頭を下げられると戸惑ってしまふ。

「・・・礼とこれは別の話だぞ。おめえは命を何だと思ってるんだ。死を恐れないのは若さの所為というが、それはまだ命の重さを理解しちやいねえからだ。」

おっちゃんの話は間違ってる。

「それから蘭。新聞を読んだが誤報じゃなかったのか。」

その人事はオカシイぞ・・・軍はまた闇に葬ろうとしてるのか。」

「どういうこと？」

「まあいい。オレは出掛けてくる。」

おっちゃんは席を立った。

「お父さん？」

「今夜は飯はいらねえ。しっかり鍵を締めて寝るんだぞ。」

蘭は不安な顔をしておっちゃんの背を見送った。

「何がオカシイの？ねえ君は知ってるの？・・・あれ？コナンくん・・・。」

蘭が部屋を見回しても蘭ひとりだった。

・・・・・・

店を出た小五郎は城とは反対の方向に歩き始めた。

コナンはその後ろを追う。

しかしわざとなのか人通りの少ない道を選んで進む。

足元もガタガタで尾行しづらい。

コナンは諦めた。

そのまま後ろを歩いた。

「ガキが・・・ついて来たのか・・・。」  
人気の無いところでおっちゃんが立ち止まった。

「ばれてたね。おじさん。」

「あたりまえだっ。」

警備隊を辞めてから最近までオレには何者かの監視がついていた。  
普段から出歩く時は気を使ってたんだ。」

「おじさんは10年前の事件の深いところに足を踏み入れてたんだね。」

「警備隊を辞めて秘密裏に捜査を続けてきたが大して進んじゃねえよ。」

付き止めた場所には先回りされるやら・・・いろいろあったぜ。  
せつかく自由の身になったはずだったんだが・・・蘭がいるから撤退せざるえない時もあったかな。

ヤツらがオレを泳がせている理由が分からないままかなりの時間が過ぎた。

しかし新一が姿を消すと完全に監視を解いたってわけだ。」

「それじゃ工藤新一って。」

「あの坊主は若さっていうミスをしたんだろ。」

たぶんオレがまだ触れるの避けたものに真っ直ぐにぶつかったんじやねえのかな。」

おっちゃんは言った。

言いたいことは痛いほど分かっている。

あの日夢中になって証拠写真を撮っててジンの気配に気がつかなかった。

「おまえとオレとの取引だ。」

今から行くオレの捜査について来てもかまわねえ。但しおまえが知っていることを話してもらおう。

西のアホまで同じミスをしなひとは限らねえからな。

それなら文句は無いだろ。」

今までガキ扱いしていたクセに対応が変わった。

「おじさんならオルファって知ってるよね。」

「おまえっ！・・・なんでそんなもんを知ってるんだ。」

おっちゃんは無言で黙りこんだ。

「そういうことか。」

急に呟いた。

「ねえ、意味を教えてくださいの？」

「意味はついて来れば分かる。その言葉は無闇に発するなよ。」

コナンは小五郎の後に続いた。

## 25・姉妹の想い

「失礼します。」

メガネの男は哀を連れたまま城の一室に入っていた。

そこは兵士たちの控え室。10数名の兵士が整列している。

「申し訳ありません。遅れました。」

彼はすでに並んでいる兵士たちに丁寧な頭を下げると列の後ろに付いた。

・・・さっきの張り詰めたオーラは消えていた。

兵士たちは一緒に歩く哀の姿にざわついたのだった。

「静かにしろ。・・・これで全員だな。我々の隊は正式に富沢隊として始動することになった。」

新任の副長が声を上げた。

「皆の命を預かる隊長に任命された富沢だ。

わたしは君たちに比べて実戦の経験は少ない。足りない部分は力を貸してくれ。

仇討ちを叶えたい気持ちは君たちに負けていない。

亡くなった隊長に頂いた教えを胸に戦うことをここに誓う。

よろしく頼む。」

隊長に就任したばかりの富沢は頭を下げた。

副長の顔が曇った。

それは1つの隊を預かる長に有るまじき挨拶。

その若さと言動。部下に舐められて上下関係が崩れてしまう。

「亡くなった隊長はどんなときも胸を張ってくれたぜ。」

彼を隊長として兵士の誰もが担ぐことに異存は無かった。

富沢は期待された成果が得られず上から罵られようと平然と頭を下げ、ミスよりも生きて戻った部下を喜んだ。

小さなミスは命取り。しかし生きてるからこそ挽回のチャンスは訪れる。

彼のスタンスは以前から接触して知られていたのだろう。

この隊には前に所属していたキャンティ等特別な才能の持つ兵は移動させられた。

しかし残った兵も特異的な仕事をこなして生き延びてきた男たち。

特命を受けていたといっても暗礁に乗りあがった作戦ミスの打開策の先頭に後始末、

日の当たらない仕事ばかりして来た。

だからといって命知らずの猛者の集まりではない。

唯でさえ周りの隊から関わることを避けられ煙たがられるこの隊の頭には彼が相応しいと感じていたのかもしれない。

挨拶が終わると副長と一緒に富沢が隊の列を回り皆の腕を絡め、個々に声を掛けてゆく。

この部隊の儀式みたいなもの。

隊長と1人1人の部下が順々に顔を合わせていった。

そして1番後ろにいるメガネの男の前にやって来た。

「なんだこの子供は？」

哀を見た副長が言った。

「階段で兵に追かけられていたので連れてきました。」

「城内警備の連中がか？」

兵たちは哀の顔を見に集まってきた。

大柄な男たちに囲まれると威圧感を感じる。

哀は何も口にできなかった。

「城内に納品しに来た者の子供かもしれないぜ。」

「女の子ってお城に憧れてるからな。城の中を歩き回って迷子になったんじゃないですか？」

「なるほど。おまえはお城に連れてつあげるとか言って城外でナン

パしるんじゃねえのか？」

「そつそんなことはしてねえよ。」

「そんな敵つい顔じゃ王子さまには見えねえもんな。」

「おまえよりマシだろ！」

軍隊と言えども普通の人間。緊張が解けたときは笑い声が絶えない。ONとOFFを分けることがこの世界で生き延びる秘訣。小さな少女をたくさんの敵つい笑顔が迎えた。

「迎えが来るまでここで預かってもいいでしょ？隊長。」

「このフロアならいいだろう。しかし警備隊と合同調査もある。そこは弁えてくれよ。」

「備品課に迎えが来たら連絡するように話しておきます。」

兵士の1人が言った。

「でも普通この警備を潜って入れますか？」

兵の1人が聞く。

「子供だからだろ。緊張を長続きさせるのは難しいものだぜ。」

「虫一匹通さないなんて豪語してた連中も面目が立たないから、この娘のことは内密にしておけよ。」

副長が言った。

「まあいい。その子のことは後に。早く自己紹介くらいしないか！」  
ぺこぺこ頭を下げるメガネの男に富沢が言った。

「すみません・・・わたしはハイドシティで武道家をしている京極真といいます。」

軍の仕来りは知りませんがよろしくお願いします。」

「だんなのことを知らないやつはもぐりだぜ。その力を軍の為にじやなく隊長の為に頼んだぜ。」

「そうだな。軍のことは知らなねえだろうぜ。」

だんなは民の代表だ。オレたちにねえものを持っている。軍に染まる必要はねえよ。」

兵士は口々に言った。

「この隊は亡くなった隊長の意思を継ぐ。我が隊は編制された頃の少数先鋭部隊に戻った。自己犠牲のチームプレーでは打開できない難問がやってくるはず。スタンドプレーに走るのは仲間を信頼してるからこそだと信じてる。だからどんな作戦でもかならず隊に戻ってくるんだ。挽回のチャンスは俺が作る。」

隊長の演説に兵士たちは雄叫びを上げた。

この部隊は普通の上下関係の兵隊というより横で繋がった仲間。小説でしか軍を知らない哀にとっては違和感でいっぱいだった。それは京極にとっても同じだっただろう。

・・・・・・・・

「嬢ちゃんただいま。」

警備に向かう兵士が声をかけてゆく。

「嬢ちゃん行つて来るよ。」

戻って来た兵士が声をかけて床に座り込んだ。

ここは富沢隊の詰め所。

哀は部屋の隅に座らされてお茶を飲んでいた。

どの兵士も部屋を出たり入ったりするときには哀に声を掛けてゆく。

軍人にだって家族や兄弟がいる。

言わば兵士たちの妹や娘と重なるのだろう。

哀は上手く笑顔が作れないが頭を少し下げて見送っていた。

「少しは落ち着いたかい？」

メガネの男が声を掛けてきた。

「ええ・・・まだここにいていいのかしら？」

「今のところはね。」

必要以上に何も言わない。  
それだけ言つと哀から離れて行つた。

気が付くと兵士たちが出払つた部屋に哀1人。

長テーブルに置かれた書類を見ているとドアの向こうからかすかに話声が聞こえてきた。

そこは奥にある隊長の専用の部屋。

哀はそつとドアに耳を当て聞いてみた。

「すまない。こんな世界に巻き込んでしまつて・・・軍の命令とはいえ君には似合わない場所までつき合わせてしまつた。」

富沢隊長の声。

「そんなことないです。武道は精神修行。軍人になるつもりはないけれども、ここに来なくちゃ逢えない敵がいますから。」

寡黙な彼の声が聞こえてきた。

「隊長の弔い合戦となるはずだ。・・・所詮軍は命のやり取りをする場所だ。君の拳を汚すことになる。」

「わたしの敵は人ではない。人の仮面を被つた鬼ですよ。」

「戦争なんて信じた正義のための戦い。自分が鬼だとは思っていないから非常なんだ。」

ぼくは前線で使い物にならなくて城内警備に廻された。敵も味方も傷ついた兵士を見ると苦しくてね。

戦いを終わらせる事ができるのは勝利だけなのか・・・いくら考えても答えが見つからず戦いの後は無力感でいっぱいだった。」

「それでも軍属で居つづける。彼女を守る男になるためなんですよ。」

今回の人事はどうな調査結果が出ててもかなり厳しい状況です。この



まま軍に利用される訳には行きませんよ。」

「刺し違えても・・・自分の正義は貫くつもりだ。」

「だめです。生きて戻らないと意味がありません。お姉さんが待っているんですよ。」

「止めてくれ。もうキャンバスに向かっていた頃の僕じゃない。」

ぼくの手は血で汚れぼくの鼻は火薬で麻痺した。彼女には似合わない男だよ。」

「いいえ。胸を張って戻ってきてもらいます。お姉さんと祝宴を挙げるために。」

哀には2人の会話から2人の彼女が姉妹であることが想像つく。

彼の事件記録を博士のパソコンで整理するのを手伝われたときに打ち込んだ覚えのある名前の2人。

ただ現世ではこの男たちに逢ったことがない。

「・・・彼女は元気だったか？」

「はい。・・・鈴木会長もお兄さんを心配しております。」

「会長も・・・か・・・こんなぼくを・・・。」

「会長は富沢財閥の総帥が殺された事件の再調査を依頼していました。」

「あの事件は工藤くんが事件を解決しただろ。長兄が父を殺したことに変わりはない。」

次兄ががんばって事業の建て直しを計っているだろうがダメージは大きい・・・

以前のような信頼を取り戻すのは厳しいかもしれないがんばってるはずだよ。」

「富沢コンツェルンのほとんどは国の事業を引き受けています。」

総帥が亡くなって国王から任命された神官が代表として事業を継承

し、次兄さんは閑職に追いやられてしまいました。」

「そんな……。」

「そして国のかかわる事業は軍が研究機関として吸収する計画が上がつてます。」

さらに富沢家と繋がりのある鈴木財閥に事業の協力を要請してきました。その事業内容は納得できないものだそうです。

軍の態度に疑問を持った会長が富沢代表の死は裏で仕組まれていたのではと思ったそうです。

……事実は覆らないでしょう。

しかし長兄が殺人事件を起こした理由に何か別の力が働いたのではと納得するまで調べたくなったのです。

会長はあの事件を解決した工藤新一くんに依頼しました。

動機についての裏づけ調査の途中で軍が係わっている可能性がある」と途中経過を報告がありました。」

「軍が係って……まずい……それが本当なら彼が危険だっ！」

「……彼は突然姿を消しました。」

会長にはSPが付いてますがお兄さんはその軍の内部にいる。だからわたしが力になりたいと。」

「きみには園子くんを守る義務がある。」

「わたしが今回の人事を断らなかったのは園子さんの意志でもあります。」

彼女もお姉さんの幸せを願っているのだから。」

「ぼくは……彼女を……彼女の家族……そして君まで巻き込んでしまった……守れる男なんてなれそうもないな。」

「それは違います。その想いを力に変えて踏ん張れるからこそ守れる男なのです。」

「……すまない。でも決心がついた。」

「決心……ですか？」

「ああ、兵たちを死なしたくない。今回の調査をどう進めるべきか悩んでいた。」

「上からの圧力もあつたのですね。」

「この人事は報復なんだよ。隊長の死を民に流したのはばくなんだ。司令官の反逆行為を隠蔽させないようにね。上層部の決定も早かっただろう。」

報道規制が難しいと判断したんだろうな。」

でもこれで兵士たちも巻き込んでしまった。」

ばくの心は決まった。」

今回の合同調査でばくと警備隊の責任者が昔からの知り合いだと知られている。」

始まつても入らないのに癒着だとか、不利益な情報は握りつぶすとか好き放題。」

まともな最終報告はないと思われてる。」

それなら真実つてやつを捜し出してやる。」

「一緒にやらせてもらいます。」

2人が笑い声が聞こえてきた。」

現世での彼らの周りにいた人物は知っている。」

話を聞いていた哀にもこの2人の人物が理解できた。」

「事件の裏側ね・・・。」

彼に話したことがある。」

『組織の被害にあつて泣いている人たちは大勢いる。しかし組織の所為だとは誰も気がついていない。』

組織と同じなら小さな事件でも意味がある。」

軍の目的は初めから隊長の父親の会社だったのかもしれない。」

この世界の彼もやはり黒づくめに似たような組織に関わっているなんて・・・

でもここにも仲間がいる。」

「お嬢さん。隊長はおられるかな？」

男が部下を連れて入って来た。

兵士とは違った装備をした男たちの顔は知っている。

「この奥に。」

「ありがとうございます。君はここで待ってなさい。」

男は1番後ろでつまらなそうな顔をしている色黒の青年に言った。

「あなたは？」

「・・・ん。まさか？」

顔を知る見知らぬ同士。

男たちの視線の中言葉を交わすことは控え、哀は顔を背けた。

「君たちは知り合いか？・・・こんな小さな子と？・・・まあいい。」

男は扉をノックした。

「富沢隊長はいるか。調査チームの白鳥だ。」

また仲間が集ってきた。

彼らがこの世界に蔓延る組織に立ち向かう。

哀は彼らの姿に勇気を与えられたような気がした。

## 26・糸は繋がれたまま

小五郎はコナンを連れていろいろな場所を回っていた。

しかし彼の表情から集まる情報は新しいものではないようだ。時折工藤新一の捜査記録を読み直す。

今日の捜査活動は記録の裏付けをしているようにも見える。

その捜査は口ではなく行動でコナンに・・・

いやコナンを通して工藤新一を捜す服部平次のために情報を流しているようにも見えた。

捜査は足でという現世のおっちゃんと同じように靴底を減らして歩く。

太陽が傾き始めた頃、小五郎は日売企画という看板のある汚らしい建物に入っていた。

そこは事務所ではなく輪転機が回る印刷工場。

「こんなところに何が？」

「大人しくしてるなら付いて来てもいいって言ったんだぜ。」

小五郎は説明するつもりはない。

勝手にドカドカと奥のほうに歩いてゆく。

コナンは遅れないようにについて行った。

「こんにちは。編集長は？」

小五郎は営業スマイルで声をかける。

しかし作業している人は無視。

作業に集中していて誰も返事をしない。

「返事くらいしたってバチはあたらねえってだろうにっ。」

小五郎は近くの機械を蹴飛ばした。

グォーングォーングォーングォーン

けたたましく唸り出した機械の所為で小五郎の悲鳴が掻き消された。

「やべつ。」

コナンは飛び出してくる白紙のペーパーを必死で押えていた。

「困るんだよ。部外者は出てっくれ。」

男の声と共に機械はペーパーを吐き出すのを止めた。

周りの作業者の雰囲気からその男が責任者のよう。

「それが客に対する態度かいっ！」

「ここは子供を連れて来る場所ではありません。勝手に凄まれてもね。」

「ああっそうかい、そうかい。昔のよしみでいい情報を持って来たのによっ！」

小五郎は男の胸座を掴んだ。

「ガサネタに振り回されて軍部に睨まれたら商売上がったしさ。さあ帰ってくれ。」

男はその手を振り払った。

「後で後悔しても知らねえぞ。」

「忠告したやるよ。軍部も昨夜の件の沈静化に躍起になっている。

今は誰も買わないぜ。」

「ふん。行くぞコナン。」

交渉決裂。

おっちゃんは一瞬と事務所を出ていった。

2人は賑やかな繁華街に行く。

「何をもらったの？」

コナンは歩きながら聞いた。

「見ていたのか。」

2人は顔を合わさずに歩き続けた。

「ああいうところはいやでも情報が集まるからな。

タレコミ屋に接触してくるはずだ。

心配はいらない……が本人かどうか、誰かが差し向けた図だと

か。ヤツのほう警戒しているはずだ。

何をしてくるか分からねえしから親しく声掛けて来るからって変な物受け取るなよ。」

「機械の修理請求書かもしれないもんね。」

「ははっ違いねえ。」

口元が緩んでいても小五郎の眼は辺りを見渡していた。仕事が終わったのだろう。たくさんの人が出ている。

・・・おっちゃんも監視されているかもしれない。

コナンもずっと尾行されているか気にしていた。

相手は軍部だろうから油断は出来ないが、今のところ気配は感じない。

「コナンはジュースでいいな。」

いきなり小五郎が走り出した。

小五郎の眼が探していたのは屋台の呑み屋。頃合も良い時間。腹が空いてはなんとやら。

暴力的な焼き鳥の香ばしい匂いにコナンのお腹も鳴らしていた。

「おやじっ！ビールとガキのジュース。それに美味しいところ4・5本みつくるってくれっ！」

集まり出したお客を掻き分け屋台のおやじに大きな声で注文を出していた。

おっちゃんの行動を伺う誰かの視線をかわす演技なのか、本当にお酒が恋しいのかストレスの行動。

コナンは現世と変わらないおっちゃんの行動に苦笑いを浮かべた。

ガタガタガタ・・・

グモオオオー

車輪の音が響く。

「あぶねえじゃねえかつ！」

「ギャー！」

人の叫び声まで聞こえていた。

「なんだありや？」

「手綱をしつかり引けっ！」

暴走気味の牛車が通り過ぎた。

「今のは？」

2人の男が揉めていたのがコナンに見えた。

はつきりと顔を見えたわけじゃないが色黒の男がいた。

「あの幌の印は城へ野菜や果物を納品してる車じゃねえかつ？何でこんな時間に？」

屋台のおやじも不審な目で見ていた。

「ありや樽積んでたぜ。酒屋じゃねえのか？」

「樽？・・・酒なら国王専用の農園で作っているさ。国王が安酒を流し込んで飯を食ってるはずないだろ。」

それにしてもあんなボロイ樽に何を入れてるんだ？」

小五郎は走り出した。

「あの車を追い駆けるぞ。10年前のあの時も・・・。」

「10年前？」

おっちゃん警備隊にいたときの事件のことだろう。

コナンは小五郎の後を追いかけた。

「減速しねえのか？このまま突っ込んでしまっ気かよ！」

十戒のシーンにあった海のように人が空けた真っ直ぐな道を牛車が狂ったように駆け抜ける。

コナンは科人。

時間を操る術を持っている。

時間が止まればその隙に救い出す方法があるはず。

しかし止まった時間にどうしたらいいのかが浮かんでこない。

それにこんな人が集まる場所を使って自分の正体を明かすわけにはいかない。



他に何か手がないものか？

手綱を操る男2人が揉めている。

グー

ギシギシギシ・・・

綱が引かれ牛は右に曲がろうとしている。

しかし牛が引く勢いのついた荷車は荷物が重いのか慣性で曲がろうとはしない。

ゆっくりと振られるだけ。

ウー

ガリガリガリ・・・

ミシミシミシ・・・

しかし尚牛のハミを無理やり捻りあげられ牛車は曲がろうとした。少しずつ車が向きを変える。

ギギギギ・・・ギギギ・・・ギギ・・・

石畳に揺られいきなりスライドした。

「ダメダァー！」

通行人まで悲鳴を上げる。

もう時間がない。

「なるようになるしかない・・・。」

コナンはあの時と同じように時間が止まるよう念じた。

ガシャーン！

ギユンツ・・・ガシャガシャーン

ウー

ギユギユギユ・・・

時間が止まる前に牛の鞍と車を繋ぐ接続部と片方の車輪が弾き飛ばされた。

過重が掛かった勢いで反対側の車輪まで外れた。

ウー・・・ウ

倒れた牛が苦しそうなうめき声をあげた。

その間も荷台だけが石畳を滑ってゆく。  
焦げ臭い匂いと煙を上げて荷台は止まった。

「何なんだつまつたく!」

小五郎とコナンがゆつくりと近づく。

1人の男が気を失い、もう1人の眼は焦点が合っていない。

「おい、西の坊主・・・か?」

小五郎が頬を張るとその手には黒い染料が付いた。

「もしかして? 木さん?」

コナンの口は塞がれた。

「すみません毛利さん。理由は後にして警備隊を呼んでもらえませんか?」

「もう呼んでるよ。それにしても黒く塗れば良いってもんか?」

屋台のおやじを指しながら言った。

「だぶん。下を向いていれば誰も気が付かないだろうから・・・。」

「色が黒いことに目が行って意外と見てねえもんか。」

それよりこの樽が爆発するんじゃないかって心配してたんだが。」

「それは重要な証拠品。そのまま警備隊に持ち運びたいんです。」

「ふゝん。オレにも見せてくれないか?」

「後で・・・毛利さんは事件に関わっているんですから。」

自分の顔を指差した小五郎に高木は頷いた。

コナンは壊れた荷台を見直した。

弾丸が正確に撃ち込まれている。

「こんなことが出来るのは。」

一瞬思い浮かんだ顔。あの鋭い眼光。

「あの男?」

鬼と遭遇した時のことをふと思い出した。

「ここはオレ達の生きる世界と別物。アイツは何者なんだ? 何の目

的でオレに関わってくる？」

辺りを見回してもニット帽は見つけられなかった。

現場は由美さんに似た女性警備隊員が人々を誘導している。

しかし人だかりはなかなか減らない。

その人ごみを掻き分け恰幅のいい男が報告を受けていた。

コナンが眺めているとこっちに気が付いたのか歩み寄ってきた。

「毛利くんがいたのか・・・君の昔馴染みのタレこみ屋が1人殺された。詰め所まで付き合ってくれないか。」

「えっ！・・・わかりました。」

小五郎は後ろをついて行く。

コナンも一緒に促されるまま馬車に乗った。

## 27・・・10年前

「毛利くんはまだあの事件を追っているのか？」

仕方なさそうに目暮が言った。

連れてこられた詰め所の隅の応接セットで3人は顔を合わせた座っていた。

2人の前にお茶が、コナンの前にはオレンジジュースが湯のみに入れて置かれる。

持つて来てくれた高木は目暮の後ろに立ったまま話に混ざっていた。

「ライフワークってヤツですか。」

「君はもう警備隊じゃないんだ。それじゃなくてもあの件は・・・。」

「」

「1人で追うな、オレ達に任せろでした。でもオレの仕事が終わっちゃいない。」

小五郎はテーブルを叩いた。

熱いお茶の入った湯のみが揺れた。

「君が警備隊を辞めたその時点で終わってたんだ。もう君の手を離れたんだ。」

「ああ警備隊じゃこれ以上捜査が出来ないから止めたんだ。事実捜査はあまり進んでないでしょう？」

「君の足跡を消しながら我々が捜査してるのを気が付かんのかっ！」

今度は目暮がテーブルを叩いた。

また湯呑みが揺れる。

コナンは急いで目の前に置かれた湯呑みを手に持ちブラブラさせた足をソファに乗せた。

「今度は子供まで巻き込んで・・・高木頼むが・・・。」

コナンは高木と一緒に部屋から出ていった。

最後の悪あがきでドアに耳をあてていたコナンだが抵抗も続けられず、休憩室に連れて行かれた。

子供の姿では仕方がない・・・しかしそれでは済まない。

今も城内で服部も灰原も戦っている。

「あの・・・高木さん。」

「なんだい。」

高木は返事をしながら部屋の鍵を締めた。

「これで誰も入ってこない。安心して話ができる。」

「えっ？」

「君には話しておかないと思うんだ。」

振り返った高木は神妙な顔をしていた。

「まずは服部くんは無事だよ。そして君の捜していた少女が彼と一緒にいるから。」

「・・・よかった。」

信じていたコナンが見てきた彼の言葉に胸をなで下ろした。

それにしても灰原はどうやってあの部屋から出たのだろうか？

まだ狙われる危険がある。そして姉を人質に捕らわれているだけに安心は出来ない。

「目暮隊長には内緒だけど、君には話しておいたほうがいいと思うんだ。」

高木は神妙な顔で話し始めた。

「話すって・・・。」

「10年前のことだよ。」

あっけにとられてるコナンを前に高木は話し始めた。

・・・・・・

「いいか毛利くん。相手は軍だ。当然我々に目を光らせている。当時の仲間も捜査の最前線から外され大半は監視されながら仕事をしている。」

我々でさえこんな状態だ。君一人で思い通りの捜査が出来るはずがないだろう。」

コナンが退席したのを確認すると目暮は口を開いた。

「しかし・・・このまま引き下がるわけにはいかんです。」

小五郎は言った。

目暮が自分の身を案じていることは痛いほど分かる。

それはこの年間無事でいられたことが何よりの証拠。

しかしそれは目暮の立場を苦しくさせているのも事実。

だからこそ一氣に決着を付けたかった。

「・・・そうか・・・。きれいな奥さんと別れてからの時間すべて使ってるのか？」

この件は我々警備隊に任せて、そろそろ戻ってもいいんじゃないのかね。」

「まだ解決していない案件ですよ。オレはこのまま引き下がるわけにはイカンのです。」

「蘭くんも・・・巻き込むぞ。」

昔の部下と上司。家族ぐるみで付き合いがある。奥さんと別れた理由の1つは知っている。

「それは・・・分かってます。時期が来たら蘭のことはアイツに任せるつもりです。」

「君は腹をくくったということか。」

目暮の言葉に小五郎は黙って頷いた。

「・・・そうか。」

目暮は目を伏せた。

「本来なら捜査に君を参加させるわけには行かない。

しかし残念ながら君に協力してもらわなくてはならなくなった。そ

のために君の覚悟を聞いておかないとな。」

目暮は言った。

「もちろん協力させて頂きます。．．．それで亡くなったというタレコミ屋というのは？」

「君もわしもよく知る人物だ。」

「それじゃ．．．やはりオレとコンビを組んでた．．．。」

「彼だった。．．．あれからもう10年も経つんだな。」

「10年．．．あの軍部も今のような組織になる前の防衛軍だったんでしたね。」

あれから．．．あの日から強大な組織に生まれ変わった。」

「なんですかこれはっ！これじゃ警備隊の存在価値は何なのですか。」

10年前のある日、警備隊の本局では捜査官たちが大きな声をあげた。

軍が再整備が議題に上がってから、その特殊性から警備隊との管轄の線引きでかなり揉めた。

しかし国王の一言で上層部は言われるまま、警備隊総司令官は引き下がった。

鬼というとてもない強大な敵には今のままでは無理だという事は誰の目にも明らかだった。

しかし現場はかなり混乱していた。

捜査権が限定される。今追っていた事件を最後に大きな案件はすべて軍に委譲される。

今まで民の生活を守ってきたプライドは簡単には捨てられない。そして兵器を使った強制的な手法。それは新しい恨みを買う。

恨みが大きいほど相手も手段を選ばなくなる。

「これでいいのでしょうか？軍は軍です。鬼に対しての防衛だけじゃいけないのですか？」

隊員たちの疑問は答えをもらえないまま新しい法律が制定される日は迫っていた。

新国王が王冠を授かり神に誓うお告げの儀式の日に法律の制定式、及び軍のお披露目が行われる。

その日が警備隊が国王の警護をする最後の日。警備隊の強行犯担当もある事件の首謀者を追っていて、組織されたばかりの軍部と関係があると睨んでいたんだ。

しかし正式に制定されるとその事件は軍に捜査権が移ってしまう。長期にわたって捜査が続けられてたため、これを最後に引退する警備隊員もいた。

特命を受けた目暮隊長もぎりぎりまで捜査するために儀式の警備に紛れ込ませていたんだ。

もちろん小五郎も殺されたタレコミ屋も紛れ込んでいた。

新国王は神のお告げを聞き、神によって新国王として正式に承認された。

そして民の前で宣誓した。

さらに民が不安を抱いた軍の設立についても述べた。

権力を持つ組織がいくつあろうと国王の名において掌握すると。

実際は警備隊の行動範囲は削がれ弱体化させる方針は準備されていた。

しかしそんなことはまだ民には知らされていない。

そこで軍の猛者を相手に不思議な術を披露してその力を見せ付けていた。

歓声が湧き上がる。



誰もが新国王に希望を湧き上がらせていた。

王が退席するときに小さな女の子が直訴した。

あたしを軍に入れてくれって。

鬼によつて両親を亡くしたから敵をとりたいて。

王は宙から花を取り出し彼女に与えた。

「本当の戦いはこの命を大切に生き抜くことだ。」

集まつた民は皆、国王に祈りを捧げた。

しかし1人だけ王を睨みつけてた男がいた

男は祝いの日に余興と呼ばれていた大道芸人。

なぜ祈りを捧げないと警備していた兵が聞いた。

「トリックで民の目を欺いてはこの国の歪みは直せない。」

王を蔑んだ言葉に躊躇いも無く兵は銃口を向けた。

「兵隊さんがこの祝いの席を血で汚すのかよ。」

紛れ込んでいた小五郎の言葉に銃は収められた。

まだ軍に捜査権が移ってないのが幸いし、男はその発言で身柄を警備隊預りとなった。

連行及び取り調べは現場にいた小五郎に任された。

「このところ白い盗賊団は現れないな、中森。」

「まったくだ。捜査権が軍に移る前に仕事をするとってたんだが・  
・・くそっ！」

小五郎が詰め所で男と顔を合わせると廊下から声がした。

あの声はいつも以上にイライラしている同期の中森たち。

顔を合わさなくてホッとしていると男の口元が初めて緩んでいた。

「まったく死にてえのか？文句の1つも言いたいだろうが場所を弁えろってんだ。」

薄暗い取調室はそれだけで威圧感を与えるもの。

男の感じが変わったところで小五郎は話し始めた。

「人を楽しませ驚かすトリックを権力の象徴に使われるのがやりき

れなくてね。」

男も素直に答えた。

「国王のあの儀式がショーか。確かにそう思うぜ。」

しかし宙から花を取り出すなんて術は本当にあるんだろうよ。」

「本物の術は驚く暇さえ与えないものだよ。」

「ほおっ、そうなのか？オレはよく知らねえけど今回のあれはやり過ぎだ。」

「警備隊員がそんなこと話してもいいのですか？」

「言つたろう、場所を弁えろつて。軍の兵隊さんがいるところじゃなきゃお咎めなしだ。」

上司の悪口なんて酒のツマミにかかせねえものだぜ。

国王は1番立つんだからそんなことまで気にしてる暇があるなら他にやることあるだろうぜ。」

小五郎は笑いながら言った。

「あなたは面白い人ですね。」

「あんたもな。」

警備隊の直感つてヤツかな。悪意のある者とそうでないもの。オレぐらいになると匂いでわかるもんさ。はっはっはあ

軍は一律にしょっ引くけどオレ達はそうじゃねえ。ここを出られたとしても気を付けるんだぜ。

あんたのような大道芸人は民を楽しませるのに毒舌の一つや二つ口にするもんだろう。

そんな落ち着いたトーンで話されたら冗談にも聞こえず客も納得させられちまうかもしれねえがな。

それも自分の世界に迷い込ませるっていうプロの話術つてやつなのかもしれねえな。」

「まあ不快に想う人もいるでしょうけれど。」

男は誰かを思い出しながら言った。

「まあな。でも人気商売だから全く無くすわけにいかねえものな。」  
「確かに。」

小五郎と男は変に馬が合ったのかその後もいろいろ話していた。留置場に一泊すると、軍も承諾し過去に犯罪歴もなく今後も可能性も低いと判断され男は釈放された。

「あなたで助かりました。ありがとうございます。」

男は小五郎に礼を言うと言った。宙から花を一輪取り出して渡した。

「えっ・・・どこから？」

周りにいた全てのものが驚いた。

国王の術は特別な者のみが授かる神の力。

男も同じく神に選ばれた存在なのか？それとも・・・

その疑問に答えるように後日軍部から報告があった。

神のような特別な力を持つ者がいる。

科人と呼ばれるその者は鬼を操ることができるため下手に手出しが出来ない。

鬼を退治するのが軍の表側の理由。だから救護隊も軍に属している。しかし元凶の科人を捕まえることが我々再編制された軍部の使命だと付け加えられていた。

小五郎だけが違った考えを持っていた。

もしかして男の言うとおり国王の術はトリックなんじゃないだろうか？

男と同様に小五郎にも監視がつけられていた。

男の捜査に係わったものは男に術を掛けられている可能性があるの。で部署の移動を指示された。

「何を言ってるやがる。彼はオレや隊長と同じ人間だ。これは小説で読んだ魔女狩りってやつじゃねえか。」

「毛利くん！君は移動が正式に発令されるまで謹慎の身だ。」

君が正常だということは我々が証明する。それがあの男の身の潔白に繋がるだろう。しばらく大人しくしてろ。」

部下の報告を信じている目暮は言った。

しかし小五郎は単独で捜査を始めてまた軍と衝突。

小五郎は進退が査問委員会に委ねられた。

できるだけの擁護はしても軍が相手ではどうすることもできなかった。

その単独行動を許していた目暮隊長も訓戒や減俸だけではすまなかった。

そのとき科人と疑われた男が爆発に巻き込まれるという事件が起きた。

## 28・神のみち

陽も傾き暗くなった部屋に平次は灯をともした。

ここは警備隊に許可が下った例の書庫の部屋。

まだ秘密の地下道の存在は知られていない。

沢山の本に囲まれた部屋は姿を隠すにも都合がいい。ただ逃げ道が入り口の扉のみ。

廊下には警備の者がいるが、あの夜の惨劇を知る者には心細い体制。わずかに感じる空気の流れに炎は揺れていた。

心の奥に潜む不安と似て、時に大きく揺れていた。

城に忍び込んだ軍の暴発を知る民間人。

仕方なく城から解放するとしても監視付きの可能性もある。

それでは閉じ込められていた哀まで連れ出すのは難しい。

彼女の正体を知る者としてはコナン以外の他の者に傍を任せられない。

代わりに城を出た高木さんは大丈夫だろうか？

しかし城の外には彼と同じ警備隊の仲間がいる。心配ないと強く思えばその願いは叶うはず。

工藤が消えてからの足で稼いだ情報は少なすぎた。

今は彼女を守りながら、この地下にある秘密の通路が使えるうちにここにある情報を手に入れることを選んだ。

「10年前にご神体を調査していた歴史研究者が行方不明になる事件が起きて、

警備隊は目暮隊長を中心とした捜査本部を立ち上げたそうや。」

平次は哀に背を向けたまま話を続けた。

「捜査中に研究家が集い共同研究を行っていた富沢コンツェルンの

施設が爆破された。

警備隊は爆破事件の容疑者を割り出して、背後にいる黒幕を特定するために泳がせとったようや。

タイムリミットはこの捜査権が軍に移行するまで。みんな必死だっただろうと思うで。」

当時の話は全容を詳しく調べてきた白鳥隊長から聞いていた。

しかし保護された少女には知らされていない。

彼らは彼女の見かけと実年齢が違うことを知らない。

城にいる平次にとっては書庫の資料を読み漁る彼女にも状況を知っててもらいたかった。

哀は座り込み、資料を読破すること急いでいた。

お姉ちゃんをあそこから助けるにはどうすればいいのか？

そして薬の存在を恨むベルモットがなぜ薬を手に入れたのか？

いくらお姉ちゃんを助ける為とは言え、あの薬を作るわけにはいかない。

それにこの世界に来てまで彼に人殺し呼ばわりされたくもない。

平次の声を耳に入れながらも目は詩のような文章を追っていた。

「毛利のおっちゃんは放って置けなかったんやろうな。

民の誰もが集まる儀式だから警備隊の人間がいてもオカシクはあらへんが、

おっちゃんの捜査方法が荒っぱいんで軍関係にも顔が割れとるし、男を連行しなければ余計に兵が怪しむからだったんやが・・・。

でもこれがキツカケになったんだと言った。

国王だから術が使えて当たり前前と思っったのにあの男はトリックだと言っ。

今まで国王の傍で神に仕えている神官が嘘偽りを言わないという固定観念が消えていったんや。

それまではこの世界には神に使える選ばれた人間を疑うという観念

が無かった。

オレかてそうやったもんな。この世界に生きる者には当然のことだったから。

調べ直して行くとあの男を科人だと報告書を送ってきた神官が事件に係わっている可能性がでてきてん。

そしてまた爆破事件が起きた。」

「まだ爆破事件が？」

哀は読み終えた本を閉じた。

「あの男のショーの会場で舞台を囲んでいた樽が爆発して見物客まで巻き込んで男の身体は消し飛んだ。

しかしタイムアップ。警備隊はその事件の捜査権を軍に剥奪されてもった。

捜査権が軍に移ると舞台の真ん中にいた彼は遺体未確認のまま死亡が確定され、

前の一件と同一犯だとして我々がマークしていた男が爆破犯として軍によって逮捕。

でもその容疑者はずっと警備隊員にマークされていたからその日のアリバイは明白やった。

しかしその証言は軍によって揉み消され、張り込みをしていた隊員は難癖をつけられおっちゃんと一緒に免職させられたんや。

その捜査員は情報屋となつて、今までも警備隊に情報を流しておるそうや。

今回も宝玉が偽物じゃないかって情報を流してもろうて高木さんが城に潜入したんやと。」

「なるほどね。でもその男が白い盗賊団だというの？彼は思ってるより若かった。そうね・・・あなたくらいかしら。」

「・・・逢ったんやったな。」

科人はこの世界にいた人物が若返った姿をして現れるのかもしれないと思っっている平次はそっけない。

「それよりどうしてあなたがわたしの保護者なのかしら？」

哀はいつものような落ち着いた口調で言った。

馴染みの顔をしていても、同じ声、同じイントネーションであつても西の彼ではない。

言葉を交わしていてもまだ気を許せないでいた。

「じゃあねえやんか。工藤が戻るまで面倒見たる。」

「工藤つて・・・そうね。幼い子供を調査の重要資料を自由に閲覧させるわけ無いわね。」

「そうや。坊主の正体は現世の工藤。ご神体に現れた神の使いつて男の所為でオレに正体がばれてもつた。

もちろんねーちゃんの正体も知つとる。工藤のように偽名を使こうてるんやろ。

そないこと人に話すわけにはいかん以上、オレになるしかあらへんやろ。」

平次は頭の後ろに手を組んだ。

「・・・知っていたのね。それであなたはいいの？」

わたしは危険だつてこの本にも書いてあるんだけど？」

「危険つつうか女やから工藤より丁寧に扱わなならへんな。

でも工藤とねーちゃんの目的は同じやろ。工藤の仲間ならねーちゃんもオレの仲間や。」

「まったく現世のあなたとあまり性格は変わらないものなのね。やつかいなことに顔をつ突つ込んでくる。」

ため息混じりな答え。

「そうなんか？オレつて現世でもそんな役回りしてるんか。

あつちの自分も工藤やねーちゃんに苦労してんやな。向こうに戻つたらあつちのオレを大切に扱ってくれへんか。」

「ふう・・・考えておくわ。」

哀は手を広げて答えた。しかしその口元が緩んでいた。



「それでわたしは何をすればいいのかしら？この事件はかなり深いわよ。」

「ねーちゃんは何か知ってるんか？」

今回の一件にはベルモットが絡んでいる。彼女なら綿密な計画をたてている筈。

しかし今はメガネの彼以外には話せない。

哀は黙ったまま首を振った。

「・・・今は言えへんのか？まあ・・・ええか。」

平次も無理強いはいしない。

「今回オレが消えた工藤を捜して出会った坊主が小さなった現世の工藤やった。」

宝玉を狙う盗賊が忍び込んだ城には高木さんが潜りこんでその宝玉の捜査をおった。

出会った坊主が捜していたねーちゃんは軍が暴発した城に閉じ込められていた。

・・・はつきり言って今回の件はどうなってるのかまださっぱりや。それぞれが別々の目的で動いていたけど偶然に重なったなんて思えへん。

何か全て繋がってる気がしてならへんかった訳は、

最後にねーちゃんに読んでもろった本を読んでいたからだと思い出したんや。

科人、鬼、宝玉・・・下らない絵空事に何でって思うやろうがその本の監修を見たか？」

平次は本の後ろを見るように促した。

「監修・・・えっ博士？」

羅列された名前の中に阿笠博士の文字。

「それは神官を辞めて消えた男の名前。素性を隠して街で静かに自分の好きな研究を進めておる。」

「彼が何かっ!？」

この世界の博士でもやさしい顔の人物には黒く染まっっていて欲しく

ない。

「分からん。それは工藤と高木さんが調べてるだろう。高木さんを通して城外の警備隊に行方不明の黒服の男を追っけてもらってる。」

城内では調査団があゝの事件の真相と宝玉の謎を追っている。

そこでオレとねーちゃんはこの世界の工藤が閉じ込められてる場所の手がかりを調べるつもりや。」

「工藤くんが閉じ込められてる？」

哀はまだそれは聞いてない。

「ご神体にこの世界の工藤が閉じ込められてんのが映った。」

哀もお姉ちゃんが閉じ込められているのを見た。

確かに目的は同じ。

「詳しいことはわからへん。」

しかし神官たちは2チーム別れて研究を行っていった。

1つはよくわからん物体を作ろうとしてるようだが、もう1つは神の道と呼ばれる場所を捜していた。」

「その名前は確か……。」

哀は閉じた本のページを捲った。

「神の道。科人や行人がこの世界に訪れるために使った道。ご神体の向こうの世界ということや。」

その本にも出てきたやろ。」

「満月の夜 罪を犯したる者 天に道を作り 真紅の高き塔に身を隠すべし……。この部分ね。」

哀は本を読み上げた。

「ねーちゃんが閉じ込められていた塔の屋根の色は紅。盗賊も十三夜に宝玉を奪いに来ると予告しとった。」

事を起こす満月までまだ時間があるということなのかもしれへん。」

それならベルモットがワザと哀を解放したのかもしれない。

どういふ結果を招こうとも時間は限られている。

「分かったわ。あなたに言われた資料は全部目を通したけど、ご神

体と宝玉の関係を調べる必要があるみたいよ。

でもここに居ても始まらないわ。」

「ああ、黒服の男が使った天井裏の道は調べてある。

どこでも連れていったる。」

「それじゃ宝玉を保管していたと言っ広間に招待してくれるかしら。」

「よっしゃ。行こうか。」

平次は哀の手を引いた。

## 28・神のみち（後書き）

くじらです。

形は出来上がっていたのですが、いろいろとありまして遅くなりま  
した。

忘れられてたかも。（苦笑）

ゆっくりですが続けて行きたいと思ってます。  
よろしければまたお付き合い下さいませ〜っ。

## 29・コンビ

「僕を連れて捜査？」

「ああ。毛利さんとは別件だけだね。」

事件の流れで過去の話をしていた高木が意外な提案を出した。

あの夜あの場所にいた彼が城内に設置された調査団から外されとは思えない。何か策を高じたのだろう。

それよりも捜査に関わる情報を幼い少年に話してくれる理由をうやむやのままで済むわけが無い。

次に来る言葉を待ち構えていた。

「僕が城に潜りこんだ理由を忘れたのかい？」

高木の科白はコナンの予測を外した。

現世の彼もいつも一生懸命だった。

彼がどこまでコナンの正体に近付いているのか？

現世の彼より以上にこの世界の彼の前では注意しておかなきゃならないだろう。

「城にある宝玉は偽物だってことでしょ。それは城に居ないと調べられないんじゃない？」

コナンは警戒しながら答えた。

「儀式には宝玉を使わなくてはならないと民に擦り込むために利用されたんじゃないかって考えたんだ。」

毛利さんと同じ発想だよ。

事実、あの書庫で調べても更に昔には宝玉が儀式に使われた記録は残されていなかった。

神の崇高な雰囲気醸し出す為のアイテムに過ぎないと思うんだ。」  
彼は書庫にいろんな資料を調べてきたのだろう。

確か牛車の樽に城から運び出した資料があると聞いていた。

「・・・宝玉つて初めからあったのかな？」

コナンはふと漏らした。

「僕はまだ小さい頃だったからすごいとか思ってた儀式を見ていたけど・・・ショーアップならそうかもしれないね。

そこから始めなくちゃならないか？うん。

城の中は調査団が結成されていて思い通りに動けないよ。

城外なら尚更さ。大人数で動く相手に読まれるからね。宝玉の件は単独で動くつもりだったんだ。

でもこの聞き込みに同行させて欲しいと服部くんから頼まれてね。」

コナンは高木を見た。

彼は敵の組織の強大さを理解しているのだろうか？

そろそろ本題に入るのか？警戒しても彼はただメモを確認していた。

「高木さんが子供の頃だから・・・少なくとも15年くらいは昔だよ。かなり昔から関わっている人物に宛はあるの？」

コナンの頭には1人の人物が浮かんでいた。

「まあね。服部くんと目星を付けて来たからね。」

「・・・服部・・・の兄ちゃんから何か聞いてるんだ？」

「あの場所にいた彼は未公認でも調査団の一員だからね。僕にとって君も最年少メンバーさ。」

高木は少し苦笑い気味に言った。

彼も向こうで捜査を進めているだろう。

コナンが城の外からでも真実に向かえば、彼も必ず同じ答えを掴んで再会できるはず。

・・・・・・

「そろそろやな・・・。」

書庫を飛び出した平次と哀は天井を這う通気配管の中を移動していた。

城内は勿論、大広間も変わらぬ警備体制。

しかし合同調査の性質上、現場の軍との腹の探り合いが優先され、盗賊が出現したにもかかわらず強化するなどの措置はとられてなかった。

手探りで位置を確認していた平次は通気管の壁に金属片を差し込んだ。

ゆっくりとなぞるように慎重にスキマを滑らせ、指に伝わる感触に神経を集中した。

「よっしゃっ……ほな行くで。」

哀に送る合図とともに、金属片の先を抉るように突き立てた。

パン……

ゆっくりと点検用の窓が開いた。眼下には広い玉座の間が見渡せる。

小さな音にも警備が反応するかもしれない。

平次はゆっくりと廊下に繋がる扉を見た。

「誰も来ないようね。」

「盗賊に入られたばかりだっちゅうのに当てにならん警備やな。」

「こつちにとつては好都合でしょ。」

哀に急かされて平次はロープを垂らした。

先に下りた平次が辺りを警戒しても何も起こらない。

暗い大広間の一段高くなっている場所にぼつんと王の座が置かれていただけだった。

「玉座の間って言うのに宝玉を置く台と椅子くらいないのかしら？」

「いや、あの夜も特別な物は何もあらへん。だだっ広い部屋やから賊が隠れるところはあらへんかったからな。」

暗かったけど見間違えるはずはない。」

「それじゃあなたは宝玉を見たの？」

「置かれてたのはまんまるガラス玉のようやったな。でも盗賊が偽物だと言ってるん。」

「つまり本物は見ていない。本物を見たことのある者はいるのかしら？」

「それなら・・・現場の兵士じゃあてにならん。もつと上の神官・・・やはり軍上層部が関与してるんやな。」

平次はため息をついた。

そしておもむろに台座に触れた。

「この洒落た台座一個のためにこんなにぎょうさんの監視を付けるなんて軍も触れて欲しくないと思えやな。」

「どうしたの？見惚れるほどの細工でもされてるのかしら。」

じろじろと台座を見る平次に哀が近づいた。

「見てみい。あの夜は暗くて気がつかへんかったけど、これって琥珀っていうんやろ。」

平次の後ろにいた哀も乗り出して見た。

そして辺りをもう一度見渡した。

「この部屋の床も柱の一つ一つにも琥珀が埋め込まれている。」

「ここは玉座の間やし、そのくらいカッコつけるやろ。しかし見事なもんやな。」

平次は惚れ惚れする細工を一つ一つ見て歩いた。

「もしかしてこの部屋は城の中心にあるの？」

「そうや。」

平次の返事に哀は考えをまとめていた。

琥珀・・・あの夜彼と盗賊と話していた時浮かんできた言葉。

黄色い半透明の樹脂の化石。

絹で擦る事によって不思議な力が生じたことで最初に認められたことで電気の語源となったと聞く。

やはりこの城で使われるエネルギーと関係があるのかもしれない。そして琥珀の中に閉じ込められた虫は永遠の夢を見ているという。



「永遠の夢・・・。」

哀の頭に1つの言葉が引つ掛った。

「別に変なところあらへんな。御神体みたいな石もあらへんし壁もきれいなもんや。」

平次は壁を叩いた。

「そんなことしたら外に聞こえるわよ。」

哀は平次の腕を掴んだ。

「そやな。さてと目ぼしいものはなさそうや。次行こうか？」

「ええ。」

哀は垂れ下がっているロープを昇る。

「それにしてもあの盗賊はどこから情報を仕入れているんやろか？」  
そのロープを押えていた平次はぼやいた。

「早くしないと置いていくわよ。」

「あの姉ちゃんは意外とキツイやつちゃな。」

平次も急いで通気口に戻っていった。

・・・・・・

高木は確認するかのように見ていた手帳を仕舞うと胸のうちを話し始めた。

何かに区切りをつけたように顔つきが変わった。

「城から消えた少年・・・君のことはどこのメディアに隠されたまままだ。」

君が彼らにとって不利益なモノを持っている。それは君が捜していた少女も同じ。

服部くんは君がまた城に潜り込むことになるだろうって言っていた。

それまで君の代わりに自分が少女を守るから、代わりに君と一緒に捜査をして欲しいって。

僕も君を保護する必要があると思うし、警備隊が監視に付くと言ったんだが彼は僕を指名してきた。

・・・本当ははつきり言って・・・迷ったんだ。

今の状態で少女を城から出す事が難しいと判断したことには彼も納得していた。

それなのに・・・城から出られる彼が残ると言うのは我々では少女を守れないと思っっているからなのかとか・・・

彼がいくら剣術の達人であつても火器を使うあの夜のような戦いには難しいことは誰の目にも明らかなのにさ。

小さなプライドが目を曇らせていた。君を保護すると約束しても実行するのは君を知らない誰かだつてことに気が付かなくて。

君の代わりに彼が少女を守るから君を知る僕だから託したんだつてあの夜運命共同体なんて言ったことを思い出すのにタイムラグがあったことが情けなかった。」

話は子供相手に言う事じゃない。

「高木さんだつてメディアに隠されたあの事件の現場にいた1人でしょ。」

平次兄ちゃんと同じものを見たその目は他の警備隊員に無い大切な情報だよ。

立場を越えてぼくらに情報を流してくれた。必要だと思えば規律も破れる、形に捕らわれない高木さんだから託したんだよ。」

コナンは答えた。

「あのときは状況が状況だからかもしれない・・・こんな僕にも警備隊員というプライドってものがある。

また小さなものだけど、これを抑えることが意外と難しいもんだと気が付いたとき恥ずかしくなったよ。」

「誰にでもあるよ。・・・でもプライドはいつのまにか慢心を生む。

」

「子供のクセに人生経験がいつぱいって感じだね。」

「・・・そんなことないよ。」

彼に語られると自分と照らしあわして考えてしまふ。

慢心・・・油断・・・それがこの運命の始まり。

「・・・あの夜出会った君と服部くんの信頼関係が理解できないでいた。」

そして今日も君を毛利さんが同行させて捜査をしていた。

ただ付いてきたと言ってたけど、普通・・・危険を伴う捜査に係らせるわけにいかないよね。

関わる人たちは君に協力するのか？・・・と言いながらも返事も聞かずに僕もこうして捜査の情報を漏らしているか。

みんな君に何かを感じてるんだ。

誰もが周りの人を、自分を取り巻く人を信じられなくなることを恐るしく思っているはずなのに、

その僕が協力してくれる仲間を信じられなくていいのかってね。

この世界の流れに逆らうつもりがいつのまにか流されていたのかな。軍部の人間と合同調査なんて実のところ鬱陶しくて仕方なかった。

しかし彼らも彼ら自身の膿を出そうしている。

この世界は異常だよ。その流れに僕も染まっていたみたいだ。」

高木は深く考えながら話す。

「科人だとされた彼が死んだ後も鬼はこの街に現れた。

毛利さんは警備隊をやめて、なんでも屋になつた後酒に酔つたまま軍に食つて掛つたよ。

『彼が科人だったのは嘘じゃねえのかっ！証拠を見せろ！？』って騒ぎを起こしたんだ。

証拠は公開される筈がない。科人は1人じゃない。彼らの正体を暴く手法が公になれば彼らも警戒するからとね。

おかげでどこにいるか分からない科人を排除しない限り鬼が現ると

民の誰もに知られることとなった。

それからも人が街から消える事件が起きている。それが誘拐事件か失踪事件なのか分からないまま。

失踪事件として我々が捜査をしてゆく軍の影がちらつく。

しかし未だ科人を捕らえたという報告は無い。」

「人が消えたなら民が騒ぎだすんじゃない？」

高木は首を振った。

「そうはいかないんだ。

この国は西からも人がやってくる沢山の交流の中心だし、行人がご神体から現れて集まる場所でもある。

旅人はこの街を駐留して出て行くし、行人は判決を受けてこの街を去って行く。

だから住人の素性を虱潰しに調べるのは困難なんだ。

隣に住んでいる人が科人ではないかって猜疑心が生まれる。

得体の知れない科人の存在が怯えた人々の口を塞ぐ。

しばらくすると疑わしいと噂された人物はもちろん、その家族や身近な関係者までも一夜にして姿が消していった。

ある者は神が怪しきヤツを葬ったとありがたがり、

ある者は権限を取り上げられた警備隊が近所で極秘捜査を行ったと付き合いのある隣人をも疑う。

このままでは・・・ヤツラの行動が我々を、他人を信じられなくなるという最悪のシナリオが進んでいる気がしたよ。」

「・・・。」

コナンの言葉が途切れた。

手を下した組織によって全てが消され、その声は聞こえない。

・・・手口が黒の組織に似ている。

「消されれば科人だという証明はできない。ただその人物が軍に盾突いた事実を見つけた話を聞いた。

毛利さんは奥さんと別居して自分を餌に犯人を釣ろうとしたんだ。

自ら囿になつて真実を見つけようとしてたんだ。

奥さんと蘭さんの保護を頼んでね。けれど蘭さんは父親から離れなかった。

子供でも感じる部分からそうさせたんだろう。

けれど軍に目をつけられてるのは変わらないから我々の仲間がこっそりと彼に付いていたんだ。

それを知つてか無茶な捜査を控えていたが、今日仲間のタレコミ屋の男が殺されたと報告があつた。

我々のミスだ。もっと組織としてのやり方があつたはずなのに。」

高木は下を向いたまま。

「旅人が集まれば噂が集まり秘密結社などの名前が誰もの耳に入ってくる。

さらに民の不安を沸きたてる。

その情報が嘘がどうか国王が神の名の元に排除する。その現場を任されているのが軍部だろう。

賑やかな街の情景とは裏腹に闇はもっと深いんだ。」

高木はため息をついた。

燦燦と輝く光で出来た影はくつきりとした黒を地に焼きつける。

コナンも静かに息をはいた。

「・・・この捜査は危険が伴う。覚悟はいいのかい？」

「大丈夫だよ。高木さんは肩に力が入りすぎるよ。僕は・・・運命つてヤツに悲観になつてないから。」

肝の据わつたコナンの態度に首をすくめた。

幼い子供が恐怖を知らないのとは違う。

その雰囲気は彼の知る頼れる男の姿と重なって見えた。

「それじゃ、元神官だつた阿笠さんの家に行こうか。こんな僕だけで仲間として力を貸してくれるかい。」

「うん。」

確かに彼に親しい服部と2人では状況によつて落とし所を失つてしまふ危険がある。

目暮隊長やおっちゃんでは話してくれないだろう。

立場が明確にできて、警備隊の組織の末端の彼ならまだ方法がある。コナンは返事とともに立ち上がった。

詰め所を出ると待ちくたびれた黒と黄色のシマシマが欠伸をしていた。

周りを囲む警備隊員が近づくと威嚇を忘れずに主の友を待っていたのだ。

「ハンシン待つてくれたんだね。」

コナンは背に乗つて撫でる。

嬉しそうに体に似合わないカボソイ鳴き声をあげた。

「ちよつと・・・コナンくん？」

「高木さんも早くっ！」

高木は囲む警備隊員に済まなそうに頭を下げ、オツカナビックリ跨った。

ハンシンはコナンの合図に立ち上がり歩き始めた。

「なつ・・・なかなか・・・良い乗り心地だね。」

高木はご機嫌を取るかのように撫でながら言う。

ハンシンも気を好くしたのかスピードを上げた。

「ちよつと速くないか?・・・一応制限速度つてものがあるんだけどさ。」

高木はコナンにしがみ付いていた。

「大丈夫でしょ。ハンシンは牛車じゃないから。」

「あのねー!」

「それより他に何か、直接じゃなくていいから気が付いたことはな

かったの？」

「・・・服部くんはあの晩に軍部の者ではなさそうな黒服に身を纏った男と出会っているんだ。

あの夜に僕等と盗賊団と軍・・・それ以外にも誰か居た。

その者たちはもう城を抜け出しているようだが、軍上層部と繋がりがあのようなんだ。

軍の資料さっきの牛車で持ち出した軍の資料を使って、目暮隊長を中心としたメンバーで捜査を行うことになる。

きつと今頃は毛利さんに捜査に参加するように話している筈だよ。」

高木はコナンにも捜査方針を漏らした。

はつきりと言えないが服部の見た黒服の男の心当たりはある。

鬼と遭遇した時に見たニット帽の男がいるとなると・・・それはやはり。

危険だ・・・そう思えて仕方がない・・・しかし・・・合法的に銃を持つ警備隊員がいるといたのでは大違い。

それでもあの男が関わっているのなら死をも覚悟しなくちゃならない。

コナンの口元がきりつと引き締まった。

「やっぱりな。君を見てるとある少年を思い出すよ。

これからは危険を伴う捜査になる。だから迷わず僕を頼って欲しいな。」

「うん。高木さんとはくは運命共同体だからね。」

「運命共同体ならもう少しスピード落としてくれないかな。うわあっ前から暴れ馬がっ！」

高木は叫びながら言った。

### 30・動く・・・

ハンシンは快調に飛ばした。  
博士の家はこの街の外れ。

陽が消えようとするトワイライトの寂しい光が急かす筈の家路を急ぐ人影は疎ら。

闇の始まりにハンシンの影も吸い込まれていった。

しばらくするとハンシンが驚いて急にスピードを落とした。

「どつどうしたんだい？」

「前が何かで塞がっているんだ。」

コナンの後ろから高木は目を凝らした。

大きな牛車を横にして道路を封鎖していた。

その周りには大きな身体の男が数人立っていた。

「停まれっ！迂回しろ。」

男たちは軍の兵士。ハンシンの威嚇に引きつりながらも身体を張って塞いでいる。

「警備隊の高木です。何かあったのですが？」

「ツカエナイ警備隊かあ。今日殺しがあっただろう。その犯人が逃げ込んだのさ。」

「あれは警備隊が捜査している事件だ。」

高木は怒りを押し殺して反論する。

「仕事が遅いからな！」

「捜査は進んでいる。勝手な真似は越権行為だ。」

歯を食いしばって涌き上がる怒りを押えているのだろう。高木の語尾は聞きづらくなっている。

コナンは高木のシャツを引っ張った。



「殺られた男は科人の情報を集めるから殺さたんだ。自業自得とも言えるが、お尋ね者の科人の足跡を残させたんだんだから、犬死じゃなくて仏さんも浮かばれただろうよ。」

軍人の言う通り。殺されたタレコミ屋は毛利さんの元コンビ。

10年前の一件の真実を探るための行動。

そんな軽い言葉で彼の一生を語られたくない。

「加害者が科人という根拠は？」

「上が犯人は科人に断定したから我々現場が作戦行動を開始したんだ。」

まあヤツらも秘密を暴きに來た邪魔者は消しに掛かったんだろっな。だからもうおまえら警備隊から我々に捜査権が移った。

それにヤツを擁護する悪党の拠点ごと包囲したわけだ。もう邪魔するな。用があるなら迂回して進んでくれ。」

高木は荒っぽいタイプではないと甘く見たのだろう。兵士は2人を手で軽くあしらった。

「高木さんっ。」

コナンは高木の服の裾を思いつきり引っ張った。

彼の想いは分かる。しかし・・・

「ならば封鎖した範囲を教えてくれないか。迂回したらこっちの仕事に差し障るんだけど。」

高木の前に飛び出したコナンが言った。

「子連れかよ。全く仕事熱心でいいことだな・・・が、こっちは上からの指示で閉鎖している。」

科人を相手にしてるんだから、問い合わせてくれなんて言うんじやねえぞ。

言われてもごめんだけだな。道は自分で捜してくれ。」

こっちの話を聞くほど暇じゃないと兵士は煙草を吹かした。

こいつらに緊張感はない。

「・・・ごめんね高木さん。・・・割り込んでやって。」

諦めてハンシンに乗った2人は迂回路を捜しに急いだ。

「嫌がらせにしか見えなかった・・・けど・・・。」

高木は言った。冷静さを保てなかったバツが悪そうに拗ねたように。  
「末端にケンカを売っても騒ぎが大きくなるだけだし。」

コナンの言葉に高木は黙って頷いた。

彼のほうが大人に見えた。

「・・・それより封鎖って向こう側の人を避難させていないんだね。」

コナンの言う通り家には幸せそうな光が灯る。

「急いで避難させたらパニックになって逃げられるだろう。」

「確かにそうなんだけど、軍は犯人が科人であの辺りに逃げ込んだって分かったのは顔も分かってるってことだね。」

軍が介入しているんだから、いくら術が使えるからって科人を捕まえることは出来るんじゃないのかな？」

コナンは子供らしく聞いた。

それが難しいことは科人である自分ならばと置き返れば容易に想像できる。

「ふふふ・・・いいんだよ。僕を元気つけようとそんな話をしなくても。ありがとうコナンくん。」

警備隊も軍隊も科人や鬼に対して完璧な仕事してるわけじゃない。でも僕は落ち込んだじゃないさ。」

高木は優しくコナンの頭を撫でた。

「顔が分かっててもだめなんだよ。科人は術で変身することができる。それが変装を得意とする白い盗賊団が科人だと言われる理由の1つにされてるんだよ。」

変装能力を持つ科人がいるということか・・・コナンはふと思った。  
「それじゃなかなか捕まえるの大変だね。」

でもオカシイと思わない？

高木さんは言ってたじゃない。疑われた者を夜のうちに誰も気がつかないうちに一網打尽にするってさ。

軍には科人を捕まえる何か方法があるんだとしてもさ。

周りに悟られないようにしなくちゃならないはずなのに、ここに居ますって軍が存在剥き出しだもん。

他に目的があるのかもしれないよ。」

確かに博士の家を取り囲むように包囲が続いてる。

暗くなりはじめた家々から明かりが灯った。

「さつきから何を捜しているんだい？」

包囲する兵士の隙間に目をやるコナンに高木は言った。

「抜け道だよ。」

いたずらっぽい眼でコナンは答えた。

おっちゃんに捕まるまで子供たちと工藤邸の探検をしていた。

そのとき歩美ちゃんがいろんなことを教えてくれた。

子供たちしか知らない地図にない道。

早々と役に立つとは思わなかった。

.....

「他にリクエストはあるか？」

平次は聞いた。

もう天井裏の配管を利用して行ける場所は限られている。

しかしそれは彼女が閉じ込められていたと言っ塔に繋がる通路と敵の本陣の前の通路など。

残った場所はどこも近付くのは危険すぎる。

かと言ってこの姉ちゃんも素直に言うことを聞くタイプにも見えな

い。

誰かと同じで好奇心が渴き切るまで突き進むだろう。

いや・・・好奇心じゃない・・・さっきから彼女の眼から悲壮感を感じるのは何故？

暴走しそうなタイプには見えないが、張り詰めた糸が見え隠れするポーカーフェイス。

いつもと違うブレーキを掛ける役目なんてできるのだろうか？

平次は哀の返事を待っていた。

「・・・もう1度・・・科人とこと話してくれないかしら？」

「まず・・・玉を使わず不思議な術を使える者と言われている。」

「玉を使わないと術が使えないのは国王なんですよ。」

「そうや。」

「じゃあ。あの夜警備に廻されたんでしょ。国王の顔を見た？」

「・・・名前は聞いたけど・・・見てへんな。民間人をそんなこの警備にまわせへんやろ。」

「それじゃ国王がどこにいたの？」

「確か・・・副長が玉座の間から国王の警護に廻したな・・・。」

「どうして国王は術を使つて盗賊を捕まえないのかしら？だって兵隊も大勢いるんだし宝玉があれば・・・。」

「そう言えばそうやな？国王が宝玉のありかを知らへんはずはないか？ちよつと探ってみるか。」

「資料を読んで感じた事は国王を崇めながらも存在感の薄さ。」

鬼だとか科人だとかの調査をしているようだけど国王の名前は出て来ない。

神官の代表が国王なのに体制の広報に使われているしか思えない。」

「昔はどうか分からへんが、最近表に出てきいへんし発言も聞かへんもんな。」

宝玉に目がいつておつたが使う本人は忘れてとつたわ。

あの秘書官が鍵だろうと睨んでるんやが、軍が相手となると突破口がな。・・・正面突破しかあらへんか。」

「・・・秘書官とは会ったの？」

彼はベルモットを疑っている。確かに彼女が真実に近付くための壁になるだろう。

「見ただけや。まだはつきりと言えへんけど、今まで上がってきた報告書に彼女の目撃証言だけ多いんや。

あの惨劇やで。どうしてもアリバイが在り過ぎると思えてならんのだや。

ちよこちよこ情報は仕入れているが、これって言う根拠はまだなんや。」

平次は苦笑いを浮かべながら言った。

彼も目の付け所は間違っていない。

しかし彼女の目的の1つは哀に薬を作らせること。

一緒に行動する事は危険であっても彼が真実に近づく近道になるはず。

それが彼を元の世界に戻す1つの方法ならば彼を援護してもらえそうな調査団の面々に賭けてみよう。

「・・・ここからは。」

「今までもそうや。気にする事やない。」

平次は哀が思ったことが通じているように答えた。

「国王のおるフロアを調べてみるか。いざと言うときは・・・。」

平次は刀に手を掛けた。

「覚悟は出来てるわ。」

哀は頷いた。

.....

「ちょっと堀の上ならハンシンから降りて歩いた方がいいんじゃない？」

「ハンシンはネコ科だよ。映画で電線を走ってたネコがいたでしょ。」

コナンは笑いながら言った。

運がいいのかこの辺りの住宅は平屋ではない。ハンシンを隠すくらい立派なモノが多い。

目立たないとは思えないがコソコソと博士の家に近づいている。道を歩く住人も兵士の姿を見ない。

横の建物から夕ご飯なのか楽しそうな子供の声も聞こえてくる。軍に囲まれた場所から幸せな声の聞こえてくる違和感。

動き出した軍隊は上からの命令を遂行するのみ。

個人の感情は押し殺され、統一した考えの元に目的を全うする。

高木はそつ銃の弾を確認した。

### 31・国王の宝玉

コナンを背に隠し高木は銃を片手に博士の家に近づいた。  
2人を降ろしたハンシンは緊張感もなく顔を洗っている。

苦虫を潰したような高木の顔も気にならず欠伸までをした。

陽の落ちた街はそれぞれの家から漏れる灯りでは隠れているであろう兵士の姿など分からないだろう。

だからといって様子を伺っていても状況が変わる様子もない。

壁の向こうから幸せの会話が漏れてくる。

高木の額には冷たい汗が垂れてくる。

引き金を引くようなことは軍と自分の争いに壁1つ隔てただけの幸せを争いに巻き込むことになる。

「何をするために警備隊に入隊したんだ？」

僕は人を傷つけるためじゃない・・・人を守るため・・・信じるものは何か・・・答えは結果でしか見てもらえない・・・」

お互い銃を手にする軍と警備隊は親戚のようなもの。

それに小さな銃が兵士を相手に戦力になるのか？

心の中にある正義に自問自答する時間は長く感じた。

「誰もいないね・・・」

いつのまにか高木の前に出ていたコナンが言った。

2人はようやく博士の家の前までやってきた。

月が丸く優しい光で家を浮かび上がらせる。

投光器もいらない明るい場所では隠れる事は無理だろう。

それは軍にも同じこと。兵士の気配を感じなかった勘を信じて闇から飛び出しドアを叩いた。

「誰じゃな？・・・君はっ！？無事でなによりじゃ・・・」

博士はコナンを部屋に通した。

一緒にいるひよろつとしたやさしそうな顔の男も警戒しながらも招き入れた。

「服部くんはどうしたんじゃ？それに後ろにいる君は？」

「彼は我々の仲間とまだ城の中にいます。申し遅れましたが僕は警備隊員の高木です。」

高木はコナンを遮り身分証明を見せた。

「そうか・・・君たちがここに来たということは・・・そうだな・・・。」

城の中でいろいろなものを見てきただろうコナンたちなら博士の正体が知られることは分かっていた。

そして警備隊員も同行させたとなると隠して時間を浪費するのを避けたかったのだと解釈した。

博士は覚悟を決めて椅子に座った。

コナンたちが博士と向かい合って椅子に座る。

それは即席の取調室のようなもの。

博士は2人の視線を避けるように窓に顔を出す月を見た。

1日ごとに月は美しい円になろうと輝いている。

「人は時の流れに逆らってはならない。身を委ね自ら出来ることをするしかない。」

わしも命を賭けて立ち上がった皆に報わなくちゃならないのう。」

博士は歩美たちに見せた温和な顔を見せた。

「博士にはたくさん聞きたいことがあるんだ。でもその前に軍がこの辺りを囲んでる。」

科人が逃げ込んだと言っていたけど、ぼくはそうじゃないと思う。

博士には心当たりはあるんじゃないのか？まずはここから離れよう。

「

コナンは早々に切り出した。

「軍は騒ぎになるような遣り方では来んぞ。」

「状況は日々変わっています。」



城で起きた暴動で城内に警備隊と軍と合同で調査団が設置されました。

軍の内部にも協力を求める者と調査団排除を唱える者がいます。軍がどう判断しどう動くか……。」

組織には保身に動くものもいるはず。過去を隠していた彼の真意を調べなくてはならないのに軍がいてはそれどころじゃない。

高木は重要参考人の博士の保護を考えていた。

「合同の調査団じゃと？とうとう軍部のど真ん中に陣を敷けたのか。」

報道されているだろうことを博士は驚いて見せた。元々信じていないのだろう。

「僕もその1人です。そして非公式ながら服部くんも加わりました。一人一人の力は微々たるものですが、これが始まりなのです。」

何が起きるのか悲観になって足踏みしてる訳に行かないんです。」

「形式だけじゃないのじゃな。軍を相手に戦争を仕掛けたようなものじゃ。並の覚悟じゃすまんぞ。」

博士は呟くように言った。

「分かってます。」

高木は強く言った。

「しかしここら辺で軍に包囲されていると聞いたがわしの事じゃなかろう。」

「そうでしょうか？」

軍が姿を隠さずに強行しているのは科人が関与している事を公にするつもりだからでしょう。

軍の強行派なら疑い目を逸らすには生贄も必要だと考えてもおかしい。

阿笠さんは元神官。軍に過去は消せないのだから。」

高木も軍と関わって手口を考えていた。

「わしだけが科人の研究者というわけじゃないぞ。

それにわしを排除するなら闇に紛れてこっそりと始末されておる。」

「なぜ決めつけられっ。」

ドンドン・・・ドンドン・・・

不安定なリズムでドアを叩く音がする。

一瞬にして高木の言葉はもちろん、息遣いを残してすべての音を遮った。

兵士なら問答無用で飛び込んできても良さそうなのに静まったままのドア。

民の目の前で形だけでも紳士的に連行するつもりなのか？

高木は銃を取り出すタイミングを逸していた。

「マルクト。」

博士はドアに身体を寄せて囁いた。

「ケレル。」

・・・合言葉。

高木はゴクリと唾を飲みこんだ。

「・・・どうしたんじゃ？」

博士がドアに耳をあてた。

「鈴木会長が軍に拘束された。娘さんたちも一緒らしい。モグラに繋ぎを取っておくが定時連絡はできない。」

ドアの向こうが早口で話し始めた。

「了解じゃ。計画通りわしも動くでしょう。」

ドアの向こうの気配はすうーと消えた。

「・・・博士は何者なのですか？」

不審の目を向けるコナン。その前で高木は声を上げた。

「君らが調べたとおり元神官じゃよ。

でも軍の狙いはわしじゃなかったようじゃな。

・・・鈴木会長が軍に拘束されてしまった。・・・元々軍部とは折り合いが悪かったからのう。

娘さんたちも連れて行かれたようだ。」

「鈴木会長って鈴木財閥の?」

意外な名前に高木の声は慌てていた。

「園子のお父さん……。娘さんたちって?」

「なぜ会長が狙られる? 科人の研究に関係していたのですか?」

「詳しいことは繋ぎを待つしかない。

彼が資金提供はしていたのは昔の事じゃ。鈴木会長は見せしめに使われたんじゃないよ。

・・・やはり話さなきゃならんことが多すぎるのう。」

博士は目を瞑った。

「黙ったら分かりませんよ。早く話してください。急いで会長を解放する交渉をつ。」

高木の気持ちが早まる。

「軍だつて命を取りはせん。目立つ行動をしたうえに民が相手なら紳士的に対応するじやろう。」

はて、どこから話せばいいんじやろうか?」

この後に及んで尻ゴミしているわけじゃない。

「根本から理解できてないんだ。

神官とは何者なんだ? 鬼や科人の研究をしているということとは分かった。

けれど研究は国王の元で進めてるはず。国家機密にあたるんじゃない。

そのために城に集められたのに秘密を抱えたまま自由の身になれるなんて考えられない。」

コナンにはわからないことばかり。推理をするにも考える術がない。

「そうじゃな……。知つての通りこの国の王は神に選ばれたという逸話の在る一族から選ばれておる。

一族が神に代わつて政をすることで背負う責任は民に隠している影の部分もある。

王になれなかつた者も国の要職を占め国を盛りたてる。

そして娘たちが嫁いだ四菱家や旗本家などのそうそうたる財閥が、用立てした資金で神官の研究を進めておつた。」

「鬼や科人の研究のことですね。」

「……。初めは違う研究じゃつた。」

ゼウスとデメテルの娘ベルセポネがハデス神の妻になった経緯を知つておれば、彼女が年に１度里帰りをするのを知つておるだろう。

彼女が天界に戻ると現世は春を向かえ生命の営みが再開する。彼女がこの世界に戻ると冬を迎える。

水はある、弱々しいが陽の光もある、冬を迎えなければこの痩せた大地に生命の営みをする時間が増える。

国王の直属でこの国が豊かになるための極秘の研究が進められた。

神官と呼ばれる研究者が集めた秘密機関。その名をオルファと呼ぶ。

「

「……。オルファ！」

高木の声が掠れた。

誰もが口にする事さえ気が気で無かつた言葉をあつさりと答えた老人に驚きは隠せない。

「それならその名前を隠す必要がないんじゃないの。秘密結社と呼ばれる意味が分からないよ。」

コナンは落ちて着いていた。

「途中で研究テーマを変更したからじゃよ。異を唱えたわしは神官の位を剥奪されたのじゃ。」

博士はコナンの話にあつさりと答えた。

「それでも組織というものは秘密を保持しなくちゃならないのでは？」

高木が言う。

「もちろんじゃ・・・が、わしは死んだのじゃよ。コナンくんはあの地下室で遺体を見たかもしれんな。」

「・・・あの白骨化した・・・ではあの遺体は誰なんだ？」

平次と見た遺体は神官の持つ数珠を持っていた。

白骨化するほど時間が経っていて、頭蓋骨の様子から男性のものと判別でき大腿骨が細かったのを覚えている。

体系が似ていても目の前にいる博士の足が悪いわけではない。

「やはり裏切り者の末路として放置されておったか・・・前国王のご遺体じゃ。」

国王は背丈といい恰幅の良い体系はわしと似ていたのじゃ。

あの日軍の不審な動きを察知した一部の者からの報告で影武者とこっそり入れ替わり、報道された死亡事故から免れた。

影武者に化けた国王も体制を取り戻そうと計画した矢先に亡くなったのじゃ。

ちょうどあの地下道は外されたわしは知らんことになっていた。

国王がああ場所で処分せよと命を下されたのじゃ。国王として国の中枢で朽ちたいと。」

博士はおもむろに立ち上がり実験器具の戸棚を開けた。

信じきれない高木は危険なモノを取り出すのかと懐に手を入れ、今度はしっかりと銃を握った。

「安心せい。王の証の宝玉じゃよ。」

博士は取り出した木の箱を開けて見せた。

「この玉が本物？・・・それじゃ城にある玉は偽物ということですか？」

透き通った玉の中に赤と白の別の結晶が浮かんでいるそれを高木は不審な顔で覗いた。

幼い記憶のそれとは別のもの。

「その通り、城内でも知るものはほとんどいないからのう。宝玉の力を使えるのは王の血を引くものだけじゃった。

しかし誰でも扱えるそれに替わる物を手に入れる方法を見つけた今では価値は分らんがな。

ただの飾り物の偽物でも宝玉があれば誰もが国王の威信を信用するじゃろう。

・・・これが無ければあの計画は実行には移せなかったはずじゃったが。」

コナンは顎の辺りの手を当てながら宝玉を見ていた。

「これを持っていながら身を隠している身分なのに阿笠と名のるのはおかしくないでしょうか？」

高木は疑いの目で博士を見ていた。

「この名は研究者としての許可を取るために必要なのじゃ。

研究家で名の通る阿笠一族の人間なら国もフリーパスで認めてくれる。」

警備隊なら分かるじゃろう。

この街の住人の素性など調べられなければ、軍とも仲が悪いからわしが身元照会を誤魔化すのも難しくはない。」

「それは分かりますが・・・しかしそれで納得は出来ません。」

高木は率直に思ったことを言った。

彼が言いたいのも分かる。

コナンは博士の証言にひっかかるものを感じながらも真実も含まれてると思えた。

「話はおいおいしよう。それよりここに留まっているわけにもいかなのう。」

博士は奥の棚を開いた。

それは小さな扉。

地下に繋がる階段が見えた。

「すまんが高木くんは灯りを用意してくれんかな。」

「えっ あっ はい。」

高木は部屋を灯すロウソクとその台を取りに少し離れた。

「コナンくん・・・いや新一。」

博士は高木に聞こえないようにコナンを近くに呼び寄せた。

「もしここに帰ってきたら君にこの宝玉を託すつもりじゃったんじや。」

「急に言われても理由がわからねえよ。それにっ。」

「わしの供述に疑問がある・・・ということじゃ。科人にもいろいろな者がある。人も同じじゃ。」

これからはその目で見て自らの意思で行動せよってことじゃ。

この世界の未来と君の生きる世界。そのバランスを考えられるのは君の目しかない。

科人は国王のように術を使うことが出来る。宝玉を使えばさらに力が広がる。

わしらは君にこの宝玉を託す以上どんな協力も惜しまない。」

「えっ。」

「これでいいですか？」

コナンの答えは高木の声に消された。

「ハンシンも一緒に来たなら彼も連れてきなさい。1人にするのは忍びない。2人が城に潜ってから寂しそうじゃったぞ。」

博士は灯りを受け取ると階段を前にコナンに言う。

呼び出しの口笛に走ってきたハンシンを連れて3人と1匹下りて行く。

コナンの首には宝玉がぶら下っていた。

### 32・反逆

平次は哀を連れて国王のいるフロアに潜りこんだ。

場所が場所だけに警備は厚く潜り込めそうにもない。

けれども警備の交替やその時間などを調べるだけでもプラスになる。

2人はチャンスを待つと同時に情報を得るために留まっていた。

「1人では危険です。」

あのメガネの男の声がした。

「この状況下で私が拘束されることはないさ。」

「しかし敵意を押さえられる者だけとは限りません。」

「それでも警備隊隊長の任に就いたんだ。なめられたらお仕舞いさ。」

「

答えていたのは軍部から調査団に参加している富沢隊長。

様子からして呼び出されたという処だろう。

「お待ちしておりました。」

警備兵が隊長に声をかけた。

「あなたが民から来たという副隊長ですね。」

隊長のお供として入室を許可されております。ただし刀はこちらで預からせていただきます。」

2人は顔を合わせた。

「国王の顔を拝観できるとはありがたいことです。・・・わたしは隊長にお供いたします。」

「では刀を。」

警備兵に腰の物を手渡した。

「さあどうぞ。」

開けられた扉をくぐった。

警備兵は口元に笑みを溢しながら扉を閉めた。



「調査に圧力掛けるんかつ。」

平次は吐き出した。哀もそうとしか思えなかった。

「かもしれないね。」

2人の後ろから声がある。

調査団警備隊代表の白鳥が部下を3人携えて立っていた。

「あんたは・・・隊長を疑ってたんか？」

「疑うなんてこれっぽっちも・・・彼が本気に調査すればこうなるのは必然なことでしょう。」

それより勝手に動く君たちの方が気になりますね。」

「せやな。けど隊長の後を着けてたやん、自分。」

平次の言葉は白鳥に流された。

ここはその敵の中枢。しかし真実を見付出すには行動を起こすしかない。

「たまたまですよ。あなたがたはここまで詰め所に戻ってもらいましょうか。」

後は我々に任してもらいたい。」

「危険は承知や。圧力を掛けるなら尚更覗いてったほうがいいんじゃないか？」

「確かにお偉いさんがいるでしょうし。面白いものが見つかるかもしれないですね。」

でも警備も厳重、どこかに適当な覗き穴でもありますか？」

もう1度平次は辺りを見回した。

「天井裏は使えない。ここは警備の都合上裏には入れない作りです。」

哀は恐る恐る辺りを見回した。

しかし・・・。

「あかな・・・自分どうしたん？」

震え出した哀の姿に驚いた。

「おいつ……。」

「どうした？」

「……いえ。」

哀は戸惑いながら答えた。

一瞬あのいやな匂いがした。

この部屋に向こうにあの秘書官……ベルモットがいるはず。

その緊迫が感覚を麻痺させているのだろうか？

「よく来られた。……ほお……君が例の……なるほど……  
まあお座りなさい。」

扉からすぐの椅子に座っていた黒衣を纏った神官が振り向いた。

「失礼します……。」

部屋には国王どころか將軍など幹部の顔はなく、正面の席に土門大佐の姿があつた。

兵士に周りを囲まれ大佐の対面の席に促された。

「調査は順調かな？」

民の不安をアオルヨウナ中間報告は避けて欲しいものだが、事と場合に寄つては仕方あるまい。

但し調査に対する信頼を損なわないよう頼んだぞ。」

民に信頼の厚い大佐が言つた。

「心得ております。」

残念ながら調査は困難を究めております。必ず立ち塞がる言葉。この秘密を解かなければ先に進めません。」

富沢はいきなり本論を切り出した。

2人を呼び出してこの部屋に通したのは、場合によってはと準備が  
できているということ。

長引かせても結果は同じ。

富沢の発言を部屋にいる全ての者が一瞬にその意味を理解した。静まりかえった部屋に富沢は自身の心臓の鼓動だけが聞こえた。

「オルファだろう。」

落ち着いた口調で発せられた土門の言葉。

二人は唾を飲み込んだ。

覚悟の上で放ったことの答えを震えを抑えながら待った。

「オルファが何を研究してたかは知っておる。」

阿笠博士は言った。

階段を降りて続く地下道。

コナンと高木は博士の後を続く。

「しかし研究から外された当時のわしに止める術は無かった。

神官の地位は剥奪され意見をすることもできず、城の地下に幽閉されてしまったのじゃ。

抜け出して対抗する研究を始めるために、一から研究場所とスポンサーを募ることから始めるしかない。

あの頃は必死だった。彼らよりも早い結果が求められたからのう。」

階段を降りるとそこは実験室。

高木は物珍しそうに置かれてある物を見ていた。

そして大事に置かれた石板を見つけた。

「あっコナンくんは触れるでないぞ。」

高木はどういう意味か分からずコナンの顔を見た。

コナンには通じていた。

灰原が閉じ込められた部屋と同じ物。正体を知る博士からの忠告だった。

「これは宮野博士から密かに預けられたモノじゃ。」

「宮野って言えば？」

「亡くなった・・・殺された宮野厚司、志保くんのお父さんじゃ。彼の立てた仮説を証明するためにエレナさんはオルファの研究リーダーとなった。」

鈴木財閥が研究に対する協力要請を断つても彼女は必死じゃった。その研究が仮説を証明するために必要だったのじゃ。

彼は未来の為に仮説を証明することを断念したのだと言うわしの声も彼女には届かなかった。

しかしわしが城を去った後彼女にも恐ろしい事実が気付いたのじや。

彼女も研究の中止、テーマの変更を願いでたようだが遅かった。叛逆の罪で彼女も始末された。

走り始めた汽車はブレーキを外し暴走した。

危惧していた通り理想を実現する夢のレールは協調よりも欲望に任せてポイントを切り替えてしまった。」

「鈴木財閥も知っていたのですか？」

高木は驚いた。

「富沢コンツェルンが国の事業の中心的な役割をして急成長した企業だと知っておるだろう。」

鈴木財閥も国の進める研究に資金を出してくれてはいたが、一本化した研究テーマに異議を申し立て中断した。

そのためがほとんどの研究開発事業の中心となって研究が進められた。

我々神官も感謝しておる。

君は軍に身を置いたのはさらに高みを目指そうとは思えないのかな。

「

「確かに会社は大きくなりました。しかしそれは父が望んだ事じゃない。」

富沢は言った。

急成長はしつかりとした土台の上に成り立つもの。小さな歪みも処置をする間もなく大きく成長する。

走り出した汽車の如く乗せられたレールしか見ていない。いや見られなかった恐怖。

「結果だよ。国内一の企業にのし上がったのだ。残念ながらヤツカミも多かったのだろう。」

「何が言いたいのでしょうか？」

「オルファの血判状は君の体に流れている同じ血で染められている。」

「わたしはわたしだ。わたしの血筋が過ちを犯したのならば、正すのも同じ血だ。」

富沢が軍に入隊できた理由として国と一族との関係を薄々感じていた。

やはり噂どおり父の死には裏があったと言うのか・・・犯人とされたライターの兄にも。

しかしオルファという言葉に顔色を変えないで済ませることができなかった。

「そう力ツカしてはお体に差し障るでしょう。彼には衝撃が強すぎるのです。」

神官と富沢の間に大佐が割って入った。

「人は現実を見つめ理想を求める。」

この国の民のため進める計画に賛同した君の父の行動が間違いと言うのか？

君をここに呼んだのは他でもない。

国王の名の下に国家反逆の容疑者を拘束した。

中間報告と同じく民に不安を掻きたてるわけにはいかないので公表はしていないが、

彼らの処分は今回の調査と関係ないということだけ覚えておきたまえ。」

土門大佐が言った。

「それは誰の事ですか？」

富沢が叫んだ。

「言うまでもない。だから君たち2人が部屋に通されたのだろう。」  
その言葉に富沢と京極が顔を合わせた。

・・・まさか・・・鈴木財閥のこと？

それじゃ会長を初め朋子夫人、綾子さん、園子さん・・・  
2人が動こうとするといきなり兵たちが銃口を向けた。

「わたしが話せるのはそこまでだ。」

「あなたの軍族の不正をも許さない正義が民に高い支持を受けられているはず。」

オルファは不正そのものじゃないのですか！？」

京極が叫んだ。

「何を言う！国を想わないものが城に居るはずがない。オルファがこれからの未来へ道を示す！」

・・・大佐も少々甘いのではないか？こんな調査団を潰すのは難しい事ではないだろう。

兵たちはこの者たちを監禁せよ。」

神官が声を荒たてた。

「待つてください。兵たちは命を預かったわたしの部下。神官と言えどもわたしを差し置いて命を下すのは止めていただきたい。」

大佐は銃を下させた。

「オルファは・・・わたしの知る限りかなり黒に近い白。

わたしの権限で容疑者は容疑者として扱う。もし彼らが無実なら君たちの手で証明しろ。

神が裁きを申し渡す。」

大佐は諭すように言った。

「わたしは神官だ。軍の指導者に意見を言う立場のものだぞ。大佐も大局を見る資質がないだけでなく、立場というものも理解しておらんようだな。」

神官の怒りは収まらない。

「国は民によつて成り立つもの。神官として国の行く末を想うなら民の声を聞くべきかと思うが？」

「民には意見を求めるよりも新しい世界を揭示するしかない。」

果たして誰の命に着いて行けば良いのか兵士たちは困惑した。

「かまわぬ。この者たちを拘束せよ！」

神官が命を発した。

うおおおおおー

再び銃が構えられる前に京極誠の身体が舞った。

脚が空を切り裂き、拳が唸る。

部屋の中から銃声が鳴る。

外にいた兵士たちも驚いて扉を開けた。

「チャンスって転がってくるもんやな。」

平次が立ち上がって駆け出した。

続こうとする哀は肩を掴まれた。

振り返って見た男の口元が笑っていた。

### 33・クーデター

哀が振り向くとその先に白鳥の顔があった。  
あの嫌な匂いは彼から発したのだろうか？

でもいつの間にかあの嫌な匂いは消えた。

勘違い・・・緊張を強いられて能力までもう麻痺したのだろうか。  
このままじゃ殺られる・・・。

哀の顔は強張っていた。

「子供の来るところじゃないんだよ。」

白鳥は子供相手に口調が強すぎたかと困った顔をしながら哀の頭を撫でた。

「君はこの娘を連れて詰め所に戻ってくれたまえ。」

従えていた部下の1人言々と平次を追って扉の向こうに走っていた。  
た。

哀は疑いの目のまま見送った。

わたしはまだ生きていなくちゃ・・・。

死にたいと思ったあの頃と正反対の意識。

異世界に来て更に強くなった気がする。

「さあ、行こうか。」

騒ぎが聞こえるフロアから離れることに哀は素直に従った。

「大佐は下がって下さい。」

相手は丸腰の男たち、兵士は威嚇しながらも要人の保護を優先した。  
銃口を向けられて真の動きはトップスピード。

人質を捕られ冷静でいなくてはこのいう気持ちを繋ぎ止めるのが精一杯。

パワー全開の蹴りは盾となった兵士を倒してゆく。



彼は有名な格闘家。先制攻撃の機会を失っては訓練された兵士であつても相手にならない。

騒ぎの中、部屋の外に出ようとした神官は入り口で白鳥と鉢合わせ、道を空けると怒鳴り散らす余裕も無く慌てふためく神官は、その様子に部屋の中へと気のはやる白鳥たちと押し問答。

後ろから転がつてきた兵士によって倒され抜け出す機会を失つた。

キュ        ン

「気が済んだろう。」

大佐は腰の短銃を天井に向けて撃つた。

一瞬皆の動きが止まる。

神官も銃声の方向に視線を奪われた。

ガシャ        ン！

一瞬にして天井から檻の柵が落ちてくる。

富沢や真、平次は部屋の隅に押し込められた。

「・・・気が済んだ顔はしてないか。

しかしここは国の中枢、騒ぎが大きくなればただでは済まないぞ。」

大佐の前に銃を持った兵士が並ぶ。

「せやけどこの状況を黙つとれと言つんか！銃口を向けてたんやで。」

「

しぶしぶ兵士の襟首から手を離して平次が言う。

「兵士は威嚇しただけだ。安全装置が外されていたか見たのか？」

「・・・素人に分からねん。」

一番に飛びかかった格闘家の真は兵器には素人。そんなことは分かるわけがない。

気が付いていた平次も言い訳に便乗した。

「君たちは民の期待を背負つた調査団だ。

調査の方法を練つて城に乗り込んできたんじゃないのか！

それなのに軍に力に対抗しようなんてできるはずも無いだろう！

富沢、おまえはどうなんだ？」

大佐の発言にイラつくことなく富沢は冷静に努めていた。

「軍は調査に協力すると宣言されています。

その軍部の中でも大佐は民にとつての英雄、同じようにわたしも大佐の正義に期待をしていました。

そのあなたか発せられた言葉をどう意味に理解しろと言つのですか？」

「思う様に理解すれば良い。

わたしも内部の人間だということだ。

だからこそ極秘事項を知ることができ、未来を考える事が出来る立場に居る。

君たちは外部からの調査団。

国の方針を民に理解でき納得するよう報告をまとめるのが仕事だ。」

「我々は軍の広報ではありません。」

檻の外にしながらも銃口を向けられた白鳥の意見は大佐に聞き流した。

「厳しいこの状況を打破するために国はいろんな政策を計画した。しかしそれで得られる富は期待をかなり下回る。

それでも良しとするなそれもよい。選択は自由であるべきだろう。

しかし可能性を求めて国王の号令のもとに神官たちは研究を続けてきた。

研究のほとんどが頓挫したが、オルファ計画だけが最終段階まで遂行できた。」

大佐はワザとらしくまた『オルファ』を口にした。

軍の重鎮が言葉を口にしたことに遅れてきた平次は驚いた。

「オルファの噂は国中に蔓延してます。

軍……いや国が関与していながら隠し通せなかった計画とは何なのですか？」

落ち着いた口調で白鳥が切り出す。

「おまえらが知ることのないことだ。」

床に座りこんでいた神官が立ち上がりながら口を開く。

「彼らが計画に行き付けなければいつまで経っても彼らの調査は終わらないですよ。」

・・・よいか、この国に生きる全ての民の幸せを願う。

しかしどんな計画も100%そうできるはずはない。

必ずそういう立場のものが出てくるものだ。

この計画に関与した者たちの中に漏れる者がいる。

今回の騒ぎは彼らを抑え切れなかったため軍が介入することになっただけのことだ。」

大佐は大雑把に答えた。

相変わらず神官は嫌な顔をしていた。

「だからその計画の正体は何なんや？それが分からへん。」

平次が口を挟む。

「知る必要はないっ！

大佐は口がすぎる。いったい何を考えておるのだ。彼らに国王の崇高なお考えなど理解できるものか。」

軍の幹部でもある大佐に対する神官の話し方は意見をする態度には見えない。

大佐が怒らせて神官に喋らせているように富沢は感じていた。

このタイプは雄弁に語りたがるもの。

大佐はチャンスを与えてくれたのかもしれない。

調査を続けても核心には届かない今は国の中枢にかかわる人間に喋らせるしかない。

「だとしても民の想いも受けとめなくてはならないでしょう。」

大佐は静かに言った。

「忠告しよう。」

流されて大局を忘れてならぬと。これは私だけではない。国王もそ

う思われているはずだ。

このようなものを城に入れること事態が間違っているのだ。

それに軍の人間と民が合同で動くとなると富沢は不適切だという意見を遮ったのは大佐だと聞いている。

軍内部でも要注意人物であるこの男に拘る理由は何なのだ？

・・・まあよい・・・こうなったからには処分は我々に任せていただこう。」

神官は動揺する兵士に富沢を拘束するよう促した。

しかし大佐の部下である兵士はお互いの顔を見合わせ動かない。

「調査団が軍の兵士と警備隊の混成したチームとなったのは將軍のご意向に沿ったものです。」

將軍を飛び越えての指示には承服できません。

そして彼を調査団に参加をすることを薦めたわたしの責任でもあります。」

大佐は言った。

「將軍もあの夜の事件がなければ突っぱねていただろう。だから大佐は甘いと言われる。」

その潔癖さが民の正義と同調する部分かもしれんが、人気に浮かれるから自分の立場を見失うのだな。

・・・なんだ貴様は？」

1人の兵士が神官の前に出た。

「我々は状況を理解できずにあります。」

しかし我々が信じられるのは大佐だけです。」

「わたしに口答えするのか！直接話を聞けるだけで十分だろう。立場を間違えるな。」

ん・・・何の真似だっ。」

兵士が神官の腹に小銃を突き付けていた。

「えっ！」

兵士のまさかの行動に富沢たちは止まったまま。

後ろの回った兵士が首の辺りを打ちつけると神官は崩れた。

白鳥が急いで倒れかけた神官の身体をささえた。

「黙ってもらいました。」

兵士は額に汗を滲ませながら言った。

「おまえは……。」

大胆な行動に大佐もあつけに取られた。

「勝手な所業をお許し下さい。」

彼は大佐の監視役、このまま戻す訳に行きません。

大佐にはもう立ち上がって頂きたいのです。

他の部隊の兵士も我々からの連絡を待つております。我々の命は前線の戦いから大佐に預けたままなのですから。」

他の兵士が落ちた柵を解除した。

大佐を尊敬しているのは富沢だけじゃない。

「きみたちはそれでいいのか？監視は彼だけじゃない、ただでは済まんど。」

「心得ております。」

兵士たちは大佐に敬礼した。

「クーデター……ですか。」

この事態に我々も密着して調査させていただきましょう。」

白鳥は富沢の肩に手を遣りながら言った。

軍内部に浄化する力が残っている。

それは調査団にも力になる。

「きみたちの未来は保証できないぞ。」

「我々が国に対してクーデターを起こしたというのなら、

国王が神に対してクーデターを起こしているようなものではないですか？

大佐が民間組織を影で組織していることは我々も知って居ります。

我々は大佐の部下ですよ。今のままでも未来は望めません。我々も組織に入れてください。

今立たなければオルファ計画で呼び出した鬼が国を滅ぼします。」

「その計画で鬼を呼び出したのか？」

「一体何の為に……国王は鬼の被害を受けた民の声を分らないのか？」

調査団の面々は驚いた。

「鬼は新しい世界に導くものだと言官らは言っていた。

新しい世界と交流がこの国を発展させる切欠になると。

この世界がハデス神によって統治されているように別の世界にも神がいる。

神のご加護を忘れて人間の強欲に走った謀略だと思う。

この計画を止められないのはわたしの所為だ。

新しい船には新しい水夫が必要、わたしがしなくちゃならないのはこの混乱の幕引き。

次の世代を託す君たちを巻き込まなくちゃならないなんて……。」

大佐は悔しそうに言った。

「これはクーデターなどと大それた事ではない。

オルファ計画がどのようなものか聞かされていても、それが全てではない。

真実を明らかにするよりもまずは計画の休止させる方が先になる。

調査団はそれでも納得できるかな？」

我々と行動を共にすることはその手を血で汚す事もある。」

大佐は白鳥に言った。

「我々は真実を民の眼に曝すのが仕事です。

同行するのは調査するため、各自の命を守るのは別のことです。

もし行動まで共にするならば調査団としてではなく個人の想いからでしょう。」

返事を躊躇した白鳥に替わって富沢が言った。

彼は軍人。他のメンバーとは立場が違う。

兵士が大佐を囲んで結団の氣勢をあげる。

「・・・まったく何もかも展開が早過ぎやで。」  
兵士が1人減っていたことに気が付いた平次はそつと呟いた。

### 34・鬼の正体

「鈴木会長は計画を知ってしまったから口を閉ざしたんじゃない。」  
博士は言う。

「そんな・・・我々は力になれないのですか？」  
高木はため息を漏らした。

「君は調査団なのに何も知らんのか。新一の捜査記録を見てるんじゃないのか？」

「恥ずかしながら・・・目暮隊長が読まれてますが僕はまだ・・・。」

毛利さんが持っていたという記録を元に目暮隊長が中心となって捜査を始めている。

しかし独断でコナンを連れて捜査を始めたことは間違いじゃない。

「そうか・・・新一も計画を知ってしまったんじゃないよ。」

彼はうすうすわしの正体にも気付いていただろう。共に戦うことを彼らに頼みたかったが言えなかった。

そして志保くんと2人は姿が消えてしまったのじゃ。」

博士の語尾が震えている。

「服部くんが新一の捜索をしていたが彼にも計画の話は言えなかった。」

・・・まだ話しても誰も信じはしなかったじゃろうな。

そして秘密裏にある組織を作った。その名は『白い盗賊団』」

「あの予告状を送り付けるあの男は仲間なのですか？」

「いや、騒ぎを起こしているあの盗賊とは別物じゃ。神官が組織を調査したときに間違えただけじゃよ。」

彼の出現がわしらが怪しまれなくて済んで都合じゃったがのう。  
しかし何者か分からんが彼も何かを知っておる。十三夜と予告状に



記しているからのう。」

博士は話を続けた。

高木は驚いた。城にいた人物しか知らないはずの予告状の中身を城外の者が知っている。

城に内通者がいるということ・・・

会長を拘束したということは軍が気が付いたということだろうか？

「この先に別のご神体がある。

コナンくんが宝玉を持って行けば神への道が開かれる。

計画はこの世界の人間が企てたこと。

神は罰を与えるだろう。

この世界と向こうの世界とのバランスが崩れる前に我々自身で解決したいと神に願いを届けて欲しい。」

博士はコナンの肩を叩いた。

「急に言われても博士はいままで何も話してくれなかったんだぜ。」

コナンは秘密主義の博士に不満がある。

自分だけじゃない。服部もまだ城の中にいる。

「そうじゃな・・・話すしかない。

頻繁に現れる鬼が計画の進行具合を示しておる。もう時間が限られている。」

博士の言葉は意味が分からない。

「確かに鬼の出現はこの世界に対する警告だと我々は報告を受けてますが？」

高木が言う。

警備隊には軍がしていることを調べる権限がない。

報告を鵜呑みにするわけではないがそういうことにされている。

「・・・世の中には知らないで済むならその方が幸せなこともあるかもしれない。

しかし同じ時間生きる者として責任を問われることもある。

鬼に自分たちがいた世界の扉を開けさせようとしているんじゃない。

そこは現世……鬼の正体は永遠の命を求めた現世の人間なんじゃないよ。」

「この世界に現れた現世人が科人なのでは？」

コナンも驚いた。

「鬼も科人も同じなんじゃよ。」

現世の自我を持つのが科人。自我を失い自らの存在をコントロール出来ないのが鬼なのじゃ。

鬼ならこちらからコントロールすることが可能だから現世への道案内をさせるつもりじゃった。」

「そんな……なぜそんなことが分かるんです？それに神がそのようなことを許したのですか？」

高木の声は裏返っていた。

「神も我々と同じように感情がある。だからこそ我々の想いを理解してくれる。」

そこを突いたのじゃ。

この世界が春を向かえる頃、現世では冬を迎える。我々の世界の反対の季節を迎えるのを知っておるか？

ハデス神はゼウス神の娘ペルセポネを妻とした。

しかし母のデメテルは消えたペルセポネを捜しオリンポスの集会にも現れず身を隠した。

穀物の神が仕事を放棄した現世は台地が荒れ人々は飢えに苦しんだと言われている。

ゼウスがペルセポネを連れ戻そうとしても彼女はザクロを口にしていたためこの冥界の住人になっていたのじゃ。

そこで彼女が実家に戻って暮らす時期はデメテルが仕事を始め現世は春を迎える。

穀物が育ち実りを迎えるまで彼女は母の傍にいる。

妻の居ない時期のハデス神は洞窟の奥にこもってしまわれた。

その時を見逃さなかったオルファは計画を進めた。

まず行人が来た現世とこの世界を繋ぐ計画を進めたのじゃ。

昔から数十年に1度はこの世界に鬼が現れたという記録がある。

彼らが何者でどこから来たのか神官が調べるうちに、疑問が沸き起こった。

神以外の者もいろんな世界を行き来できるんじゃないだろうか？

当り前のことと誰も疑問に思わなかった事に疑問を持った。

鬼が暴れるのは元の世界に戻りたいという本能なのじゃろう。

どういう方法を使ったかそっちの方の研究は分かんが彼らが現世から来たということが分かった。

あの圧倒的な力に脅威を感じ、領地を広げようなどという考えから交流してその力を手に入れる計画に代わったのじゃ。

息絶えた鬼の身体からゴナゴナに砕けた紅い石が見つかった。

これこそが現世の技術、これを作り出せれば世界を行き来できると神官たちは色目気だった。

そこで砕けた赤い破片調べると共に行人を使って実験が行われた。

ある時偶然にも鬼の持っていたものと同じ紅い石を手にした行人がこの世界に現れた。

彼は現世に送り返すことができた。現世では死者が蘇ったと大騒ぎしたことだろう。

紅い石に現世の者が同じような研究を進めているというメッセージが込められていると確信した。

不完全じゃが紅い石は冥界の住人にする石榴の実を無力化してしまいう力があることが分かった。

おかげで人の運命を司る女か神モイラの眼を欺く事が出来たのじゃ。

神官たちは紅い石と行人に絞って研究が続けられた。

しかし地獄や天国の死者より行人を使う実験の中止及び禁止を強行に言い渡された。

繋がっている全ての世界のバランスを崩すとな。それに行人を送り出すベイカの街の存在意義も失ってしまう。

そこで危険を省みず鬼を使った実験に踏み切ってここまで来た。これがよいはずはない！

この世界が狂いだしたことをそのままにしていはいけない。神がこもっていて我々の祈りが届かない時期ならば我々自身で計画を止めなくてはならん。

そこで力でもって阻止する作戦、我々と同じ想いをもつ科人を見つけること、対抗する研究を続けていたのじゃ。」

「科人・・・やはり鬼と同じように実験に？」

高木は博士の顔色を見た。

「そんなことはせん。」

鬼と科人は同じ現世人、同じ力を手にしようとしたが違う。

鬼は神と同じ力を手にしようとしたが科人は神の目前に仕えることで神に近付こうとした。

だからヘルメスの印が身体にあるんじゃ。

ハデス神と話せるのは国王と特別な力を持つ科人しかない。

コナンくん、わしは思いを共にする仲間を代表して君に託したい。」

「それってオレにこの世界を託すってこと？」

コナンは身構えた。

高木は思いもしない状況を深刻さに額から汗が滲んでいた。

そして隣にいる少年が科人だという事実にはチラチラとコナンの顔を見ていた。

「・・・そうじゃ。君が現世の工藤新一ならばその資格があるとわしは思う。」

神が科人となった新一を呼び寄せるたのじゃ。そうとしか考えられん。」

違う・・・でも・・・呼び出した君の悪い声は・・・ヘルメス神・・・？

オレはその行動の甘さからヤツらに薬を飲まされて時間の流れに逆らった。

あの薬は毒として作用せずにオレの身体を幼児化させた。

・・・待てよ・・・美國島での芳名帳にアイツの名前があったっけ。確か人魚の肉・・・永遠の命・・・若返り・・・時間に逆らう魔法。あの薬の作成にはそんな研究テーマも含まれていたのかもしれない。オレは・・・その罪の償うために来たんだ。

償うべきものは何か？

それを知らなくちゃならない。

「博士教えてくれないか？宮野博士の研究って何なんだ？」

「・・・紅い石の製造じゃ。」

哀が囚われたのはアポトキシンを作ること。

あいつにまた苦しみを背負わすわけに行かない・・・

「彼は元々は医学者だったのじゃ。行人を使つた実験に強制的に協力させられたんじゃ。」

わしが調べていた神を巡る世界論で見つけたパラケルスス理論によると、

紅の石によつてアルカナという万能薬が出来らしい。

彼は万能薬の研究を続けるために神官に志願して紅の石の研究を進めたのじゃ。」

コナンは「毒を作っているつもりはない。」という哀の言葉が頭に浮かんだ。

「国王の宝玉とはフラメルの紅い石とも呼ばれている。

これを持った科人である君なら『エリスの迷宮』を抜けられるはず。」

「・・・わかった。オレ行つて来るよ。だからその間は計画を進めさせないでくれないか。」

「それは僕の仕事でもある。警備隊だからじゃないさ。」

この世界は絶対に壊させない。守らなきゃならない人がいるから。」

高木は言った。

今まで少年と一緒にいて彼を科人だと思ったか？

服部くんも信賴していた少年でもある。僕だって同じ。そして・・・

「君が帰ってくるまでは必ず。」

「ああ、間に合わせるさ。」

コナンは1人闇の先へ走って行った。

### 35・舵を取るもの

それぞれの意志や希望とは関係なく同じだけ刻は流れる。  
自分の為だけに時間があるわけではない。

この国の本流を賭けた戦いは氣勢を上げる城内で密かに続いていた。

「そろそろ返事を貰いましょうか？」

サングラスの男が言った。

「わたしの願いはこの国の民が幸せであること。」

窓際のベットに横になりながら男は答えた。

「幸せね……。我々と手を結びたいと言ったのはそっちだぜ。」

神に反旗を翻すんだっ。この条件は飲むってことでいいんだな。」

「無論だ。神を恐れて立ち止まっていては時間が無くなる。」

男は歯を食いしばり、その瞑った目から涙が流れた。

「俺たちはこの国にとって悪だとも言いたいのかい？」

ここは神から任された行人に判定の下す地。

その長であるあんたが悪と言おうと我々は我々の仕事をしているだけ。

無理にどうこうしたつもりはないんだがな。」

「もちろんだとも。国の代表が愛する民を悪の道に誘うわけがなからう。」

「ほお……。この条件でも商談の意思ありか。」

決裂と考えていたのだらう。

意外な答えにサングラスの男は口笛を吹きながら言った。

「聞いた通りだ。」

サングラスの男は自分を部屋に通した將軍に言った。

「形式的にスジが通ったわけですな。」

国王は病魔に冒された身体。

後はわたしが代わってお話をお受けします。・・・こちらへ。」

「じゃあな王様っ。命あつてのモノダネだ。養生しろよ。」

將軍の案内でサングラスの男は出ていった。

扉が閉まる大きな音がした。

部屋にはそれより大きな声無き叫びが響いていた。

軍に連行された鈴木会長ら4人は城の南塔に隔離されていた。

長い階段を昇った先にある意外と広い部屋に、

表情を変えない鈴木会長の周りに震える園子と綾子の姉妹と蘭の4人。

ぼんやりと灯るロウソクの炎が揺れ4人の影を壁に映す。

その黒い影は気味が悪いうねりをあげ、まるで悪魔に囲まれたかのように思えた。

入り口の扉の前には見張りの兵士が付けられていたが、

強制的に連れて来られたのに鉄グツ輪もはめられず自由に動くことが出来た。

鈴木会長は彼らにとっても重要な人物であるのだろう。

部屋には格調高い調度品が置かれ、

花まで飾られてたテーブルにはお茶まで用意がされていた。

園子や蘭にはその理由が全く分からない。

ろうそくの炎が揺らめくたびに、

壁に掛けられた他の神々から忌み嫌われ冷酷非常な決定を行ってきたというハデス神の絵が、

不気味な笑みを浮かべ睨みつける。

絵画であっても疾しいことがない身に押し潰されるようなプレッシ



ヤーがかけてくる。

「温かいものを飲めば少しは落ち着くことも出来よう。」

震える園子たちを前にイスにとっしりと座った会長は、置かれていたポットでお茶を入れた。

「わたしがやりましょう。」

蘭は立ち上がりポットに手を伸ばした。

「待ってっパパも蘭も。」

ここは軍の用意した部屋よ。毒が入ってるかもしれないじゃない。」  
園子は急いでポットを取り上げた。

「心配はいらんよ。」

殺すつもりならこんな部屋に連れて来やしないよ。」

会長はお茶を飲んでみせた。

それを見た3人も顔を見合わせながら口にした。

「月が見えるな。かなり高くまで昇らされて疲れた・・・わしも歳なのかな。」

会長は立ち上がり窓の景色を見た。

視線を下げ町の様子を見る。

町には火の手が上がっていない。

この一件で怪我人は出たのだろうか？

しかし最小限で済んだことにホッとしていた。

「でもどういふことなのっ！」

落ち着くと怒りがこみ上げてくる。

「わたしたちは善良な民じゃないっ！」

連れ去られた時は蘭の腕にしがみ付いて離れなかった園子は声を張り上げた。

「園子・・・落ち着きなさいっ。」

綾子は歳が上だから少しは分かっているのかもしれないが、まだ詳しくは園子には話していなかったな。

これは鈴木財閥の宿命なのだよ。

しかしわたしたちは民に後ろめたいことはしていない。

これだけは胸を張って言える。

・・・しかし蘭さんまで巻き込んだのは・・・申し訳ない。」

「いっいえっ。」

蘭は何もいえなかった。

鈴木財閥の宿命・・・

鬼が現れたこの国では想像つかない何かが起こっているのは確かなこと。

しかし小さな頃から一緒に過してきた親友がそのウネリを中心にいるなんての信じがたいこと。

でも・・・あの新一が何も言わずに姿を消したのは・・・

やはりアイツも巻き込まれているのだろうか？

・・・きつとそうに違いない。

こんな大事件に気が付かないはずがない。

蘭はそう思えずにはいられなかった。

クリスが資料を整理していると部屋のドアが開いた。

「御客人ですね。お茶をお持ちしましょう。」

「いや酒にしてくれ。」

そう言うと言將軍は客人を奥の椅子に案内した。

「はい。」

連れの男は厳つくいかにも怪しい。

しかしクリスは気にもせずカウンターに並ぶ酒に目を向けた。

「・・・地ノ獄の男か。」

クリスの本当の顔。ベルモットとしてその顔は何度か使わせてもらっている。

この手の顔をした兵士はゴロゴロいるものだと言々と素顔で城内に乗り込んでいた男。

厳つい押しが強い顔はわりには記憶に似た顔が重なって浮限定されないため化けるには打ってつけ。

ホント重宝させてもらっていた。

今日は饒舌になってもらおうとアルコール度の高いものをチョイスした。

クリスはチーズとグラスの横にウオツカを置くとワゴンを動かした。

「こちらをご用意しました。」

「いいじゃねえか。」

サン格拉斯の男は瓶を手にして言った。

「そうですか。・・・ああ君は悪いが席を外してくれ。」

將軍はクリスに席払いを命じた。

「・・・はい。」

クリスは戸惑うような素振りを見せながら部屋を出た。

「良い女だね。」

「手に余るところもありますがね。」

「ほお・・・その暴れ馬を飼いならすあんたはやはりやり手だねえ。」

「

「そんなことは。」

將軍は笑いながら返す。

「戦争より政治のほうが向いてるんじゃないか。」

さて・・・そろそろホントの返事を聞かせてもらえねえか？」

「わたしも国の重責の一部を担っていても全ては王様が決定されません。」

もう返答を聞かれたでしょう。今更出過ぎた真似をしては民が許さ

ないでしょう。」

將軍は態度を崩さなかった。

「あんたが人払いをしたんだぜ。もう芝居は止てもいいんじゃないのかい。」

それともあれが本物の王だと騙せてるとでも思ってるんじゃないだろうな。」

ウオツカは語句を強めた。

「騙してるわけじゃない。」

この国の民を不安から落ち着かせる為に国王と言う象徴は必要なのだ。

民の拠り所になればそれが本物であつても良いのではないか。

しかし今はアレで充分かもしれないが時間は待ってくれない。」

「事を起こす準備は出来ている。モットイつけて時間が無いのはそっちの勝手だぜ。」

「城内まで下調べしてる貴殿方も分かっているのだろうか？」

天ノ国の皆様に知れたら貴殿方が戦争になるのでは？」

「天秤に掛けるつもりなら止めておいたほうがいいぜ。ここが戦場になるだけだ。」

「そんなこと想定内ですよ。」

絶対に呑む条件ではないと考えていた。

將軍の口調は変わらない。

やっぱり一筋縄ではいかないことは分かっていた。

ジンの兄貴から直接任された仕事だけにこの交渉も慎重に進めなければいけない。

「まだ手札が揃ったわけじゃないだろう。」

ウオツカはカマかけて見ようと誘ってみた。

「我々の手持ちのカードはご存知の通りです。貴方も城内を調べられたのでしょうか。」

城内に転がりこんだ行人を一匹始末したようですしね。

それに今頃下の方で騒がしくなってることでしょう。

足りなければ新しくカードを作ればいいですよ。」

「専門分野には抜かりはないってわけだな。」

記憶を取り戻した行人が存在するってことは科人がいるということ。まだヤツの底は見えない。

「こちらは条件を受け入れるということです。」

我々がエリスの迷路を突破する鬼の部隊を作る、貴方方は紅い石を手に入れる。

我々は現世という新しい土地を手に入れる、貴方方はご神体を通さずに行人を地ノ獄に連行できる。

それはそのまま天ノ国の弱小化につながる・・・お互いウィンウィンの関係ですね。」

「いや違うぜ。条件はそれだけじゃねえはずだ。」

「成功報酬は結果が出なくては話になりませんよ。」

「デメエ、初めっから。」

ウオツカは感情を押し殺しながら言った。

「どうでしょう？まずは十三夜に一報を期待してますよ。」

「迷宮を解く鍵でも見つけたのか？」

「さあ？」

ウオツカの問いに將軍は笑みを浮かべて答えた。

「・・・分かったよ。」

ため息交じりの返事をする。

任された以上手ぶらは許されない。

しかしベイカを掌握した男の前に今は退くしかない。

保険をかけといてよかったぜ・・・。

悔しそうな眼を隠すサングラスがプライドを守る唯一の救いだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8349a/>

---

エリスの迷宮

2010年10月16日02時27分発行